
普通人 × 異常人 =

Izumo

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

普通人×異常人Ⅱ

【Nコード】

N5666J

【作者名】

Izumo

【あらすじ】

——恋は盲目であると、誰かは語った。

そんな言葉を証明するかのように、ほぼ唯一の普通人である少年の周囲には、恋まっしぐらな”変人”が大量に居た。そんな彼らの、日常的な非日常的な日々を描いた変人コメディです。

A n s w e r ・ 0 1 : 一 人 称 の 通 常 人 (前 書 き)

注意：同一作者の短編作品「異常人×普通人Ⅱ」を先に見ておくとお得です。

Answer・01：一人称の通常人

恋は盲目であると、誰かは語った。辞書にもあった。

世界に数多ある物語は、その言葉を証明するかのような内容が多く見られる。

それらは学園物に限らず、ファンタジー物や政治物、コメディ―物にも見られる内容だ。

コメディ―の場合は、ラブコメって言っただけか。

ともあれ、それほどまでに、恋とは数多くの物語に絶対的必要項目として取り上げられていて、ついでに最初の内は全く気にしていなかったのにかという設定なんだそうだ。

また、それは架空の物語に限らず、現実でも適用されている設定らしい。

——いや、人それぞれだろう。

それが、僕の意見だったのだが……。

どういう訳か、僕の周囲にはストレートに突き進む恋愛馬鹿が数人いる訳で。

理性や常識を失う事ももちろんある訳で。

僕はそんな人らを、変人の部類に入れている訳で。

……あれ？ 論点が微妙にズレている気がするが……まあいつか。

「……馬鹿な思考は一時停止つと」

呟きながら、僕は読んでいた文庫本に栞を挟んで閉じ、両手を上げて背伸びをする。

パキパキつと、音が小さいながらも骨は鳴り、自分が一時間近く同じ体勢だった事に気付く。

集中すると、いつもこうだ。

とりあえず、文庫本を制服のポケットに仕舞って、文字ばかり追っていた目を休める為に周囲を見渡した。

スピーカーやマイクなど、数多くの機材があるここは、放送室。

もちろん、入り口が開いていたからここで休んでいた、などという理由でここに居る訳では無く、僕が放送部部長だからだ。二年生だけだ。

部員が少ないからなあ。

去年の三年生が卒業した事によって、僕一人となってしまったのだ。

ちなみに、その三年生との思い出を回想するなどという、文字数稼ぎみたいな事をするつもりは無い。変人ばかりだったし。

ともあれ、そんな訳あり(?)な放送室にて、朝七時から現在の八時十五分まで、一時間近く読書していたという事だ。

……待ち人が来るまでもう少し、時間があるな。

暇が極まってきたそうなので、何故そんな時間からここに居るのかを思い出す事にしよう。

家に居場所が無いから、なんて事は絶対無い。

ただ単に、同じ高校に通う為に今年から僕の家に住むことになった、一つ下の従兄弟が部活動の朝練に毎朝出ているので、暇な僕は一緒に登校をしているのだ。

ああ、朝練が毎朝あるって事は、僕も毎朝一時間近く放送室に居る訳で。

暇人ですみません、はい。

おっと、そういえば。

その従兄弟は黒人の血が混ざったハーフである為、肌が黒いから友達出来るかなと心配していたが、どうやら出来たらしい。

なんでも、筋金入りの変人だとか。

さて、その変人と僕の知り合いである変人を比べたら、どっちが変人なのかなあ。

あ、その知り合いの変人は待ち人その人である。

……おや？ 僕の紹介がまだだったな。

僕の名前は伊藤 いとう あきは 秋葉。

趣味は読書と変人観察。一応、普通人……のつもりだ。

変人と一緒に居ると、僕まで変人扱いされ始めたのはつい先日。
つとまあ、自己紹介はこれだけだが、間が持たない。

このままだと家族構成などをはな「またせたな、秋葉」

唐突に、鉄の戸が開く音と同時に一人の女子生徒が入って来た。
色んな意味で、ナイスタイミングだ。

背が高く、生徒会長の証であるバツジを、三年生の証である赤のリボンに重ね、制服の胸元に付けている彼女が、僕の待ち人である。

「待ってたって程じゃないよ、鹿嶋先輩。あ、おはようございます」

鹿嶋 かしま かわ 鞆華。それが彼女の名前だ。

もちろん、華と付くだけあって華やかな美人だ。

都会の高校で生徒会長を務める者は皆、美人であるという都市伝説級の言葉を信じさせる程ね。

そんな彼女が何故ここに来たのかというと、校内放送で朝礼の挨拶を行うからだ。

「ちなみに、今は何時だ？」

「ん？ えと……二十分だね。まだ後、五分くらい余ってるよ」

告げると、そうかつと言だけ呟いて、近くのパイプ椅子に腰掛けた。

ぎしっという、少々錆びついた音が響き、僕と鞆華の視線が重な

った。

しばしの沈黙。

そして、ノンデリカシー発言。

「鹿嶋先輩、太った？」

「——っ！？ し、失礼な！ 逆だ逆だ逆だ痩せたんだ！ 絶対痩せたんだ！！」

「ちよつと意味の分からない慌て方になってるよ。……おっと、もう四分前だね」

「全く、お前という奴は毎度毎度デリカシーの無い事を……。っというか、話の誤魔化し方がおかしくないか？」

返答が面倒な質問なので、無視。

とりあえず、放送機器のテスト起動をし、マイクを所定の位置にセツとする。

そして自分の席を立ち、鹿嶋先輩に譲った。

すると彼女は深呼吸一つして、こちらへと歩いて来た。

ふわりと、風も無いのに何故か僅かに靡いた長髪は、僕の横に来た時にシャンプーの香りを漂わせた。

俗に言う、朝シャンですかい。

俗なのかどうかは知らないが、そんな余裕があるのが羨ましい。

自分から早く家を出る朝にしてるんだだけだね。

ともあれ、時間とはすぐに経つものだ。

八時二十五分を報せるチャイムが、校内に鳴り響く。

それが鳴り止んだ時、彼女の朝礼が始まる。

対して、暇である僕はポケットから文庫本を取り出し、菜の挟んであるページを開く。

今度は、朝礼が終わるまで読書だ。

午前中の授業の間は、これといって変わった事も無く無事終了し、現在は昼休みを迎えている。

僕は教室内の喧騒を人生のBGMにしながら、予め買っておいたコンビニのパンを鞆から取り出し、封を開け始めた。

パンの名前はチョコサンドクリーム。

そして飲み物は、紙パックのコーヒー牛乳だ。

まあ、所謂甘党だ。

かといって、三食全てが甘味類という訳ではないよ？

朝食はスクランブルエッグとご飯だったし。どうでもいいけど。

とりあえず、封を開けてその身を露にしたパンを一口。

うん、甘い。

続いて、コーヒー牛乳の側面に付いているストローを取って差し込み、口に挿入し、口に銜え「ちよつと良いか、伊藤」

優雅な昼食を、突然の呼び声で邪魔された。

ちよつと不機嫌。

とにかく、声のした方へと首だけ向けると、二人の男女が立っていた。

男子生徒の方はツンツンの黒髪で、胸元のワイシャツのボタンが外れて肌蹴ている。

パツと見、中学生クラスのやんちゃ組所属みたいな奴だ。

そして女子生徒の方は、男子生徒の見た目とは対照的で、おっと

りとした感じ。

濃い茶色のショートボブの髪型で、クリアフレームの眼鏡を掛けている。

身長差のある二人だ。

……なんだ、バカカップルか。

「どうしたの、バカカップル。昼食中に」

昼食中にを少し強めに言ってみた。

表情に変化あり。困惑か。

「そ、そろそろバカカップルと呼ぶのは止めてくれよ……。ほら、一応俺達にも名前があるんだからさ」

「でも、二人はいつも一緒に居る訳だし意見も一緒だから、個別で呼ぶ必要も無いかなって思っただけ。だからバカカップル。二人一緒の時は、例えば片方と会話してもバカカップル」

「あ、ああ……。分かった分かった、もうそれで良い」

諦め顔で言ったバカカップルは、深い溜息と共に肩を落とした。

「つと、別に名前を忘れた訳じゃ無いよ？」

面倒なだけなのだ、うん。

ちなみに、二人はクラスメイトである。

「それで、用件は？——こちら、早く昼食に集中したいんじゃないの？」

「おわ、久々に聞いたな、お前の幼女声。その口元に何度心引かれぐぼふあ！　じよ、冗談だ冗談！　冗談だからその拳を下ろせ！」

仕方無く、拳を下ろす。

「あぶねーあぶね。……」つと、実はな？ 数日前に、この学校の生徒が三人、行方不明になったって事件があったんだよ」

「行方不明？」

オウム返しで問う。ちなみに、そのような事件は聞いた事が無い。するとバカップルは、食い付いて来てくれた事が嬉しかったのか、満面の笑みになった。

「そ、行方不明。一年の女子三人が、ある日を堺に姿を消しちまっ
てな。最近になって急に姿を現したらしいんだが、どうも様子が変
らしいんだ」

「え、何？ 他の子に気が移っちゃったの？ 次期浮気候補の身辺
調査？」

「え！？ そ、そうなの慎平君！」

「ちげーよちげーよ！ 何だきょーちゃんまで！ 絶対にそれは無
い！ ってか、俺にはお前以外、好きには絶対にならん！」

「……ほん、と？」

「ああ、本当だ。お前が大好きだ」

……何か、変な空気が展開し始めている。
バカップル粒子が散布されているようだ。
どおりで息苦しい訳だよ。

「あの、惚気るなら他でやってくれない？ 僕、昼食食いたいんだ
けど」

「元はといえば、お前が始めた事だろうが……」

怒りが少しだけ籠った視線が、僕に向けられていた。
良い気分はしないので、無視してパンを一口。
ふう、甘い。

「……まあ、続けるぞ。——その三人は真面目ながらも、なんとなく目立つ立ち位置だったんだ。何とかつつー男子を、陰ながら好きな奴らが集まるクラブに入っているくらいだな」

何それ？ とは特に聞かないでよく。目立つのに陰ながらの意味も分かんないし。

ってか、変なクラブもあったもんだな。

本人の公認だったとしたら、もっと怖い。非公認でも怖いけど。

「だが、戻って来てからというものの、すっかり隠者だ。運動部から文化部になった、みたいな」

「こらこら、文化部を馬鹿にしたら駄目だよ。放送部直々に天罰を下すからね」

「一応、ごめん」

分かればよろしい。

……言いたい事が大体分かってきた。

「その、行方不明である期間に何があったのか、というのを知りたいんだね？」

「さっすが伊藤、察しが良いな！ んでそれを、俺達三人で調べようぜ！」

「やだ」

もちろん、即答。

だって面倒臭いし。

合間に、コーヒー牛乳を数秒飲む。

なんかバカッブルが五月蠅いけど、気にしない。
と、その時だ。

コーヒー牛乳の入った紙パックが、ズズズツという音を立て始め、次第に泡だけがストローを上るようになった。

パンは残っているというのに、飲み物が先に終わってしまった…。

仕方が無いので、バカップルの話に耳を傾けてみる。

「——という訳だ。全く知らない女になんて興味は無い！ だってさ、俺の心にはいつもおま——」

惚気話になっていた。

臭い台詞は他でやってほしいよ、全く。

とりあえず、やっと昼食続行だ。

パンしか残ってないけど、まあ良いだろう。

Answer・02:ごく普通を心がけて

やっとこさ放課後。

生徒達が部活に勤しむ時間だ。

しかし、放送部は放課後、特に活動する事が無いので、現在は帰路についている。

自転車と電車を乗り継ぐ事数十分掛けて繰り広げられる僕の帰宅劇は、目だった展開も無いまま、自宅に到着した。

荒川区の住宅街の一軒屋へと。

うん、完全に一般人のそれだ。やっぱり僕は、普通人なんだなあ。などと、他人にしてみたら良く分からない事で安心しつつ、鍵の掛かっていない玄関口を開け、帰宅。

入ってすぐ、視界に入っただのは玄関と廊下のみ。

許婚やメイドが出迎えてくれたらなあっと考えたのは、中学一年生の頃の忌まわしき黒歴史時代のみだ。

何でそんな事を想像し、要求したんだろうなあ……。

ともあれ、廊下の中程には階段が見え、手前の左右にはそれぞれ引き戸とガラス戸があり、僕は靴を脱いでからリビングへと繋がっている右のガラス戸に向かった。

ちなみに、左の引き戸は元客間、現在従兄弟の部屋である。

さて開いた戸の先、リビングには全裸のちっちゃい女が居た。

胡坐を掻き、僕から見て右の壁際に置かれた液晶テレビを観賞している体勢で。

傍には、缶ビールと灰皿。

「……母さん、服は着てくれとあれだけ言ってるじゃないか。なに何で毎日全裸なの」

「んあ？ おお、秋葉！ おっかえり〜」

「おお、秋葉か！ じゃないよ。本当、全裸が好きだね母さんは」

受け継がれなくて良かったよ、本当。

DNAに感謝感謝。

一方、喜んでいる僕とは対照的に、全裸を指摘された祐美子^{ゆみこ}こと母さんは、ムツとした顔で人差し指をビシツと指して来た。

「言っておくけど、全裸じゃないんだよ！？　ちゃんとパンツは穿いてるんだから！」

「他を脱いでちゃ意味ないよっ！」

「まあまあ、良いじゃん。お母ちゃんのナイスバデーな裸体を見れて嬉しいんでしょ？　欲情するでしょ？」

「何で実の母親に欲情せにやなんのだ。欲情したくも無いし、してたまるかっ！」

少し声が荒いのは気にせず言い放ち、左手の奥にあるキッチンへと向かって冷蔵庫を開ける。

全く、何で僕の周りには変人しか居ないんだ。

途中、母さんはあちゃーとか言っつて、苦笑していた……と思う。だって、冷蔵庫見てるから顔見えないし。

「さすが私の血を引いてるだけあるねえ。荒げた声が怖い怖い。秋葉ちゃんにはやっぱり、ロリ声出して貰わないと困るよ」

母さんの言葉を聞きながら、お茶の入った二リットルペットボトルを取り出し、ガラスのコップに注ぐ。

ちなみに母さんの血つてのは、元ヤンの血の事なんだそうだ。

前に一度だけヤンキー、というか暴走族の総長をやった時の話を聞いた事がある。

昔は荒っぽい性格だったとか。

本当、一五。センチの少女が総長だったなんて、信じられない話

である。今でも信じていないが。

内心でそんな事を思いながら、ペットボトルを冷蔵庫に戻し、お茶を飲みながらリビングへと向かう。

そこに居る、自慢の赤い短髪を掻きながらテレビを見ている母さんはふと、テレビ後ろの壁の上部に掛けられている時計を見やった。現在の時刻は四時をちよい過ぎた頃。

「そっか、秋葉は部活してこなかったのかあ。あ、健一けんいちさんはもうすぐ帰って来るそうだよ」

言いながら缶ビールを、真っ逆さまになる程傾けて、残っていた分を一気に喉へと流し込んだ。

ちなみに、健一さんというのは僕の父さんだ。

そんな簡単な説明を内心で行った瞬間、玄関の方で戸の開く音がし、続いて閉まる音が響いた。

噂をすればなんとやら。

とりあえず、今日は用がある為、珍しく出迎えでもしよう。

そう思いながら、玄関へと向かった。

「お帰り、父さん」

「ああ。……珍しいな、出迎え」

「ちよっとね、警部殿に質問がしたくって」

警部殿、という言葉に眉をピクリと微動させた父さんは、現役警察官だ。

頑固そうなごつい顔に無精髭を生やした、たまに居そうな頑固親父風である。性格は無口だけど。

でも、警察関係の話題に関しては、普通の会話が望めるから好都合。

「僕が通ってる高校で、女子生徒が一時期行方不明になった話を知ってる……よね？」

「……三人の女子生徒が行方不明になった奴か。あれは駄目だ。担当を決める直前に、上から捜査禁止を言い渡された。多分、圧力だ」

一瞬、鳥肌が立った。

一般の女子高生三人如きに、警察が圧力を掛けられるとは。どうやらこの問題、何か裏がありそうだ。冗談だけど。

危ないと分かっている事にわざわざ首を突っ込む馬鹿は、現実ではそうそう居ないのである。

……鹿嶋先輩なら、進んで首を突っ込みそうだけどね。

架空の存在だと思われる、厄介事を引き寄せる性格の持ち主、それが鹿嶋先輩なのだから。

それに、バカップルも首を突っ込むとしてるし。

明日あたり、止めるよう言っておこう。

ともあれ、父さんに一言礼を言ってから、二階の自室へと向かった。

着替えて着替えっと。

「って、何やってんだよ僕は」

気付けば、読書をしていた。

着替えるつもりで自室に来た筈だったのだが、ポケットから文庫本を取り出した時、ふと展開が気になり読み始め、今に至る。

時計を見れば既に六時。

約二時間かよお……。

とにかく、当初の目的であつた着替えを開始する為、文庫本を机の上に置く。

本棚に入るには、後三十ページ読まなくてはいけないので、また明日という意味を込める。

……いや、後三十ページなら、今読み終えた方が良い、のかな。誘惑に負けそうになる。

だが、その誘惑を吹き飛ばす知らせが、突然、一階から聞こえて来た。

「あきはー！ お客さんだよ」

お客とな？

はて、客が来る予定は無かつた筈だが。

ふ、甘いよホームズ君。来客とはいつ如何なる時でも、突然に現れる者だ。

……誰だ僕。

ホームズに意見してる立場の奴って何者だよ。いや何様だよ。

つと、そんな事より来客だ。

僕の部屋には疚しい物など一つも無い為、隠す動作をする事無く階段を下りて行く。

一階、視界に入つたのは全裸の母さんと、

「鹿嶋先輩？ どうしたの、急に」

「連絡入れなくて悪いな。ちよつと相談があつてだな」

言う鹿嶋先輩は、僅かに頬を朱色に染めていた。

視線も横を見たり僕を見たり下を見たりと世話しない。

ついでに、羽織っているカーキ色をした薄手のコートの裾をモジモジゴシゴシ。

どうやら、全裸の母さんが横に居る為、目のやり場に困っているらしい。

鹿嶋先輩は、たとえ変人だとしてもピュアな心の持ち主です。

「とりあえず母さん、服着て服」

「へ？ べつつに良いじゃ〜ん。鞘華ちゃんもそろそろ慣れたらろ
うしい〜」

「それは彼女の何処をどう見て確信してるんだよ。困ってるじゃないか、多分」

とにかく、早めに鹿嶋先輩の視界から露出魔を退散させよう。
その為僕は、下りて来た階段を一步戻り、口を開いた。

「相談なんだったら、いつも通り僕の部屋で良い？ 一階だと、五月蠅いのが居るから」

「ほほ〜う、私を五月蠅いの扱いですかいな〜？ 良い度胸にや！
晩飯はラーメンにしてやる！ 覚悟しておけよ〜」

そう告げた母さんは、すぐにリビングへと入って行った。……別にラーメンでも良いんだけどね。

鹿嶋先輩を手招きして二階へと向かい、自室の戸を開けて先に入るよう促す。

すると彼女は一礼して、中へと入った。

刹那、コートを脱ぎ捨てた彼女は跳んだ。僕のベッドへと。

そして大の字になり、着地の衝撃を軽減。スプリングマットだから意味無いけどね。

次いで、両手足を真っ直ぐに伸ばして、着ている制服を皺だらけにしながら、ゴロゴロと転がり出した。

既に見慣れた光景である。

「良いなあ、やはりベッドは良い！ あ、髪の毛。短いな……誰のだ？」

「先輩は彼女かつ。僕のだよ、僕の。そんな事より、相談って？」
「あ、ああ、そうだな。そうだそうだ、うん」

曖昧に、ついでに苦笑を混じえつつ、鹿嶋先輩じゃ一度周囲を見渡してから深呼吸一つ。

ちなみに、僕の部屋には机と本棚とベッドしか無い、四畳くらいの場所だ。

シンプルイズベスト！

「あ、あのだな……。携帯の、メールでだな、こ、ここに告白するってのは、あり……。だろうか？」

「メールで告白するのはありなのか、かあ……。」

「復唱するな！ 恥ずかしくなるだろうが！」

一瞬だけムキになった彼女は、しかしすぐにしゅんとして縮こまった。

おまけに体育座りをし、おまけに膝と身体の間に来た隙間へと頭を埋めた。

こらこら、そんな体勢になると下着が見えちゃうでしょうが、なんて反応は面倒なのでしない。

そついうのには慣れてしまった。どっかの誰かさんの所為で。

刹那、戸がいきなりノックされ、母さんが顔を覗かせた。

噂をすればなんとやら、PART2。

「失礼しますだ〜よ、ドラ息子。ラーメン持って来たから。んじゃ、ごゆっくり〜」

言うだけ言って、母さんは床に二人分のラーメンの載ったお盆を置いて、すぐに出て行った。

作るの早いな——ってか、また全裸だったな、あの人。

まあ、そんな事よりも先にと。

……変人でも、人並みに恋はするのだ。

だって、僕が変人と定義している人間には、恋に盲目的な人を含めているのだから。

鹿嶋先輩の場合は、失敗が多過ぎただけの事。

だから、信頼されている僕に、時々相談に来ている。

その所為で僕から、変人呼ばわりされている事も知らずに、にしても、メールでねえ……。

「まあ、毎回言っているように、人それぞれだよ。ただ、メールでつてのは気持ちが悪くいくから、それでも良いつて人と嫌つて人は半々だろうね。文で伝えるよりも言葉でつて意見があるだろうね」

けれど、

「けれどそれだと、ラブレターの存在も危うくなる。メールは嫌だけれどラブレターは憧れるなあ、なんて矛盾した事言う人もいるしねうん、結論を言えば、当たって砕ける。メールは、普通の告白と余り変わらない行為だから、試してみるのも良いね」

言っている途中、何度も埋めている頭が動いてるって事は、ちゃんと聞いているんだね。

同時に、別の意見を考えている途中でもある気がするけど。

「あ、でも、もし了承されても、後日改めて、面と向かって伝えるのを忘れずに。——聞いている？」

「も、もちろん聞いているぞつ。……そうか、ありが……」

「とりあえず、ラーメン食べよつか。伸びちゃうからね」

立ちっぱなしで喋るのはキツイキツイ。

足首を軽く捻らせて解しながら、ラーメンの載ったお盆を持ち上げる。

そして、ベッドの端に座り直した鹿嶋先輩の膝元にお盆を置き、僕の分のラーメンを持って机の前にあるオフィスチェアに座る。

ついでお盆の上にあった割り箸を一本頂き、いただきますと声を揃えて、食べ始めた。

……伸びる一歩手前だった、危ない危ない。

Answer・03：日常壊しの異常人

『私は姫が大好きだああああ！！』

突如、朝の校内の喧騒を一瞬にして停止させたのは、スピーカーから響いた声だった。

その声は校内に居る者全ての思考を停止させ、教室や廊下に設置された各スピーカーに視線が集中する。

ただ一人の女子生徒を除いて、だ。

彼女は放送を聞くなり、勢い良く机に突っ伏した。

顔色は、みるみる内に赤では無く青に染まっていく。

「……あんのばか……！」

呟きながら、苦虫を噛み潰したかのような表情になり、冷や汗が滲み出す。

早く終われ早く終われ、と願う彼女の祈りとは裏腹に、放送は尚も続く。

『名前を呼ぶようになったのには感謝しよう。だがしかし、何か足りないのだ！ そう、愛が！』 『さかきい！ 放送を止めるお！ でないと——』

刹那、放送は途切れた。

暫しの沈黙。

それから一分経ち、何事も無かったかのように再び喧騒が始まった。

また榊か、などと呟く者も居るが、大して気にはしていないようだ。

その事に安堵した彼女、春原^{すのはら ひめか} 姫香は深い溜息をつき、顔を上げた。

同時に、茶色い長髪が垂れて顔を少し隠すが、この状況では気にしていないようだ。

「ほんと、お疲れ様だね榊君は。どれだけ言っても、姫ちゃんは知らん顔だし」

「うつさいわね、千尋。また目潰しするわよ？」

「そんな事ばかり言っていると、鬼になっちゃうぞ？」

笑みを浮かべながら、不意に声を掛けた松本^{まつもと} 千尋^{ちひろ}は、自身の黒い短髪に両手を載せ、人差し指を角に見立てて鬼の真似。

目を弓のようにし、より一層の笑顔を追加して、角で姫香の二の腕を突き始めた。

連続して、世紀末の男の如く。

「うりゃうりゃうりゃうり——いあああああああああ——！」

無言で繰り出された目潰しは、当然、千尋の両目に直撃し、痛みで奇声を上げ床を転がり出した。

そんな彼女を無視し、姫香は再度溜息をつく。

……あの馬鹿……。

先程の放送をしていた声の主、榊^{さかき} 護^{まもる}の告白行動は、今週に入って三度目だ。

その上、今までは直接言ってきた為に、スピーカーを使用されたのは初めてである。

最も、初めの頃よりかは回数は減っているのだが。

高校に入学した途端に護が告白するようになって、もうすぐ一ヶ月近く経つ。

五月の連休、ゴールデンウィークを明後日に控えたこの時期、生

徒は休みの間の予定についての会話で浮かっていた。

無論、護も例外では無い。

故に姫香は、今週に入ってから余り構わないようにしていたのだが、その行動が裏目に出たのではないかと、不意に彼女は思った。だとしたら、本当に馬鹿馬鹿しい事だ、とも。

……昼休みにでも構ってあげよう。

そう決意し、彼女は再度机に突っ伏した。

眠っていれば、昼休みなどすぐに来るものだ。

既に教室内は、喧騒はそこら中から聞こえるようになっており、各グループがそれぞれ昼食を取っている。

スピーカーからは、今流行りの曲が控えめに流れ、それに関する会話も少なからず聞こえる。

そんな中、姫香は立ち上がって、護の居る席へと向かった。

幸い彼は窓際の自席に座っており、窓に向かって何やら独り言を言っている様子。

如何にも近寄りがたい雰囲気醸し出している彼に、思わず足が止まるが、勇気を振り絞る。

勇気の使いどころ、間違っただけかなあと思いながらも第一声。

「あ、あのさ、まも——」

「——ふうむ、豚骨ラーメンは……ああ、駄目だ。姫は豚骨が苦手だったな。だとしたらやはり、納豆キムチだろうか。いつぞやか、納豆キムチがどうかという会話があった気がする、いやあった。ならば決まりだ、納豆キムチに誘おう」

「は？」

思わず、言葉が漏れる。

同時、即座に彼女の内心にて、何を言ってるんだこの馬鹿は！という感想が生まれた。

一方、彼女の声に反応した護は、振り向くなり満面の笑みとなった。

そして、焦げ茶色のオールバックという特徴的な髪を掻き上げ、口を開く。

「おお、姫！ 丁度良いところに来てくれたな！ 話したい事があるのだが……良かったら、ゴールデンウィーク中に納豆キムチを食べに行かないか？」

「嫌よ」

即答だった。

故に護は、目を見開いて驚き、姫香の肩に手を載せた。すぐに払われたが、気にしない。

「何故だ、姫。前に姫は納豆キムチの話をしていたではないか！」

「話をしていたイコール好きってのに結び付けられるあんたの脳は、ある意味凄いわね……」

「む、姫に褒められるとは！ はは、そうか。私は知らず知らずの内に、姫を感動させていたのだな！？」

「あゝはいはい、そうなんじゃないの？」

感動では無く、呆れさせていた。

もう既に疲れ始めていた姫は、しかし会話を続ける。

「ところで、ゴールデンウィークは私と遊んでいられるくらい、予定が無いの？」

「もちろん、いつ姫と予定を作っても良いように、予定は空けている。……はっ！　もしかデートの誘いか！？」

「で、デートって訳じゃ無いけど。ほら、最近冷たく接し過ぎたんじゃないかなあっと思って……」

姫香は少し俯き加減になり、両手の指を弄り出した。
すると護は突然、ガツポーズ。

ついでに彼女の肩に手を載せた。

当然、払われる。再度、載せる。また払われる。

それが後二回続き、やっとな護は口を開いた。

「やっとな私を受け入れてくれるのか！　いやこれ程までに嬉しい事は無いな！　では早速、式の予約を——」

「待ちなさい待ちなさい待ちなさい、とりあえず携帯を仕舞いなさい。気が早すぎる上に、別にそういう関係になるって訳じゃないわよ！？」

どうせ暇だったから、と咄嗟に浮かんだ言葉を付け加える。

その言葉に護は、眉尻を下げて苦笑を漏らした。

瞬間、彼女の胸にチクリとした痛みがあった。

裁縫針よりも注射針よりも細い、何かが。

……この表情には弱いな、私。

いつもの護は五月蠅いだけであるからこそ、希少ともいえる確率で見せるこの表情に、罪悪感を感じてしまっていた。

異性として見ている訳じゃない、それは分かっている。

ただ、彼女の内心で護は、邪魔な奴から友達に近い奴へと、変わりつつあった。

「よし、では早速昼食として納豆キムチを共に食べるか」

邪魔な奴に戻った。

「って、なんで鞆の中に入ってるのよ!? ——くさっ! 納豆くさっ!」

「誤解を招く言い方は止すのだ。ちゃんとタッパーに入っているではないか」

「なんでか知らないけど、見ただけで臭いって感じるのよ! ああ、もう、開けなくて良いっての!」

はははっと笑いながら半透明のタッパーを開けようとする護の手を阻止しながら、姫香は制止の言葉をぶつける。

しかし、彼はそれくらいで怯む筈も無い為、彼女はタッパーを強引に奪い取った。

一瞬でも開いた事によって漂う納豆臭が掻き乱されて、周囲に充満する結果となってしまう、つい表情が歪む。

その臭いに耐えながら、奪い取った事に対して一応彼女はどや顔をする。

けれども、護は笑うのを止めない。

それどころか、また新たに鞆からタッパーを取り出した。

「なんでもう一個あるのよ!? 絶対に開けさせないからね!」

「ああ、勢い良く取るのは良いが、それはラーメンだぞ? 熱いから気を——」

「あつちやい!! な、なななんでラーメンをタッパーに入れて持ってくるのよ!? しかも耐熱加工されていないし!」

熱さに驚く姫香は、急いでラーメン入りのタッパーを机に置いた。そして、両手を息吹で冷まそうと試みている。

護の笑い声は、止まらない。

「ははは、すまない。ところで、手の平が火傷しては困るな。どれ、私が舐めて冷やしてやろう」

「ひいひいひいひいあああああああ！？——何するのよっ！」

刹那、風を切る音と共に彼女の右膝が、斜め下から護の顎に直撃し、彼は後ろへと吹き飛んだ。

次いで、ラーメンをぶっつけた。

「うぐおわあああああ！！ 姫からの愛の熱湯だあああ！！」

叫びながら、麺と汁塗れになりながら、彼は床を何度も転がる。そんな彼を睨むようにして見る姫香は、顔を真っ赤に染めて息を荒くしていた。

未だに手に残る、舌が這う気味の悪い感触に恐怖しつつも、奇声を上げてしまった事に後悔していた。

しかし、彼女の目前で転がり続けている彼を見ると、怒りは……やはりあった。

けれど、

「……ふっ、あはは……はは……」

中途半端な笑い声が、込み上がって来ていた。

だから彼女は、もう暫く見続けている事にした。

教室内に居る全生徒の視線を集める程、五月蠅い馬鹿を。

Answer・04：己の意思について

時刻は既に、午後四時を回っている。

春である故に、早くも空が夕暮れ時の色に染まっていく現在、帰宅する学生や大人によって、街を歩く人が増える時間帯だ。

それはここ、新宿区でも同じ事であり、また観光客もちらほら見られる。

制服姿の護も、そこに居た。

学校からずっと徒歩である彼は、周囲の者達から若干避けられていた。

すれ違う者の中には、振り向いて眉を顰め、一瞥する者もいる。だが、彼はその事を知ってか知らずか全く気にせずに、おもむろにポケットから携帯を取り出して、通話を開始した。

二、三回のコール音の後、相手に繋がる。

「私だ。——ああ、すまない。もう少しで着くぞ。——馬鹿を言うな。車内をラーメンの匂いで充満させるつもりはない。まあ、おかげで周囲から冷たい目で見られてるのだがね」

はははっと笑い、後ろへと振り向いた。

すると、護を一瞥していた者達は、慌てて前へと向き直す。

「うむ、姫からの愛の熱湯は効果抜群だな。——侮蔑は良くないぞ？　しかしまあ、スーツを一着、用意しておいてくれ。——ああ、それではまた」

その言葉を最後に短い通話を終え、吐息を一つ。

……緊急招集、か。

内心でそう呟く彼が緊急招集を受けたのは、約三十分前だった。

携帯に突然来た着信により、彼は詳しい内容を教えられないまま、ただ緊急だと言われ、新宿区の一角にある事務所へと呼ばれた。

そしてその事務所へと、彼はたった今、到着した。

二階の窓に？谷本興業事務所？と書かれたその場所は、過去に一度だけ訪れた事があった。

挨拶回りの一環として、だ。

それ以来、一度も訪れていない入口へと、護は足を踏み出そうとした、その時だ。

不意に、彼を呼ぶ女の声がして、足を止めた。

「若様、お待ちしておりました。ご要望されたスーツの用意が出来ておりますので、一度車にお乗り下さい」

言う彼女は、黒い長髪をポニーテールにし、藍色の着物で身を包んだ姿をしていた。

両手を腹部の前に合わせ、会釈をする彼女は、美人の類に入るくらい顔立ちだ。

そんな彼女が案内する先、事務所横の路地には、黒いバンが後ろ向きに停められている。

「本当、仕事が早くて助かるよ。流石だね」

「いえいえ、若様の為なら、例え総理大臣でさえも拉致してきますよ」

ニヤリと、企みのありそうな笑み。

悪寒がしそうなその笑みにしかし、護は無反応。

ただ、目が合っているだけだ。

……姫は部活を頑張っているだろうか。嗚呼、走る姫の姿が目に見え、浮かぶ。

妄想に現を抜かしていた。

事務所内の雰囲気は、非常に最悪だった。

窓には中途半端に開いたブラインドが下りていて、隙間から夕日が射している。

その夕日だけが、室内の明かりだった。

「うぐ……がつ……」

天井に設置されている蛍光灯は、壊れている訳でもないのに使用されていない。

中央には長方形のテーブルを挟むようにして置かれた、向かい合うソファが二つ。

他に目立った物は無く、滅多に利用されていないという事を物語っていた。

その事務所を、今現在利用しているのは、八人の男。

部屋の隅にある出入口には、体格の良い男が二人。

正反対側の壁際には、蹴られている青年と蹴って尋問をしている細身の男、そして二人を囲むようにして立ち、見ている四人の体格が良い男。

誰も彼もが特徴的で、内六人の男はヤクザ者である事がすぐに分かるくらいだ。

出入口に立つ二人の内、右側の男以外は。

「うぐ……うあ……」

そして、室内には先程からずっと、尋問として蹴った際の打撃音

と呻き声が響いていた。

最も、問いの言葉も無いそれは、尋問というよりも一方的なただの暴力ではあるが。

と、その時不意に、尋問をしていた男が口を開く。

「……そろそろ、吐いた方が身の為じゃないか？ ああ！？」

放たれる言葉は巻き舌。

だが、巻き舌を使っている者は部下にしか過ぎない。

彼らの頭は不在であり、たった今、その頭が入室して来た。

スーツ姿の男、護は着物の女を引き連れて、出入口に居る右側の男を一瞥する。

「ご苦労だ、凧。それにしても、やけに懐かしい事務所を使ったのだな」

「いやいや、えらい偶然に空いた事務所が見つかったもんでな。多分、ここの持ち主は今頃、海にてダイビングでも楽しんどるわい」

凧と呼ばれた男は、一礼してから笑い混じりにそう伝え、奥の集まりを見やった。

未だに尋問を続けている男以外の四人は、窓際で背筋を伸ばし、整列していた。

その光景を見て、護はふむつと言いながら、中央のソファに歩み寄って座る。

左脚に右脚を載せて組み、両手の指を合わせて太股の上に置いた。

「……さて。貴様は頭が来たというのに、無礼を働き続けてなんとも思わないのかね？」

問いの声には張りがあり、ビクリと肩を震わせた男の足が止まっ

た。

次いで、ゆつくりと振り向き、護と目が合う。
ニヤリと、口元が吊り上った。

「やっと来ましたか、榊さん。あ、無礼、申し訳ありませんっ！」
「いや、謝罪の言葉を述べる口があるのなら、別に良いのだよ。ところで、そろそろ終いにさせようと思っっているのだが」

「俺もそう思っていました！ 大丈夫、すぐに吐かせますんで」

一礼し、蹴りの体勢に戻ろうとしたその時だ。

違うのだよつという低い声が、室内に響き渡った。

冷酷さのあるその声には、聞きようによっては殺意さえも感じ取れる。

その声に、場を静寂が支配した。

無論、尋問を再開しようとした男も止まる。

ただ唯一、護だけが言葉を続けた。

「終いにしようと思っていたのは貴様の尋問だよ。……どういうつもりかね？ 初っ端から暴力で吐かせようなどと。それは私の意思に反するよ？ まずは一日掛けて話し合いだらうに」

問い掛けられている男は、ただ啞然と突っ立っていた。

表情には、失敗したという緊張と、しかしという反論の意思が見て取れる。

だからこそ、護は言う。

「君達のような者に捕まった時点で、知識のある者はまず殺されるという気持ちと、吐いた際の裏切り行為に対する恐怖心が生まれる。話し合いとは、その時に生まれる恐怖心を和らげ、生きられるという希望を与える事が出来るのだ」

だが、

「だが、貴様は暴力で吐かせようとしている。駄目ではないか、恐怖心を増幅させては。初めから暴力があった場合、相手はこう思うだろう。私達は過激派だと。するとどうなる？ どうせ吐いても殺される、と結論に辿り着くのだ。そうなった場合、自殺を考える者もいるくらいなのだよ。……私が言いたい事は、分かったかね？」

組んでいた脚を崩し、護は前屈みになって小首を傾げる。
同時に目を細め、呆れた表情になる。

「貴様は三つの失敗をしたのだよ。一つは尋問について。一つは私が出来ても無視した事について。一つは私の意思に反した事についてだ。——よくも、私の名に泥を塗ったな」

最後の言葉は、その男に恐怖を与えた。

無表情の護の声色は、殺意に満ちていたからだ。

故に男は、口を開くが声が出ない。

喉が急速に渴き、冷や汗が大量に噴出す。

足が震え出し、一歩も動かせないようだ。

そんな彼を見た護は、呔を呼んだ。

「呔、こいつの詳細はなんだ？」

「……城々崎^{じょうざきけんいち} 憲一、二十一歳。最近まで地方の榊家の分家、高島家で中間辺りの地位に居た者や。せやけど昨日の夜に東京来た時、偶然、売人を見つけてな。そんで、今に至る、と」

「田舎者が……。それより、高島家の躰の悪さに驚かされるな。ふむ、説明ご苦労。——貴様ら。城々崎をバンに乗せておけ」

その命令に、四人の男はなんの躊躇いもなく、城々崎の腕を掴ん

で事務所を出て行った。

途中、彼は抵抗していたが、四人相手では成す術も無く、引き摺られて行く。

同時、背凭れに身体を預けた護は、吐息を一つ。

「さて、話とやらを聞かせてもらおうか貴様」

Answer・05:とばかり受けて不機嫌真っ最中

一日中、かなり不機嫌である。

原因は二つ。

理由と言っては何だが、始まりは昨夜。

結局、鹿嶋先輩の相談は八時近くまで続いた。

その後はすぐに帰宅したのだが、十二時に近くに突然、携帯に着信があった。

相手はもちろん、鹿嶋先輩。

いやな予感つてのは、不運な事に確実に現実となってしまうもんだ。いや、今回はなってしまった、か。

さて、その内容というものが。

何でも、気になる事がまた浮かんでしまい、眠れなくなってしまったとか。

結果、深夜三時近くまで相談に付き合わされ、朝は寝坊する羽目になった。

学校に到着したのは、遅刻ギリギリの八時二十三分。

そこで、二つ目の原因が発生した。

教室に入るなり、放送部顧問から呼び出しを受け、とりあえず職員室へ。

叱られた。

どうやら、僕が学校に来る少し前に、一年生の男子生徒が放送室を私的に使用し、あろうことか校内放送で愛の告白とやらをしたそう。うな。大胆な変人だなあ。

で、放送部部長である僕に、管理不足だと指摘され、数分間の説教。

正直、やってらんねーの一言である。

故に現在、僕は久々に放課後の放送室に来ていた。

美術部から借りた絵を描く為のパネルと三脚（共に正式名称は知

らない」と数枚の紙、そして筆一式を持って、だ。
放送部の活動では無いが、時折こうして放送室内で絵を描いている。

まあ、これは単なる趣味だ。今はストレス発散の為でもあるけど。ただ、モデルが無いから、描く絵は想像に任せる事になり、筆の進みは遅い。

モデルが欲しいなあっと思いつながら、窓の無い放送室を恨みつつ、静かな室内で坦々と描き続ける。

え？ 何を描いてるかって？ ヤマタノオロチです。
さすがに嘘だけだね。

…… ああ、最近読んでる小説の影響が出てるなあ。

母さんに勧められて読んでいる、三十年近く前の作品だ。

詳しくは言わない。内容は面白怖いから。

ちなみに本当は、ペガサスだ。

幻想的だね。ファンタジーだね。

追加で魔王か勇者を乗せれば最強だ。面倒だからやらないけど。
と、その時だ。

放送室の扉が、音を立てて開いた。

内側に開くその扉は、壁についているゴムに衝撃を吸収され、轟音を立てる事は無かった。

そして、入口には見無い姿。

右手の平を高々と上げて満面の笑みの、さも親しい友人であるかのような素振りをする女子生徒一名。誰だよ。

一応、胸元の緑リボンを見る限り、一年生のようだ。

少し赤みのかかった黒い長髪を見ると、ん？ 不良少女？ など
と思ったりするが、髪の色で人を判断してはいけないと、少し反省
ともあれ、暫しの沈黙の後、少し高めの声が室内に響いた。

「放送部に入部しに来ましたー！」

「……は？」

おつたまげー、である。

……我ながら古い驚き方だなあ。

前回のあらずじ。

新入部員（仮）が現れた。

？新入部員？の手前に？変な？を付けるかは、個人にお任せする。
とにかく、突然の事だったので驚きつつ、立て掛けてあったパイ
プ椅子を展開して、座って頂く。

そして僕は、放送機材の前に設置されている固定式の椅子（今僕
が座っているやつ）で向かい合う。
まるで面接みたいだ。

「新入部員って事だろうけど、入部届はあるかな？」

「もちろんあります！　ちよろつと待って下さいね……」

言いながら、彼女は持つて来ていたサブバックの中に手をつ込
んで弄り、一切れの紙を取り出した。

僕はそれを受け取り、紙を見る。

間違い無く入部届だ。

ここで破り捨てれば入部は無効になるのかな、などと卑劣な事を
考えつつ、名前を拝見。

……那珂川^{なかがわ} 美咲^{みさき}。那珂川^{なかがわ}って字、難しいなあ。

ふむふむ、一年D組十三番か。どーでもいいけどねー。

「……一応聞くけど、入部の理由は？」

まさか入学した時から入りたかった、なんて理由は無いだろう。既に一ヶ月近く経っている訳だし。

あ、もうすぐゴールデンウィークだ。

「入部の理由は……朝の放送を聞いたからです。部員の人が大胆で面白いなっと思ひまして。どどと、放送部に興味が沸いたんです」
「え？ あ……朝の放送をやった人だけど、放送部員じゃないよ？それに、最初で最後だろうし」

「え！？ そ、そうなんですか！？」

かなり驚いた表情をしている。

なんかこう、ひよつとこみたいに。うーん、例えば下手だなあ。

……あれ？ もしかしてこれは、入部の理由が無くなった？

「そんなあ……。って、そういえば、何で美術部のセットがここにあるんですか？」

「ん？ ああ、それは僕の趣味だよ。他に部員居ないから、好きな事出来るしね」

「ほへえー！ 何を描いてるか、見せてもらっても良いですか？」

——おお、ペガサスだ！ きれいー！」

彼女、美咲は絵を見るなりテンションを上げ、褒め出した。

率直に言われると恥ずかしいものだ。

こういう恥ずかしさは、小学生時代の図工で作った作品を先生にベタ褒めされた時以来だろうか。

でも、あれがお世辞だと気付いたのは、意外とすぐだった。

母さんに見せたら、腹を抱えて爆笑して、数多の罵倒を浴びせられたからなあ。

おっと、脱線。

ともあれ、何故か目の前の彼女は目を輝かせながらペガサスをジッと見ていた。

そして唐突に、僕の方を向く。

「よし、入部します！ 先輩、面白そうな人なので」

「失礼な理由だね」

けれど、悪い気はしない。

ユーモアのある先輩とは、どのような物語でも良い立ち位置に居る気がするから。

ついでに主人公に関わって、損するってアビリティーもついていたな。

反対に主人公は、晴れてヒロインと結ばれて幸せになる、と。

……あれ？ 先輩としては良い立ち位置だけど、男としては悪い立ち位置じゃね？

「分かったよ。それじゃ、入部届を顧問に出してくるから、今日のところは解散ね」

「えー、マジすか。ではでは、また明日会いましょーね、先輩！」

言いながら手を大きく振って、放送室を出て行った。

テンション高い娘だな。

第一印象はそんなところだ。

……にしても、放送部に入るなんてなあ。

去年の三年が近寄り難い変人だったという事は校内に知れ渡っている訳で、入部するような輩は居ないと思っていたが。

世の中、まだまだ分からない事だらけである。

ともあれ、先輩と呼ばれるのも悪くない気分だ。

さて、ペガサスの続き続きーっと。

Answer・06：裏で動く何か

「ふむ。寝ていた」

「おいおいおいおい、冗談言つたらあかんって」

「無論、冗談だ」

言いながら、大きく伸びをした護は、向かい側に座っている売人の男を見た。

浅く俯き、上目遣いで護を見る彼、御船みふね まこと 誠は十五歳の少年だった。

しかし、年齢を聞いたところで護は表情一つ変える事が無い。実際、未成年が麻薬の売人をやっている事など、大して珍しい事では無いのだ。

だが、その後に誠が発した言葉に、護は眉をピクリと微動させた。

「……復唱させてもらうが、俺以外にも数人の子供が集められて、金をやるから薬を売ってくれと頼まれた、と？」

「あ、ああ……はい。そうです。それに、集められた人は年齢も性別も関係無くバラバラでした」

恐る恐るの返答を聞いた護は、右手を顎に添えた。

……何故、売人を増やしているのだ？

売人を増やす事は利益と客を得る数が増えるが、一方で逮捕されやすい。

それが即席の掻き集めで、ましてや未成年だったら尚更だ。

信頼も保障も無いかからは、保身の為にすぐ自白し、販売元の摘発に繋がってしまう。

故に護は組み関係の者達に対して、麻薬の取引は最小限にし、細心の注意を払うよう指示している。

「……しかし、偶然が重なって私の部下が捕まっているのも確か、か。最も、それは偶然なのだろうかね」

言う彼は、溜息をついた。

最近になって、榊家関係やその分家が営んでいる事務所の組員が、偶然付近で売人が捕まり、それに巻き込まれるようにして牢屋行きになるという事態が増加しているのだ。

幸い、榊家は警察にコネがある為、賄賂によって釈放される者も居るが、逃れられない証拠を掴まれた者は、今も牢屋の中に居るのが現状だ。

そればかりは、いくらコネがあろうと許される行為ではない。

「ちなみにだ。話を持ち掛けて来た人物の顔や特徴は、覚えているかね？」

問いながらも、それは無駄な事だというのは、もちろん彼は分かっている。

契約を持ち掛ける者は大抵、雇われた者が共犯者だろうからだ。前者だった場合は、雇った者に指示を出した者も雇われているかもしれない。

そのように、踏み台方式で足がつかないようにするのが道理だからだ。

後者の場合は、余程捕まらない自信があるのか、或いは捨て駒かともあれ、これから聞く人物の特徴を持った者は、犯人では無いだろう。

「えと、帽子を深く被っていて良く見えなかったんですけど、声からして女性でした。身長は五五から六〇、くらいで……そう、自分の事を僕って呼んでました」

「一人称が僕の女性か。ふむ……年齢は？」

「若かったです。十代か二十代くらい、かな」

「聞いたかね、凧。十代から二十代で身長は一五五から一六〇センチの一人称が僕である女性だ。貴様の配下には当然の事、榊家関係の組員全員に通達しろ。見かけた場合、手を出さずにまず連絡するようにとな」

早口で、その上ハッキリと聞こえる声で指令を出す護に、ほいさつと答えた凧は、入口に立っていた男を引き連れて事務所を出て行った。

そのタイミングを見計らって、着物の女は護の隣へと歩み寄る。

「ところで、彼はどうでしょうか？」

「今回のところは見逃してやろう。情報を吐いてくれた訳だしな。」

……少年、次私達に捕まった場合は、死んだと思え」

まるで死の宣告のような言葉を言い放ち、席を立つ。

そして踵を返し、事務所を後にした。

続いて着物の女も出て行き、残ったのは安堵する誠だけとなった。彼の深い溜息が、ただ室内に虚しく響く。

夕日を浴びながら一般道を走る車両の後部座席から、護はスモーク張りの窓越しに空を見ていた。

右の肘を窓の淵につけ、手で顎を支えながら、黄昏るように。そんな彼を、隣に座っている着物の女は、無表情で見据えていた。考えの読めない表情は不意に、何かを思いついた表情になる。

「そういえば、明々後日は霧島夫妻の命日ですが、お墓参りには行かれるのですか？」

問いに、ゆつくりと振り向いた護は、細めていた目を少し開けた。そういえば、そうだったなっという言葉が内心で生まれるが、声には出なかった。

僅かに疲労の色が見える彼は、無駄な発言を控えているように見える。

……姫と霧島夫妻、どちらを取るべきか。

無論、姫だ！ と内心だけテンションを上げ、やっと口が開く。

「すまないが、今年は君が行ってもらえないか？」

「もちろん、良いですよ。……ところで若様、どこかお疲れのご様子ですね。一旦、お休み下さい。着きましたら、起こして差し上げますので」

優しい口調の言葉は、護の臉をゆつくりと瞑らせた。

視界が暗くなり、眠りを待っただけの少しの間、思う。

己の不手際の所為で、獄中に居る部下達の事を。

……気疲れ、というやつか。

たまにはゆつくりと休むというのも、存外悪くないなと苦笑混じりに呟き、眠りへと落ちていった。

Answer・07：またしても唐突がやって来た

「はぁ……」

思わず、深い溜息が漏れた。

多分、誰もが今の僕と同じ状況だと、自然と出るだろう。

午前十一時を少し過ぎた現在。

普通は授業中であるから教室に居る訳なのだが、何故か僕はリムジンに乗っていた。

はは、唐突過ぎて訳が分からないだろう。

大丈夫、僕も訳が分からない。

とりあえず、気を落ち着かせる為に、僕が座る後部座席の中央部に設置されたドリンクバーのやつ（正式名称なんて知らない）のスイッチを押す。

先程、執事みたいな初老の運転手が、ご自由にお飲み下さいと言っていたので、問題無いだろう。

カチツというガラスの音と共に、ドリンクバーのやつ下部に大きめのグラスが自動でセットされ、緑色の液体が注がれる。

メロンソーダだ。アイスもあればフロートに出来たのだが、贅沢は言わないでおこう。

「あ、ちなみに、座席の下に冷蔵庫があります。中にはアイスもありますので、ご自由にお食べ下さい」

あった。

勝手に人の心を読むのは止めて頂きたい、と言いたところだが、それはこの際、気にしないでおこう。

とにかく、運転手さんに心から感謝して一礼しつつ、その動作のついでに冷蔵庫を開ける。

そして中から、カップに入った丸いアイスを取り出して、冷蔵庫を閉めた。

卓球玉くらいのサイズであるそれを開けてグラスに落とし、ドリンクバーのやつに備え付けてあったストローとスプーンの山からそれぞれ一つずつ取り、グラス内へ。

最高の一品である。エクセレント！

……溜息をついておきながら、かなり寛いでるように見えるなあ。さて、リムジンが目的地に到着するまで、メロンソーダフロートを飲みながら、朝の光景を思い出そう。

丁度、バカップルが五月蠅かった時間だ。

とりあえず、一口。うん、甘い。

珍しく鹿嶋先輩が放送室に来なかった朝。

自席に着いた途端、変なのが近寄って来た。

朝の時間帯、僕に近寄って来る者といえば、他でもないバカップルだ。

バカップルは律儀に手を繋ぎながら（使い方を間違っている気がするけど許して）、満面の笑みを浮かべていた。

気持ち悪いの一言である。あ、片方に対して、ね。

「いっとうっつ！ 明日からゴールデンウィークだが、予定はあるか？」

「遠回しに、ダブルデートってやつを誘ってる？ ごめん、僕には相方居ないから無理。だから二人だけで、ふざけた粒子を散布させながら楽しんできて」

「待て待て、誰もそんな事言ったらんだろーが。調査だよ、調査！

ゴールデンウィーク中、一気に確信へと迫れる何かを見つけるんだよっ！」

「調査？ …… ああ、調査ね」

いけない、ど忘れしていた。

女子生徒行方不明事件を調べる、だったね。

…… 一応、忠告はしとかなきゃいけないかな。

「その件に関してだけどね、あまり首を突っ込まない方がよいよ」
「なして？」

問うバカップルは、阿呆面を傾げた。

それを見て、思わず笑いが込み上げて来るが、我慢。

口の端が釣り上がるのは我慢できなかったが、問題無いだろう。

台詞に合う表情な気がするし。

「警察がお偉いさんから、その件に関わるなと圧力をかけられたらしいんだよ。つまり…… その事件はもしかしたら、氷山の一角にしか過ぎないかもしれないって訳だね」

「氷山の一角…… だと！？ すげえ、俄然やる気が出てきた……！」

「え？ だ、大丈夫なの慎平君？」

「大丈夫さ！ 二人の愛の前では、邪魔する者など皆ひれ伏すのだからな！」

また始まったよ惚気が。

幸せという言葉が良く似合う二人だねえ。

いや、平和ボケかな？

ともあれ、この二人が関わろうが関わらなかつても、僕個人で興味を沸いてしまっていた。

首を突っ込まないと決めただけ…… あれだね、刑事の血が騒ぐん

だねきつと。

とにかく、その女子高生について調べてみようかな。
まずは、女子生徒が所属していたというクラブからだ。

午前十時五十分。

授業の始まりを告げるチャイムの後に教室に入って来たのは、教師ではなく、黒いスーツ姿の初老だった。

ジェントルメーン！ …… 失礼。

ともあれ、その人は伊藤 秋葉という人物を探しており、その名の人物はどう考えても僕しか居ない為、素直に名乗り出た。

すると彼は、僅かに頬を綻ばせ、会釈の後に僕を手招きした。

これは、ついて行けば良いのだろうか。

誘拐にしては堂々とし過ぎなので、生憎僕の頭脳では用件を先読みする事は出来なかった。

これで本当に誘拐だったら、全米が笑うだろう。僕も笑うね。

などとくだらない事を考えながら、僕はその人の後について行く事にした。

そして、現在に至る。

回想をしている間、ずっとソーダフロートを見ていた為に、外の景色は全く見ていなかった。

だからだろうか、飲み干した後に外を見ると、景色が変わっている事に驚いた。

リムジンは既に、誰かの家の敷地内へと入っていたのだ。全く気付かなかった……。

正面、運転席のフロントガラスを見ると、立派な洋館がでかでかと建っていた。

見た目は、ハザードを起こした洋館そっくり。

まあ、そんな事は現実で起こるわけないから。気にしてないけどねっと思っていると、車はやっと停まった。

そして、運転手は先にリムジンを降りて、後部座席のドアを開けてくれた。

「お待ちせ致しました。さ、お降り下さい」

運転手の優しい声に従い、すぐにリムジンから降りて、また後を追う。

玄関前まで来ると、扉の大きさに驚かされた。

別に僕の身長は小さく無いが、それでも見上げてしまうくらいだ。すると運転手（すでにリムジンから離れているから、以後は執事で良いかな）は、その扉を軽々と開け、僕に中へと入るよう促す。

入った先は、エントランスホールのような作りになっており、中央には大きな階段があった。

中もハザードを起こした洋館そっくりだった。帰りなくなった。

「お嬢様！ お友達をお連れしました！」

隣で急に、執事が大声を出した。

唐突だった為に少しビックリしたが、表情には出なかったから僕的にセーフ。

しかし、見た目の歳に似合わず、張りのある声だなあ。

経歴が軍人か教師かという感じの、凄い人なのかもしれない。

ともあれ、彼が呼ぶお嬢様と思わしき人物が、丁度今、階段を下りてきてい

「た……って、鹿嶋先輩じゃありませんか！！ 何その、如何にもお嬢様ですよ的な服装は！？」

ピンク色の可愛いモコモコで全身を覆い、頭には同じくピンク色のお休み帽子（ニット帽みたいなもの。ってかニット帽）を被った、どう見てもつい今し方起きたよという雰囲気醸し出している鹿嶋先輩が、階段の踊り場で立ち止まった。

「え？ この姿が、お嬢様に見えるのか？」

「御免。冗談」

どう見てもパジャマです。
本当にありが以下省略。

Answer・08：恋するへんじ——乙女。（強制修正）

鹿嶋先輩の部屋は、普段の立ち振る舞いからは用意に分かる性格とは全く違う、なんかこう女の子してる部屋だった。

意味が分からない？ はは、当たり前だ。

僕は今、驚いているからね。

人は見掛けによらないとは、まさにこの事だ。

いやまあ、鹿嶋先輩は女の子だけだ。

部屋そのものがかなり広く、中央には白一色のダブルベッド、カーテン付き。

床はフローリングの上に黄色の絨毯を敷いている形で、部屋の三分の二を占めている。

また、その上には円形のテーブルが置かれていた。

後は壁際に衣装棚や本棚があり、空いたスペースにはティディベアが何匹も置かれている。

液晶テレビもあった。大体、三十二インチくらいだろうか。

ついでにテレビの周囲にも、ティディベアが置かれていた。

なんかもう、鹿嶋先輩の部屋と言うよりティディベアの部屋である。彼女が居ない間、ティディベア達は好き勝手に動き回り、人間っぽい生活をしているんじゃないか。

そう思えるのは、幼い頃によく母さんに見せられた映画が影響しているのだろう。

カウボーイのおもちゃとか宇宙服着たヒーローが出てくるやつ。

あの映画、他の友達には知らなくて、少し悲しかったなあ。面白いのに。

ともあれ、僕はその部屋にあるベッドに背を預け、絨毯の上で体育座りをして待っていた。

この部屋の主、鹿嶋先輩は僕をこの部屋に招き入れると、少し待っている、と言ってどこかへ行ってしまった。

故に暇なのだ。

……勝手にテレビを見ても良い、よね？

思い立ったが吉日だ。

おもむろに立ち上がり、テレビに近付いてスイッチを入れる。

すると、少しの間を置いて液晶画面に光が灯り、映像を映し出した。

どうやら、ニュースの時間らしい。

一応、チャンネルを変えてみるが、どこも同じだった。

特に目立った話題は無い。

死亡事故やらゴールデンウィーク中のイベント紹介やら麻薬所持者の逮捕数が急増やら某動物園で先月に生まれた赤ちゃんの話題やら。僕にとっては必要の無い情報ばかり。

欲しい情報が無いなあ。

もつとも、行方不明事件の話がニュースで出る訳無いだろうけど。まあ、お昼の人気番組が始まるまでは、ニュースで我慢するかな。そう思い、またベッドに背を預けて体育座りしながら、ボーっとテレビ観賞に勤しむ、筈だったのだが。

開始から三分と経たない内に、鹿嶋先輩が戻って来た。

服装は先程と変わらずパジャマ姿のままで、白いお盆を両手で持って入って来た。

お盆の上には、ティーポット一つとティーカップが二つ、置かれている。

ちなみに、両手が塞がっているのにどうやって戸を開けたのかといえは、足で開けたのだ。

踵落としみたいに足を上げて、ドアノブを捻る感じ。

随分前に僕の部屋の戸で実践済みなので、驚きはしない。

ただ、もう少しお嬢様らしくして欲しい限りである。

実際にお嬢様な訳だしね。

「すまない、待たせたな」

「うつん、そんなに待つてはいなかったよ。テレビあったから」

見る為に百円取られてたら、文句を言ってただらうけど。

ああ、懐かしいな。

昔、家族で行った旅館に置いてあった、百円入れなきや映らないテレビに硬貨を入れたら、いやらしい番組が始まって、無口の父さんがかなり慌てていたのは、良い思い出だてか話逸れ過ぎだろ。

「思えば、私は秋葉をよく待たせてしまっているな」

「いやいや、別に気にしていないよ。それに、パジャマ姿の可愛い先輩を見れたから、その件はチャラで」

「——っ!? ば、ばかもの! そっという台詞を軽々しく口にするな!」

可愛いという言葉に弱い鹿嶋先輩は、簡単に慌てふためかせる事が可能なのだ。

けど、お盆が揺れてカタカタ鳴っているので、弄るのはここまでにしておこつ。

少しムスツとしてしまった彼女は、テーブルを挟んで僕の向かいに座り、お盆をテーブルの上に載せた。

次いで、カップをテーブルの上に移し、ポットの中身をカップに注ぎだした。

湯気が立ち、良い香りが漂う。

「ホットレモネードだ。冷えたのも美味しいが、まだ肌寒いからな。温かい方が良いだろう?」

問いながら、注ぎ終えたポットをお盆に戻し、絨毯の上に置く。

「ん、正直言って、レモネードは飲んだ事無いんだよね。だから、

どっちでも良かったよ」

言って苦笑しつつ、渡されたカップの淵に口を付けて一口。

……なんだろう。酸味と僅かな甘みがあるから、レモンと何かが入ってるのかな。

とりあえず、美味しいの一言だ。

思わず笑みが毀れたのを見てか鹿嶋先輩は、気に入ってくれて良かった、と安心した表情で言った。

「ちなみに材料はレモンの果汁、蜂蜜やシロップなどだ。甘党の前にとっては、良い材料だろう？」

「あ、蜂蜜だったのかあ。レモンは分かったんだけど、甘みの部分が分からなかったよ」

帰りに親戚の喫茶店に置いてないか見てこよつと。

さすがに、鹿嶋先輩から頂くなどという、図々しい事はしないで
おこつ。

……でも一応、聞いてみよつかな。

「ねえ、先輩。このレモネード、余ってたりする？」

「余ってはいないだろうが……どうした、気に入ったのか？」

「うん、凄く。それで、お土産にと思ってね」

「お土産、か……」

そう呟くなり、鹿嶋先輩は顎に手を当てて思考を始めた。

繭を潜め、ただ一点の虚空を見つめて。

一分、五分、十分と経ち。

あれ？ 僕、もしかして何か間違えた？ と気付いた時はもう、
遅かった。

思考はまだ続く。

途中、彼女の後方にあるテレビから、バラエティー番組が始まった事を報せるBGMが流れ出した。

今はそれどころじゃないというのに、空気が読めないテレビは、陽気なBGMを流し続けている。

本音を言えば、見たい。

けれども、現状を作り出してしまった張本人としては、誘惑に負ける訳にはいかない。

だから見る、鹿嶋先輩を。

……今まで全く気付かなかったが、どうやらこの人は、思考を開始すると超が付くほど集中出来るようだ。

その思考力を恋愛部分にも使って欲しい、と思ったりしているのは秘密だ。

多分、彼女が集中して思考出来るのは、今まで学んで来た事だけだろう。

学校で学べる事だけ。

だからこそ、恋愛事に関しては無知であり、故に思考をする事が出来ず、僕に頼っている、と。

本当、勿体無い人だ。

でも、そんなバランスの悪い人だからこそ、僕はついていけるんだろうなあ。

変人は嫌いじゃない、興味深いのだ。

「……よし、分かった。ならば帰宅時、水筒に入れて渡そう」

やっと長い思考を終えて結果が出たのは、思考開始から二十分後だった。

その答えに、果たして二十分も掛ける必要があったのだろうかと思いつつ、とりあえず例を言っておく。

相変わらず鹿嶋先輩は、礼などいらんっという言葉を返して来たけど。

さて、脳内に閑話休題という言葉をぶつけるかな。

「んじゃそろそろ、本題に入ろう。——どうして僕を、早退させてまでしてここに呼んだの？」

問うと、鹿嶋先輩はハツとした表情になった。

そして、僅かに俯き、眉尻を下げる。

下唇を噛み、少しの間を空けて、思い切ったように顔を上げた。

「この前の……メールでの、そそのの……こ……こくの……件についてなのだがっ！」

振り絞るように、途中、声をどもらせながら、彼女は言った。

顔を真っ赤にしているところがまた、恋する少女って感じを引き立てる。

……ってか、さすが鹿嶋先輩。

その事の為だけに、僕を学校から拉致って来るとは。

お詫びとして、後で昼食を奢ってもらわないとね。

Answer・09：不器用な彼女の小さな過去

さて、引き続き鹿嶋先輩の乙女的相談会を続行したい所存ではありますが、アクシデントなるものが発生してしまいました。

ちなみに、ここで言うアクシデントとは、僕個人の感想です。

決して、一般人全てがこのアクシデントをアクシデントと呼ぶ訳では無いので、あしからず。

ああ、だからと言って僕が異常人の仲間入りしているって訳じゃない事を、念を押して伝えておく。

では、そのアクシデントとやらを、内心の掛け声の後に発声しましょう。

せーのっ、

「相手のアドレスを知らなかったてー!？」

「こ、声が大きいぞ秋葉！ 耳に響いたではないか……」

「いやいやいや、そんな悠長な事を言ってる場合じゃないよっ。え、何？ アドレスも知らないのに、メールで告白がどうのって相談して来てたの？ なんでそんな無計画な事したの？ なんで調べようとしなかったの？」

俺の詰問に、ううああと唸り、珍しく弱り気味の鹿嶋先輩。

こんなレアな姿は滅多に無い為、今後の変人行動に釘を刺すべく、弱みとして写メに残そうかと思う衝動を抑え付ける。

良く考えたら、弱みでもなんでも無いし。

多分、睡眠時間を削られた相談が無駄だった事に、少し苛立っているだけだろう、うん。

その苛立ちを掻き消すべく、怒りを乗せた溜息を深くつく。

……さて、どうしたものか。

実際のところ、彼女が思いを寄せる人を、僕はほとんど知らない。聞かされていないから、当然と言えば当然なんだが。

ただ、唯一僕が知る情報では、強いらしい。戦闘的な意味で。

二年くらい前、ある出来事を切っ掛けにその人に出会い、惹かれたそうだ。

質の悪い、一目惚れというやつ。

それからというもの、彼女は武を鍛え始め、僅か数週間で何とか色の帯（なんか強い人に与えられる色の帯らしい）を手に入れたとか。

普通じゃあり得ない事だというのは、当たり前。

それをやつてのけるから、彼女は変人、異常人なのだ。ある意味、秀才とも言える。

要は素質の問題。彼女は武に向いていたという事だけ。

だからこそ彼女は、想い人と同じ武を習得出来た。流派は違うだろうけど、細かい事はこの際、気にしない。

ここだけの話、彼女を変人と認識している者は、意外と多い。

原因は、想い人と同じ愚行を働いた事。

なんでも、その想い人は一時期だけ、とある地域で喧嘩の日々を過ごしていたのだとか。

狙う相手は、人に迷惑を掛けている不良やあんな関係の人達。

一見、良い行動と捉えられるかもしれないが、喧嘩を行う者は理由がどうあれ悪人にされるのが、今の世の中。まあ、彼女はそんな人に惚れたのだろうけど。

だが、その愚行もある日を境にめっきり減った。

後に残るのは、有効期限（仮）が七十五日の噂だけ。

けれども、それを快く思わない者が居てしまった。

他にもない、鹿嶋 鞘華その人である。

彼女は鍛えた武を存分に使い、本人非公式で愚行を受け継いだ。

しかしそれは、二年生への進級と共に終わりを見せる。

理由としては、僕に出会ったからとか、そんな青春全開な事では無く、単に警察沙汰になったからだ。

しかし、その件に関しての内容が、ニュースにて三十秒程の放送

が数回と、新聞記事の端に小さく載っただけつてのは、今思うとお嬢様としての財力が可能にさせた事なんだなあ。

それでも、マスコミの僅かな報道を見てしまった者達は、その噂をじわじわと広め、彼女を避ける者は少なくない現状だ。

まあ、そんな現状でも生徒会選挙で生徒会長に二回連続で当選したのを見ると、期待はされているんだなあ、と関心出来る。

と、ここでの確な突っ込みとして、なんだよ結構知ってるじゃないかって言葉が来そうだが、ところがどっこいである。

想い人についてはほとんど知らないが、鹿嶋先輩については知っている、ただそれだけだ。

全て本人から聞いた話だから、嘘偽りは無いだろう、多分。

まあ、そんなこんなで問題だらけな人が、恋愛事で悩んでいるとは、随分と不思議で面白い話だ。

ちなみに、去年の彼女はどうしても会えない想い人を忘れようと、他の者に気を移そうとしたけれど、いざ告白って場面でやっぱり止めて逃走、もしくは相手が噂を知っているが故に断られる、という結果に終わった。

変人だけど、一途なのだ。

だから僕は、彼女に進んで協力している。

なんてったって、変人観察が趣味だからね。

だから僕は、

「それじゃ、まずその人に会わないとね」

「な、ななんでもそそうなるのだあ!？」

「だって、アドレスを知らないといけないんでしょ? だったら、行動あるのみだよ」

今の僕は、午前だけで学校を終えた為、休日が増えた事に少し機嫌を良くしているのだ。

だから、今日一日は彼女に協力してやろうと決めた。

幸い、情報通が親戚に一人だけ居る為、目的の人物を特定するの

に差ほど苦労はしないだろう。

後は鹿嶋先輩次第だが……。

問題の彼女は、いそいそと立ち上がり、クローゼットを開けた。そして、そこから服を取り出し、大急ぎでパジャマを脱ぎ捨てる。綺麗に丸められたパジャマは、これまた綺麗に放物線を描いてベツドに載った。

……にしても、遠慮無しに着替える人である。

それほどまでの緊張か興奮、もしくはその両方の感情が、彼女の理性を麻痺させているのだろう。

動作がぎこちないのも良い証拠だ。

ともあれ、彼女が着替えを終えたら早速、都会へと繰り出そう。目的地は、親戚の喫茶店だ。

Answer・10：騒々しい友人

午後の授業が全て終わり、帰宅の徒につく生徒や部活に励む生徒が多々見られる放課後。

廊下には、開いた窓から入る部活動の掛け声が響き、またその廊下を走る生徒も居た。

校内の廊下を全て使い、一つの階に一学年、という振り分けでトレーニングを行っているのは、陸上部だ。

通常、陸上部はグラウンドの外側に備え付けられた舗道を利用して部活動を行っているのだが、ゴールデンウィーク中に三年生の大会有る為に彼らだけで使い、一、二年生は校内に追いやられているのである。

そして、三階を利用している一年生の中には、姫香の姿があった。赤いジャージ姿の彼女は、同じ陸上部であるジャージ姿の千尋と隣り合わせに走っている。途中、額を伝う汗を袖で拭いながら。

と、その時不意に、千尋が声を掛けた。

「ねえね、姫様。ゴールデンウィーク中には予定とかあるの？――
――ってあ、これ聞いても答えは一つか――」

「何よ、その終始棒読みの質問は」

目を細め、睨みを効かした視線を向ける姫香に千尋は、にははつと笑って見せた。

「だってだって、姫には愛しの榊君が居る訳じゃん？ だから当然、休みの間はラブラブにゃんにゃぎやああああああ！！」

刹那、千尋の両目に二本の指が穿たれた。

それにより、バランスを崩した彼女は、壁に激突し、豪快にこけ

た。

四肢がバラバラな方向を向いた状態で倒れる彼女は、後ろから走って来た陸上部員の女子生徒に踏まれるという追撃を受ける。

ごっめんねちひろ、と言いながら走って行く彼女を尻目に、肩を僅かに揺らして呼吸する姫香は、深い溜息をついた。

「何やってんのよ、あんたは」

「ひ、姫がやったんでしょーがぁー!」

「自業自得よ。でも、休憩のついでに保健室でも行く?」

「え……あ、ついでですかいな。まあでも、お言葉に甘えて」

ゆっくりと立ち上がる千尋は、素早く姫香の首に腕を回し、背にもたれ掛かった。

その事に姫香は鬱陶しそうな表情を見せながらも、すぐに諦めて歩き出した。

ずるずると千尋を引き摺っている彼女の後ろ姿は、他者から見れば異様な光景だっただろう。

だが、そんな事など全く気にしていない彼女は、階段を下りて二階の保健室へと向かう。

掲示板や地域行事のポスターが貼られた職員室前の廊下を通り、横を駆け抜けて行く二年生の陸上部員を見ながら、角を曲がる。

その先にある通路の途中にあるのが、保健室だ。

姫香は、保健室に寄るのはいつ以来だろうかと思いつきながら、そういえば護に助けられた時だ、と答えを早々に見つけ、目の前にある保健室の戸を見る。

押し戸式のそれを、彼女はノブを捻って押し、二度目の来訪を果たした。

室内には独特の薬品臭が漂っており、その源である薬品が並べられた棚が、壁際にいくつもあった。

そして、奥の左側にはカーテンで区切られた空間があり、右側に

は長い机が置かれ、上には色々な資料が山積みになっていた。
だが、保健室にあるべき姿は無い。

「先生、居ないね」

「別に居なくても良いじゃない。ベッド借りるだけだし」

言いながら、首に巻き付いている千尋の腕を外し、カーテンへと近寄る。

次いで、そのカーテンを掴んで思い切り横に引くと、シングルベッドが一つ、そこに置かれていた。

また、その向こうもカーテンで区切られており、もう一つ同じベッドがある事を示している。

彼女は目の前のベッドに腰掛け、千尋を見やった。

「それで、踏まれたところはなんとも無い？」

「え？ あ、うん。……他に心配するところがある気がするんだけど」

「それはもう一度言うけど、自業自得よ。第一、あんたが変な事言うからじゃない」

苦笑を漏らす姫香とは反対に、笑みを浮かべる千尋は、机の前にあったオフィスチェアに座った。

次いで、背もたれの部分に前からもたれ掛かり、床に着いた足を小刻みに動かす。

するとキャスターが少しずつ動き、ゆっくりと姫香に近寄って行った。

うあーっと呻きながら進む彼女は、まるで生きる屍のよう。

「変な事じゃないですよー、立派な恋話ですよー。それで、デートの予定とかあるの？」

「べ、別にデートじゃないわよ！　ただ、最近は少し冷たくし過ぎちゃったし、その……そう！　この前助けてくれたお礼として、会うのを約束しただけよ！」

顔を赤くしている姫香は、かなり必死だった。

しかしながら、声を張り上げ、手をあたふたさせるその騒がしい行為は、保健室では厳禁だ。

故に千尋は、まあまあつと言いながら、彼女を宥めようとする。

しかし彼女は、それでも落ち着きはしない。

と、その時だ。

なんの前触れも無く、入口の戸が開いた。

それと同時に入って来たのは、保健室の先生では無く、一人の男子生徒だった。

体操服から出た肌が全体的に浅黒い彼は、呆れた表情で姫香を見る。

「全く、五月蠅い奴だな春原は。廊下まで聞こえていたぜ？」

「だ、だだだつて千尋が——って、あ。誰かと思えば執事君じゃない」

「執事じゃない、リックだ。岸田　リック。何回言ったら分かるんだよ、ったく」

リックと名乗った男子生徒は、何やらブツブツと呟きながら薬品の棚に近付き、引き出しを開けて中を漁り出した。

そして、すぐにお目当ての物を見つけると、じゃあな、と言って早々に立ち去ろうとした。

だが、そんな彼を千尋が呼び止める。

「そついえば岸田君。榊君がどこ行ったか知らない？　今日の放課後は、珍しく姫の所に来なかったから」

「さあな。まあ、昼休みには忙しそうに電話してたから、用事でもあるんじゃないか？」

「そっか。情報ありがと。んじゃ、バスケ頑張ってるね。」

瞬間、えっという表情をリックは見せたが、おう、と返事をして保健室を出て行った。

そうして、後に残った二人の内、姫香は意外なものを見る目で千尋を見た。

「良く知ってたわね、あいつの部活」

問いに、ふふんつと鼻で笑った千尋は、誇らしげな表情をしながら、床を蹴ってオフィスチェアごと回転する。

そして、五回転程してから床に足を着けて無理矢理止まり、頭をふらつかせながら人差し指を立てた。

「バスケ部に期待の一年現る！　って情報は有名だよ？」

誇らしげに言った千尋は、姫香の返事を待つ事無く、また回転を始めた。

対して、ふふんつと相槌を打った姫香は、おもむろに立ち上がり、回転する千尋の頭にチョップを叩き込んだ。

次いで、突然の痛みに悶える彼女を無視して、入口と正反対の位置にある、この部屋唯一の窓がある場所まで移動した。

そして、窓の向こうに広がる街並みを見ながら、ふと呟く。

「……忙しいって。何やってんのかな、あいつ」

無意識の内に出た内心の言葉は、他の誰にも聞こえる事は無く、室内の空気に混じって消えた。

Answer・11：顔を合わせる変人と変人＋α

「私は、何をやっているのだろうか……」

呟く護は、深い溜息をついた。

彼が見ているのは、携帯電話のディスプレイに映し出された姫香の写真だ。

カメラに向かってピースをしているその画像は、待ち受け画面に設定されている物である。

彼はそれを十分に観賞した後、折り畳み式である携帯を閉じ、制服のポケットに納めて視線を窓へと移した。

今、彼は車の後部座席に乗っていた。

用事を済ませる為、その車にて目的地へ向かう真つ最中だ。

その用事というのも、急なものである。

麻薬の売人増加に関わった事件について、警視庁長官との密会を本日午後四時半に行うとの連絡が、同日の昼時に突然あったのだ。

故に彼は学校が終わり次第、急ぎで車に乗り込んだ為、まだ制服姿なのである。

全く、忙しいものだな、と彼は思う。

それもその筈、当日に予定を入れる事など、異例な事だからだ。

ましてや両者共、組織のトップに立つ者であるが為に、スケジュールを簡単に変えられる筈は無いというのに。

だが、入ってしまった予定にとにかく言っても仕方無い。

それを承知しているからこそ、護は予定を破棄する事無く、今こうして移動中なのだ。

景色は流れ、しかし差程変わらぬ街並みを、彼はただ見つめる。

歩道を行く人々は、平和なものだ。

ある者は娯楽を得、ある者は目的を成し遂げ、またある者は暇を持て余す。

その平和を、彼は心の片隅で羨ましいと思っていた。

同時、脳裏に浮かぶのは姫香の姿。

……ゴールデンウィークには、彼らのような一時を過ごせるだろうか。

思い、不安を抱く彼を他所に、人々は動く。

やがて、赤信号で車が停まった時、彼の視界に見知った姿が映った。

滑らかな黒い長髪が目立つ制服姿の女子生徒は、彼と同じ高校の生徒会長だった。

また、その隣には少し背の低い女子生徒が一人、並んで歩いている。

その姿を見つけた瞬間、彼は後部座席のドアを開けて、半身を外に出した。

「運転手。すまないが、この付近で待っていてくれ。なに、すぐに済む」

告げながら、車外に出た護は、先程の生徒会長の下へと駆けた。赤信号で停車している車の間を抜けながら、歩いている相手に追いつくのは容易であり、すぐに声を掛ける。

「早退したというのに、こんな所を歩いているとは、良いご身分だな」

皮肉混じりに言うと、彼女は咄嗟に振り向き、驚いた表情を見せる。

「柵か！ 奇遇だな、こんな所で会うとは」

「貴様と奇遇を共有し合いたくは無いな、生徒会長。ところで、貴様是谁だ？」

護の視線は、左隣の女子生徒へと移る。

すると彼女は、おっとりとした表情を困惑の表情へと変えた。赤の他人からのいきなりな問いに、なんと答えれば良いか分からないといったところだ。

けれども、そんな彼女の反応を他所に、護は小首を傾げる。

「どうしたのかね？ 私は、貴様が誰か聞いているのだが」

「あ、えつと……僕は——」

「そこまでだ、榊。彼女が誰かなど、どうでも良いではないか。なんなら、私の名を教えようか？ 私は鹿嶋 鞘華だ」

「どう考えたら、その結果に行き着くのだ。まあ、勉強にしか脳の無い貴様の頭では、普通の考えはまず不可能、か」

肩を竦め、深い溜息を一つ。

そして、侮蔑の言葉を全く気にしていない鞘華を一瞥し、再度、左隣の女子生徒を見やった。

次いで、軽く会釈をする。

「失礼。貴様に不愉快な思いをさせてしまったのなら、謝ろう」

「そ、そんな事無いよ。別に気にしていないから」

言いながら、慌てて両手を振るう彼女に、護は思わず苦笑した。

だが、その表情は一瞬で消え失せ、代わりに腕を組んで鞘華を睨みつける。

どうやら、作られた表情だったようだ。

「とりあえず、私が貴様に声を掛けたのは伝言があったからだ。副会長からだが、ゴールデンウィーク中に例の資料を纏めておいて欲しいそうだ。何故、他の生徒会役員が伝えねばなんのだと思って

いたが、どうやら無駄では無かったようだ」

「そう、か。まあ、何はともあれ、ありがとな」

「礼には及ばん。――では、用があるので失礼するよ」

そう告げて、護は踵^{きびす}を返した。

用事が済んだ為、もう彼女と顔を向き合わせる意味は無いとも言つかのように。

だが、歩みを始めた彼の脳内では、思考が始まっていた。

鞘華の隣に居た、女子生徒のプロフィール。

女である事はまずの条件であるが、彼が気になったのは一人称が？僕？だった事だ。

故に、他の特徴も照らし合わせたが、身長や年齢が共に範囲内だった。

一連の事件の関係者と思わしき人物に。

だが、彼は興味のある者（特に姫香）以外の見た目はほとんど覚えなない為、彼女の姿は全くと言っていい程、今は覚えていなかった。

……それでも、まさか、な。

そう、内心で否定の言葉を吐き捨てる。

世の中は、そう簡単に事が運ぶ程、優しいものではない、と。

ましてや、同じ高校の生徒が、というのもありえない。

しかし、一応記憶の片隅に残しておこうと決め、彼は思考を終えた。

そしてそのまま、待たせていた車に乗り込み、この場を後にした。

Answer・12：新入部員と初の部活動(?)

人は、忙し過ぎると逆に何をすれば良いのか分からなくなるそう
だ。

それ程までに慌てているのか、混乱しているのかは、細かく追求
しないが。

しかし、忙しくも無く、暇を持て余している者も、同じように何
をすれば良いのか分からない。

果たして、この根本が違うが結果が同じ現状は、矛盾と呼んでも
良いのだろうか？

ともあれ、僕は今、後者の状態に陥っている。

鹿嶋先輩と一緒に僕の親戚の喫茶店に出向いたが、結局のところ
なんの収穫も無かった。

というか、親戚兼店長は不在だった。

店員曰く、保健室の匂いが懐かしくなったので、親友に会いに行
くと言い残し、姿を消したのだという。

とりあえず、せつかく来たのだから先輩が奢ってくれる事にな
ったので、お言葉に甘えてホットミルクチョコなる物を頂いた。

ちなみに、鹿嶋先輩はコーヒーだったのだが、何だ傍から見れば
親子連れじゃないか、と店員に言われ、悪くないと思ったのは余談
としておく。

その後、鹿嶋先輩から頂くのを忘れていたホットレモネードを帰
りに急いで購入し、喫茶店の前で解散する事になった。

さて、その僕が今、どこに居るのかと言うと、ふらふらと学校に
舞い戻って来ていた。

時刻は午後四時。既に放課後となったその時間に再登校する自分
は、一体何なのだろうか。

自分でも良く分からないが、特に何もする事の無い日は決まって
放送室に向かっている為、今もこうして放送室に行こうとしている

のかもしれない。

それに、明日からは連休がある。

だからその前に、新入部員に顔を出しておこうとでも、思ったり思わなかったり。

なんて思考している間に、放送室前に到着した。

相変わらずの戸を押し、放送室内へと入室する。

するとそこには、描きかけのペガサスをマジマジと見つめる美咲の姿があった。

彼女は、僕が来た事に気付くと、笑顔を見せる。

「あ、おかえりなさいです、先輩！ 突然ですが、そこにあるレモネード、先輩が用意したんですか？」

本当に突然だ。

その為、へ？ と間抜けな声を出してしまった。

とりあえず、その恥ずかしさを紛らわす為に、美咲が指差す方向へと目をやる。

するとそこには、どこかの教室の机が置かれており、その上にはレモネードと書かれた簡素な箱が五つとティーカップが三つ、角砂糖などの瓶と電動ポットが載っていた。

…… 鹿嶋先輩だろうか？

もしそうならいつの間にか手配したんだろう。

というか、鹿嶋先輩の仕業なら、喫茶店の時に僕のレモネード購入を止めて欲しかった。それ以前に、伝えて欲しかった。

そんな事を思いつつ、近寄ってレモネードの箱を一つ開けると、中には小瓶が敷き詰められており、黄色い液体がそれぞれに適量入っていた。

多分、レモンの果汁だろう。

僕はそれを二本取り出し、美咲に向ける。

「ホットレモネード、君も飲む？」

「……はい！ それじゃ、遠慮無く頂きますっ」

浅く頷いた美咲は、ペガサスの方に向き直して、観賞を再開した。
……さて。飲むかと聞いておいてあれだけど、作り方が分からない。
い。

致命的である。

けれども、数時間前の鹿嶋先輩の台詞を思い出してみる。

確か、レモンの果汁にハチミツやシロップなどを混ぜたって言うてたな。

つまりは、備え付けの物を全て入れる事によって、完成すると言う訳だ。

ちなみに、備え付けの物は角砂糖の他に、ハチミツとシロップの瓶があった。

本当、準備の良い人だ。

まずレモンの果汁が入った小瓶のキャップを開け、中身を全部力
ツプに注ぐ。もちろん、二本目の果汁ももう一つのカップに注ぐ。

次いで、ハチミツとシロップをそれぞれ適量入れ、ポットのお湯
を注ぐ。

コポコポコポツと良い音を立てながらお湯は満たされていき、湯
気が立ち上った。

最後に角砂糖とシロップを投入し、プラスチック製の掻き混ぜ棒
（正式名称は知らないので仮）でこれでもかというくらいに掻き混
ぜる。

そして、掻き混ぜ棒（仮）を、机の下にあったゴミ箱に捨て、カ
ップ一つを手取る。

「はい、完成したよ。熱いから気をつけてね」

「おお、すげーです先輩！ 先輩すげー！ ありがとうございます
っ！」

「なんか良く分からないけど、どういたしまして」

やけにハイテンションな美咲にカップを渡し、僕は立て掛けてあるパイプ椅子を展開し、腰掛ける。

ギシツという音が出る程に深く座り、ふと喫茶店を出てからずっと立ちっぱなしだった事に気付いた。

放課後という時間が影響してか、満員の電車内でも立ちっぱなしだったから、足は疲労を訴えている。

帰宅時にも歩かなきゃいけないのに、勘弁して欲しい。

とりあえず、疲れを癒す為にカップに口をつけて、少し飲んだ。

熱いっと思った時には、既に十分な量が口内に入っており、柑橘類の酸味と同時に、ハチミツと甘味料のほのかな甘みが舌を刺激する。

次いで、喉に流せば、喉が潤い温かさが身体中に染み渡った。

美味い。

けれども、やっぱり鹿嶋先輩に頂いたレモネードの方が美味しいなと思うのは、贅沢というものだろうか。

しかし、ふと美咲の方を見やると、幸せそうな表情で飲んでいたので、これはこれで良しとしておこう。

そう思っただけで満足し、暫しの時間をゆったり過ごした。

「今、女子の間で話題の男子、ですか？」

放送室内に備え付けられている時計の針が五時を示した頃、僕はなんとなく美咲に質問していた。

それは、先日バカッブルから聞いた、行方不明事件に遭った一年

生の女子生徒の話を脳内で纏めていた時に、思い出したものだ。

確か、その女子生徒は行方不明になる前まで、同じ男子生徒を影ながらに想うクラブに属していた。

しかし、事件以来、その男子生徒に関する事は全く行わなかったらしい。

つまりは、その男子生徒が、少なからずこの事件に関係しているという事に繋がる。

だから、同じ女子で尚且つ一年生である美咲に聞いてみたという訳だ。

一応、関連する情報は集めとかないとね。

思いもしないところで、その情報は役に立つかもしれないし。

「えとですね、実はその人は同じクラスなんですよ。榊護、それがその人の名前です」

ただ、と付け足し、彼女は苦笑を漏らした。

「面白いけど、変な人なんです。一途って言うかなんていうか。まあ、そんな人のお陰で、私は放送部に入れたんですけどね」

「え？ その榊って人のお陰？」

「はい。あ、その人ですよ。校内放送使って告白したって人」

あゝ、美咲が入部した日の朝にあつたっていう出来事か。

僕の不機嫌の元になった出来事でもあるな。

「その人、榊はそれ以外に何度も同じ子に告白してまして、全てで玉碎してるんですよ」

馬鹿みたいですけどね、と笑いながら言う美咲は立ち上がって歩き出し、とつくに飲み終えたレモネードのカップを机の上に置く。

そんな彼女を見て一つ、質問事項が浮かび上がった。

「そつえば、君って彼氏いるの？」

デリカシーの無い発言は、年中無休です。

というか、これは既に空気の読めない奴の領域に達しているんじゃないだろうか。

そんな事を考えている僕の思考と同時進行で、美咲はきよんとした顔で僕を見ていた。

だが、その表情もすぐに崩れ、声に出して笑い出す。

「あはははっ、何言ってるんですか。こんなちゃらちゃらした子に、彼氏なんて出来る訳無いですよ。」

言ってる言葉の意味が成り立っていない気がするけど、まあいいか。

だったら、新たな青春の舞台である高校生活を、十分に楽しむが
良い。

なんて、先輩っぽいけど恥ずかしい台詞は、脳内で生まれた瞬間
に処分した。

代わりに、別の言葉を用意する。

「さて、それじゃあそろそろ帰るとするかな。放送部規定の下校時刻は過ぎちゃってるしね」

「話が急に変わりましたね。——ってか、え？ 放送部って、下校時間が決まっているんですか？」

「うん。普通は放送部自体、放課後に活動はしないんだけど、顧問は僕が絵を室内で描くのを許可する代わりについて、下校時刻を決めたんだ」

ちなみに五時ね、と付け加えると、美咲は残念そうな表情をし、ペガサスの絵の下へと小走りで向かった。

最後に目に焼き付けておくのかなっと思わせる程、瞬きをせずに見つめる彼女の横顔は、どこか名残惜しそうだった。

その後、数十秒置いて、彼女はこちらへと向く。

「よし、バッチリです！ では、帰りましょうかっ」

言いながら、隅に置いていたサブバッグを手に取り、僕と向き合う。

何故だろうか。その時咄嗟に、思いついた言葉を声に出していた。

「なんならその絵、完成したらあげようか？」

何気なく言ったその言葉は、彼女の表情をまたしてもきょとんとさせる。

次いで、先程と同じように崩れ、笑顔になった。

「はい、是非！ ありがとうございます！」

元気の良いお礼の言葉は、心地良いと感じた。

だから、言って良かったと喜んでいる僕が居た。

まあ、完成しても部屋に飾る訳でもないから、貰ってくれる人が居ると助かる。

完全に、趣味の範囲で描いているかから。

さて、終わったら次は、何を描こうかな。

既に僕は、次の絵の事を考えていた。

Answer・13：下校時間のある風景

放課後の帰り道、ひっそりとした廊下を女子生徒と歩く。

それは、青春男にとつては最高のシチュレーション……らしい。

僕の場合は、全く気にしていない事柄なのだけれども、果たして現実には皆そうなのだろうか。

ちなみに、隣を歩く女子、美咲は鼻歌を歌って上機嫌だ。

あれ、鼻歌を歌っている人が居るのなら、ひっそりという表現は難しいんじゃない？　なんていう問いはこの際、無しの方向で。

でも本当、鼻歌が無ければひっそりなんだ。

生徒玄関まで後、半分の距離なんだけれども、その途中には人っ子一人居やしない。

校内に居る生徒は大抵、部活動をしているから仕方無いだろうけど、せめて教師一人くらいは居てほ……居た。

現在地は職員玄関付近なのだが、そのエリアにある来客者の対応に使われるソファに、白衣を着た女先生が座っていた。煙草を銜えて。

茶色い髪の後ろをおさげにし、前髪を数本、派手に固めて伸ばした髪型は、あまり見たことは無いものであつて、まるで変人。

しかしこの変人、残念ながら顔見知りだ。

とりあえず他人のふりで素通りを試みるが、多分逃げられないだろうなあ。

「ん？　あ。秋葉ちゃんじゃない！　やつぽー」

ほら、駄目だった。

その変人の方へと向くと、泣き黒子を右下に装備した目が、弓のようになつて笑顔を見せた。

同時に、煙草を指に挟んだ状態の右手で、僕を手招きする。

「こらこら、煙草の灰が落ちて危ないよ、二口先生。手招きするな
ら左手でっ」

注意の言葉を掛けながら、二口^{ふたくち}佐湯^{さゆ}へと近付いて行く。

途中、横の美咲を一瞥するが、別に不快には思っていないという
だから、一安心。

とりあえず、目の前で踏ん返り返っている二口先生を見下ろす。

「こんな所で喫煙してるけど、保健室はどうしたの」

「鍵は開けておいたから、別に良いんじゃない？ それよりも、先
生のニコチン補給が最優先よ」

さも当然のように言う二口先生は、最後に長く吸って、白衣のポ
ケットから携帯灰皿を取り出し、短くなった煙草を押し込んだ。

そして、その携帯灰皿をポケットに戻し、深く深呼吸。

「で、何の用？」

「何の用って聞かれても、帰りに偶々見かけただけだし。第一、呼
んだのは二口先生の方でしょ」

「んあゝ、そういうえぼそうだったわね。先生も偶然、見かけたから
呼んだんだけど……聞きたい事かあ……」

呟きながら、天井を見上げる。

すると首筋に、赤い痕があった。

何の痕だろうか。

位置的には、吸血鬼に噛まれるような場所だけど、齒形が無い為
に論外。

まあ、原因が何かは知っているから、この思考はここでお終い。
丁度良いタイミングで、そうだ、と言った二口先生は何か浮かん

だようだし。

「そうだ、あのじゃじゃ馬は元気かい？」

「じゃじゃ馬？ 一体、誰の事を指してるの？」

「惚けるんじゃないわよ」。秋葉ちゃんが面倒を見ている鞘華ちゃんよ。今日は休みだったらしいけど、何かあったの？」

「なんだ、鹿嶋先輩の事か。別に、面倒を見てる訳じゃないよ。つてか、そんな風に見られていたんだ」

苦笑混じりに言うと、不意に二口先生は不気味な笑みを浮かべた。まるで全てを見透かしているとも言つかのように。

しかし、そんな表情はすぐに消え、凜々しい表情になった。全く。ずっとその表情で居れば、格好良い人なのに。

「さ、下校時刻は過ぎたわよ。ここから先は、オトナのじ・か・ん
っ」

「職員会議ですか」

「こ名答」

良い加減、誤解されるような発言は止めて欲しいものだ。

横の美咲は小首を傾げているし。

いつの時代も、純粋な子は下ネタを理解出来ず、また理解する必要が無いのだ。

いや、そもそも下ネタを言う人に近付くべきでは無い。

「それじゃ、頑張つて下さいね二口先生」

「はいはい、秋葉ちゃんの応援パワーを糧に、いっちょ頑張るわよ」

その暢気な声を背に受けつつ、僕達は生徒玄関への歩みを再開す

る。

途中、袖が軽く引かれたので横を見ると、美咲が小首を傾げて問い掛けて来た。

「先輩はあの先生とかなり仲が良いんですか？」

「ん？ いや、そこまでだよ。ただ、入学早々お世話になった先生だから、気楽に話せるんじゃないかな」

言いながら、少し思い出す。

春休み中に街の裏路地で、変な奴に絡まれて。

けれどもそこを、噂の男に救われた。

強く、何より尊敬したくなるようなその人は、まるでヒーローのようにその場を去り、入れ替わるように近寄って来たのが、二口先生だった。

彼女は慌てる様子も無く、僕を車に乗せて傷を手当してくれた。それから数日後、入学したこの学校で再開した時は、二人とも大笑いしたっけ。

あの人は、二口先生は偶に茶化すけれども、親身になって相談に受け答えしてくれる、生徒思いの先生なのだ。下ネタだけは、勘弁して欲しいけども。

学校から外に出た現在。

今もなお、横を歩く美咲は、時折後ろを振り向くなどして、どこかそわそわしていた。

なんかこう、恥ずかしい物を買えたは良いが、帰り道で知り合いに会ったのを恐れている子供みたいな感じ。

この場合、普段とは違う物というか者といえば僕なのだが。
生憎、僕と一緒に居て困るような事は何も無い気が……しないで
も無かった。

ああ、鹿嶋先輩と一緒に居る人だったので知れ渡っているからなあ。

「なんかごめんね」

「へ？ どうしたんですか、いきなり」

後頭部を見せていた頭は一瞬にして百八十度回転し、疑問の表情
が僕に向けられた。

が、しかし、それと同時に車道からクラクションが響く。

聞き覚えのある音だなと思いつつ、音のした方向を見れば、白の
セダンが停まっていた。

そして、助手席の開いた窓から見える運転席には、父さんが座っ
ていた。

いつにも増して真剣な表情の父さんは、数秒置いてようやく口を
開く。

「秋葉。話があるから、乗っていけ」

声には、深刻さが感じ取れた。

けれども一応、後輩と一緒に居る為、聞くべき事は聞いておく。

「後輩も一緒に乗っても良いかな？ 駅までで良いと思うんだけど」

「すまないが、彼女には一人で帰って貰ってくれ」

無口な父さんが、珍しく冷たい言葉を放った。

その口調は、警察でいる時の父さんだ。

どうやら、関係の無い者には聞かれる訳にはいかない話らしい。
僕も関係の無い者なんだろうが、そこはほら、家族補正としてね。

ともあれ、残念ながら承諾されなかったので、美咲の方へと向く。

「と、言う訳なんだ。ごめんね」

「いえいえ、別に気にしてませんよ！ それじゃ先輩、ゴールデンウィーク中に縁があれば、よろしくです。ではっ！」

虚空に突っ込みを入れる勢いで、ビシツと片手を上げる。

そして、そそくさと早足で帰って行った。

僕はその後ろ姿を見届けた後、後部座席のドアを開けて車に乗り込む。

程無くして車は動き出すが、無言の空間が続いた。

とりあえず、左の窓を見てみると、普通に歩いていた美咲が見えた。

だが、それも一瞬。

後は右から左に流れる人工物の景色だけである。

「お前は」

不意に、沈黙が破られる。

言葉を放った父さんをバックミラーで見ると、雲がかかっていた。暗いその表情は、まるで怖い何かを見たかのよう。

「お前は、例の行方不明事件を、調べていたりするのか……？」

ゆっくりとした口調で問われた僕は、内心でドキツとした。

ここで、何にもしてないよ、なんて言えばこの会話はここで終わるだろう。

しかし、本格的には無いが、探り始めているのは事実。だからこそ僕は、嘘は言わない。

「うん。まだ、ほんの少しだけなんだけどね」

言っと、バックミラーに映る父さんは苦笑した。

次いで、赤信号で車が停まると、バックミラー越しに僕と目が合う。

「関わるなと、忠告した筈だろ？」

「そうなんだけど、なかなかどうして、父さんの血が疼いてね」
「なら、仕方ないな」

実際、事件に持ってしまうのは、父さんの血が流れているからだろうなあ。

だが、それが良い。

「お前の意思なら、俺がどうこう言うものではないな。なら、忠告を追加しておく」

瞬間、父さんは眉を顰めた。

僕を睨むように、けれども心配するように、バックミラー越しに視線を向ける。

「今日、この事件に関わろうとした俺達に、圧力をかけてきた者に会って来た」

「会って来た？ 警視庁長官に会ったの？」

「いや、警視庁長官に同行して、別の者にだ」

警視庁長官と同行って、相手は大物なのだろうか。

ちなみに、父さんの地位は警部補らしい。

その地位がどれだけのものは詳しく知らないが、部下を持てる程であるという事は知っている。

だからなのだろうか。警部補は、行方不明事件の纏め役になる筈だった人だから。

「その者は、今まで会って来た者とは全く違う空気を持ち合わせていた。お前の一つ年下の少年なのだが、一部地域の裏社会の頂点である三家中の一家、榊家の現頭首なんだそうだ」

「僕の一つ下で、榊……？　ちなみに、名前は？」

「榊 護」

瞬間、全身の肌が鳥肌となって総立ちした。
痺れるような、久々の感覚。

まるで、僕が喜びに浸っているかのように。
だってそうだろう？

一つ年下の少年が、しかも同じ高校であり、僕がさっき知った存在が、それ程までに大きな存在だったなんて、思いもしなかったから。

しかも、わざわざ頭首本人が圧力をかけに、ついには何かしらの交渉・取引の為に向いたのだ。

榊家つてのがどれだけ凄いのかは分からないが、裏社会の頂点だつてくらいで、途轍もなく凄い人だって事は分かる。

例え一部地域だけだったとしても、だ。

だって、いくら一部と言っても、ここは東京だからね。

東京での頂点は、多分関東での頂点。

ともあれ、そんな大物が関わってくる程の事件だったのか？　これは。

興味が益々沸いてきた。

「……ねえ、ちなみにどんな話をしたの？」

問いに、父さんは顔を顰めた。

しかし、何故かすぐに破顔する。

珍しい表情だ。

こんな表情を過去、最後に見たのは、僕が警察に興味を持った時だったわけ。

「血は争えないな。では、話そう。場所は、招待状通りに行った所にある、高級料亭だ——」

Answer・14：不真面目な男の真面目な姿

都内のとある料亭。

その場所には他と比べれば珍しい、出入口付近に駐車場がある作りになっていた。

また、数台の車両が綺麗に並んで止まっており、全てが黒塗りの高級車だった。

一台だけ、同じ黒ではあるが車種が全く違うディアボロスが置かれているところを見ると、特別な者が乗っていた車なのだろう。

そんな場所に、一台の白いセダンが入り込み、空いた場所に入る。エンジンが切れ、中から出て来た二人の男は、大柄で体格の良い警視庁長官と、彼より僅かに背の低い、無精髭を生やした警部という、異形の組み合わせだった。

これは、今から会う相手からの指示であり、もちろん護衛の姿は無い。

呼ばれたのはたった二人。

その二人は出入口である門の前まで行き、引き戸を開ける。するとその先には、石畳で出来た道があった。

距離で言うと五メートル程あるうそれは料亭の玄関先まで伸びており、その周囲を草木や池などで和風に飾られていた。

また、その周囲には、黒いスーツ姿の男が二人一組で、何組かが見回りをしている姿が見える。

その厳重な警備は、中に居る者がどれ程の者なのかを連想させる程だ。

料亭内に入った二人は、玄関で待っていた女中の案内で、奥にある客間へと招待される。

襖が開かれると、中には既に先客がおり、テーブルを挟んだ向こう側に居る二人の男女が、こちらを向いて正座をし、待っていた。

向かって右に居る少年は黒いスーツを着ており、黒髪をオールバ

ツクでぴつちりと固めている。

細められた目は鋭く、まるで二人を睨みつけているかのよう。その隣、向かって左に居る少女は藍色の着物で艶やかに身を包んでおり、綺麗な長髪をポニーテールに束ねられていた。

ぱつちりと開かれた目は、しかし無機質な物のようにも見え、ジツと虚空を見つめている。

不思議な光景だと、二人の内の一人、警部の伊藤 健一は思った。彼は、自分の子より一つ下の年齢と聞いていたが、そんな者がこのようなところに居るといふ事に対して、内心、首を傾げていた。だが、室内に足を踏み入れるのと同じ、空気が変わった。異質で重苦しい空気。

呼吸する事がやつとのような現象を想像してしまう程の空間で、彼の正面に居る二人は支配者のように君臨していた。

いや、正確に言えば少年の方が、だ。

状況からすれば、健一が少年を見下ろしている形になっているのだが、少年の視線はまるで見下ろし、見下しているかのよう。

この時健一は、人の立場に年齢なぞ関係無い、と改めて思い知ったのだった。

ともあれ、二人の前に用意されていた座布団に座り、男女と向かい合う。

それと同時に、少年が口を開いた。

「失礼だが、警視庁長官の剛田 孝則と警部の伊藤 健一だな？」

問いに、孝則は頷く。

すると少年は目を伏せ、小さく会釈をした。

「剛田は久方に、伊藤はお初にお目に掛かる。私は三貴家の内の一
家と謳われ、今もなお現役で裏社会を担い牛耳っている者。榊家・
現頭首、榊 護だ」

「そして私は、榊 護様の側近、藤林 桜ふじばやし さくらです。以後、お見知りおきを」

護に続いて自己紹介をした桜は、深深と頭を下げ、その後二人を一瞥する。

次いで、襖が開くのと同時に女中が入室し、料理を運んで来た。手に持つお盆には焼き魚や煮物などの和食が載せられており、彼女はそれらをテーブルの上に一つずつ移す。

全員分の料理を移し終え、もう一人の女中とすれ違うようにして、退室して行った。

もう一人の女中は酒瓶とグラスをお盆に載せており、それもまた全員分配られる。

そして、彼女も退室したのを確認した護は、すまない、と前置きして言葉を続ける。

「料理を頼まなくては、この客間を借りられないのでね。私は基本、手をつけないが、貴様らは食べても構わんよ」

彼はそう言っているが、二人は箸に手を伸ばそうともしない。

この場では、料理とは飾りでしかないのだ。

だからこそ、護は手をつけないと告げ、また二人も無言で遠慮する。

最も、彼らがここに来たのは、食事をする為では無いのだ。

「さて、では本題といこうか。——最近、巷で麻薬が大量に出回っている事件がある。その事について、君達に協力して欲しいのだ。……いや、性格に言えば、私の指揮下に入って貰いたい」

その言葉は、健一に驚きを与えた。

当然だ。極道者が国家権力を自由に扱える権利を求めているから

だ。

それが一時的なものだったとしても、到底許される事では無い。だが、彼の隣に居る孝則は、表情一つ変えていなかった。

「待て。その条件を了承する前に、そちらからは一つ、提供して貰わなくては困るぞ。何せこちらは、女子高校生行方不明事件の調査を停止させられているのだからな」

「ああ、そうだな。その事には感謝している。あれは、私の配下に関わっている為、今の時期に探られると困るからな」

しかし、と付け足し、小首を傾げた。

「別に、私は永久に調査を停止しろとは言っておらんよ？ この麻薬問題が解決すれば、後は自由に調査しても構わんからな」

言葉に、隣の桜は僅かに視線を護に向けるが、すぐに目を伏せた。その動作に気付く事無く、あるいは気付かぬふりをしているであろう護は、人差し指を立てた。

「つまり、私からの要求は一。そして、対等であるにはこちらから提供を一で間に合うな。ならば、最近貴様らが焦がしている暴力団、相沢組の風俗関係に関する情報を、好きなだけ提供しよう。これで差し引きゼロだ」

「む。確かに風俗の件に関して調査はしている。その上、今は手を焼いている状態だ。だが何故、相沢組なんだ？ 韓国サイドの者が統括しているんじゃないのか？」

問いに、護は失笑した。

次いで目を細め、口の端を吊り上げる。

「何だ、全然駄目ではないか。いいか？ 韓国サイドの者は利弓手（りゆんて）という者だが、そいつに指示を出しているのが相沢組だ。相沢組は他にも、爾志（にし）や素雲（そうん）を配下しているが……まあ、それは今で無くていいな。ともあれ、貴様らが追うべきは相沢組だ。親を叩けば、子も自然と消える」

韓国などの他国から流れて来た素人は、雇い主を失えば、何をすれば良いのか分からなくなるのだ。

どれだけ手下を従えていようと、所詮日本では素人なのである。それを知っているからこそ、護は頭の情報を与えた。

当然、二人はその方法を知っているが。結局のところ、情報不足だったのだ。

「とにかくだ。これで、取引は成立かな？」

「いや、待った。実はこちらからも、要求があるんだ。……すまないが、麻薬事件の首謀者の身柄を、こちらが確保しても良いか？」

孝則の提案は、護を驚かせた。

彼は一瞬、目を見開き、険しい表情を見せる。すると孝則は、咄嗟に言葉を続けた。

「もちろん、そいつの所為で榊が被害を受けているのは分かっている。しかし、ここ最近、犯人の所為で未成年の麻薬使用者や売人が急増しているんだ。明らかに、調子に乗り始めている」

それに、

「現象の大元である犯人が捕まっていないという事実が、奴らに要らぬ自身を与え始めている。逮捕者は増え続けているのにも関わらず、だ。だからこそ、犯人逮捕を報道し、捕まらない事は無いと思いき知らせなくてはならないんだ」

革命や反乱は、指導者無しでは起きない。

孝則はそれを実践しようとしているのだ。

幸い、こうして裏の頂点が味方に回っている時点で、犯人逮捕時のデメリットはほとんど無い。

一方、彼の提案を途中から笑みの表情で聞いてい護は、ふむ、と呟きながら人差し指を突き立てた。

「分かった。だったら、私からも要求だ。犯人の逮捕確認後で良い、貴様らが今期中に逮捕した榊家関係の者を釈放しろ」

「なっ！？ 待て、それはさすがに――」

「私は犯人を警察に盗られる代わりに、捕まった部下を回収してケジメをつけさせる。貴様らは麻薬に関係した逮捕者を多く釈放する代わりに、混乱を呼んだ犯人を逮捕出来る。両者共、名に僅かながらに傷がつき、汚名挽回をすぐに出来るといふ訳だ。悪くはあるまい？」

「ぐ……ああ、確かにそうだが。しかし、ケジメとはどういう事だい？」

「はは、当然の事だよ」

乾いた笑い声は、一瞬にして室内に静寂を生む。

そしてその静寂に、低音の声が響いた。

「私の指示外で、麻薬を扱った愚者達が、今貴様らに捕まっているのだ。だが、命令違反と主への辱めは、決して刑務所で償えるものではないだろう？ きちんと、大勢の前で償わなければ、示しがつかない。……最も、それ以上に、私の部下を巻き込むような麻薬の売り方をしている犯人には、怒りで一杯だがね……」

同時、健一の背に悪寒が走った。

ゾツとする、という言葉が似合う感覚。

孝則もそれと同じ感覚を受け、目の前に居る少年から視線を外せなくなる。

表情こそ、怒ってはいないものの、底知れぬ怒りは、空気を通してひしひしと二人に伝わってきていた。

それこそ、二人が今まで見て来た暴力団の組長よりも恐ろしいと感じる程。

ようは、見た目では無いのだ。

だからこそ、彼は頭首という立場にあるのだろう。

「……分かった。それで了承しよう。では、我々警察は、今日より一時的に榊家の指揮下に入るとするよ」

「そうして貰えると助かる。すまないな、昔から無理ばかり言って」

いいさ、と言いながら立ち上がる孝則の表情には、苦笑が漏れていた。

「君の両親にも、扱き使われたものだしな。既に慣れっこだ」

はははっ、と笑いながら背を向ける孝則に続いて、健一も立ち上がった。

その際、二人の男女を一瞥するが、彼らは孝則だけを見ているようだった。

だが不意に、孝則が首だけを護に向けて、問い掛ける。

「君の両親、というので思い出したが。君らは何故、？当主？では無く？頭首？と名乗っているんだ？ 君の両親に聞いたが、どうも教えてくれなくてな」

「何故だろうね、教えなかったのは。ちなみに、理由は簡単だ。私達は結局のところ、集団の首領でしかないのだ。先々代が調子に乗

り過ぎていてね、どうも穢れが付きまとして離れないのだよ。だから、名誉ある家のような？ 当主？ は、似つかないのだ。ようは、自覚の問題だね」

淡々と説明した護に、ありがとな、と礼を言った孝則は、笑みを浮かべていた。

その後、彼は前へと向き直し、二人は客間を後にした。

だが、後に残る男女は、まるで人形のように、暫くその場に居続けた。

Answer・15：祭りの前夜

自宅に帰ってから暫く経ち、いつの間にか日が暮れていた頃。

僕は自室のベッドに大の字で寝転がり、天井を見ていた。

もちろん、ただ見ていた訳じゃない。

帰宅時に父さんから聞いた事を、一通り脳内で纏めていたのだ。

……とは言っても、結局のところ上手く纏まりはせず、頭を抱えていた。

いくら情報が衝撃的だからと言っても、自分が情けない。

と、その時だ。

不意に、充電中の携帯が独特の音楽を鳴らしながら着信を知らせてきた。

生憎、床に置かれたそれを気怠そうに手を伸ばして拾い、側面のディスプレイを見る。

表示されている名前はピッチピチの新人部員こと、那珂川 美咲。それを見ると、そういえば部活中にアドレス交換したなあ、という事を思い出す。

などと思っている間にも着信音は鳴り続け、よくよく考えれば美咲を待たせているという事に気付いた。

故に、すぐ携帯を開いて、通話ボタンを押し、上部を耳に押し当てる。

『あ、やっと繋がりました。出てくれないかと思いましたよあ。

つと、こんばんわです!』

「ん、こんばんわ」

受信口から聞こえる声は、今日の部活時に聞いていた声と同じものであり、しかし何故か懐かしいという感じがした。

ただ、後ろが五月蠅い。

正確に言えば、彼女の周囲の雑音が五月蠅い。
色々な音楽や声が混ざり合った、耳障りな音。

いや、実際その場に居る時は気にならない音だが、電話越しだと
気になって仕方ない。

それらが聞こえる場所と言ったら、かなり限られるだろう。
若者達が、良く遊びに行く場所だ。

「君の周囲が少し五月蠅いようだけど、もしかしてゲームセンター
に居るの？」

「いえいえ、違いますよ。正解はカラオケです！ 残念はずれっ、
また来週」

「うん、また来週」

「つとお！ 危うく切りそうになっちゃいましたよっ！ てかそう
じゃなくてですね！ 明日は空いていますか！？」

てつきり話はもう終わったのかと思って、電源ボタンを押しそう
になった親指を止め、慌てた声の問いに耳を傾ける。

どうやら、明日に予定が入っているかどうかを聞いているらしい。
明日といえば、ゴールデンウィーク初日。

と言っても、ゴールデンウィークの五日間、まるまる予定が入っ
てないので、確認をする必要が無かった。

「空いてるけど、どうしたの？」

『本当ですか！？ でしたらその、明日会いませんか？ 新入部員
歓迎会って事で』

新入部員の歓迎会かあ……。

思えば、自分に後輩と呼べる存在が出来たのは初めてな訳で、そ
のようなイベントの事など全く頭に無かった。

先輩として、恥ずべき事だなあ。

「わかった、良いよ。それじゃ、何時に何処で集合するの？ 集合
って言っても、二人だけだけだね」

「んとですね……それじゃ、渋谷駅にてお昼に落ち合いましょう。
昼食は現地で取るって事で！」

「休日に渋谷つても、かなり度胸があるね？ しかも連休に。ま、
いつか」

『あ、そういえば混みますね、休日は！ ん……十一時？』

いや、時間の問題じゃないんだけどね。つと、そんな事を言おう
とした口を紡ぎ、考える。

ある意味、十一時は妥当なのかもしれない。

「……そうだね。それじゃ、十一時に渋谷駅で落ち合おうか。その
時間に、僕から連絡を入れるよ」

『お、ありがとうございます。では、明日の十一時に会いま
しょう！ ふえーどあうとっ！』

威勢の良い声と共に、通話は切れた。

同時に、ツーツーっという、通話終了の音が聞こえる。

……で、何をするんだろう？

そういえば、どんな事をするのかを聞き忘れていた事に気付き、
もう一度、コールしようと着信履歴を表示した。

が、そこで指を止める。

思えば、彼女はカラオケに居るんだった。

だとすると、女友達と一緒に居るのだろう。だったら、邪魔しち
やうな。

と言う訳で、僕は携帯を閉じ、床に戻す。

次いで天井を見上げ、脳内で明日の予定を復唱した。

そこで、ある事に気付く。

……鹿嶋先輩以外の知り合いと二人で外出するのは、初めてだなあ、と。

どれだけ僕はインドアなんだよっ、と自分に突っ込みを入れつつ、勢いをつけて身体を起こす。

「さて、コンビニでも行こうかな」

まるで自分に言い聞かせるかのように呟き、机の上にある財布をポケットに突っ込み、携帯も充電ケーブルから外して、同じようにポケットへと突っ込む。

そして、クローゼットの中から薄手のコートを取り出し、袖に腕を通す。

フード付きのこれは色が黒く、安易に闇に紛れる事が出来る代物だ。そんな機能、必要無いけどね。

ともあれ、小腹が空くと、少し離れた場所にあっても行きたくなるのがコンビニだ。

生憎、今日は親の帰りが遅い為、夕食がお預け状態なのである。

そんな事なら、事前に作っておくか、お金を置いて行って欲しいものだ。おかげで自腹……。

などと考えながら玄関へと向かい、ドアノブを捻って外へと出る。五月に入ったばかりだというのに、まだ肌寒い外を歩き、僕は駅前のコンビニへと向かった。

人が行き交うビル街の裏路地。

月光どころか、ビルの光さえもほとんど差し込まないその場所を、一人の少女が歩いていた。

一六〇センチ前後の背丈の彼女は、その身体を簡単に隠すように黒い薄手のコートを羽織り、セツトになっているフードを深く被って、俯きながら歩いていた。

どう見ても場違いな雰囲気ではあるが、まるで何度も来た事があるかのように、角を何度も曲がって行く。

そして、唐突に立ち止まった。

周囲を見渡す事無く、その場で停止した状態にいる。

まるで、誰かを待っているかのように。

すると、それに答えるかのように、彼女の前方の角から数人の少女が出て来た。

まだ幼さを残している彼らは、おそらく中学生だろう。つまり、未成年だ。

彼女は、彼らを見て口の端を吊り上げる。

「ようこそ、？コーギー？たち。無限の快楽を配る君達が、今宵も集まってくれた事に、僕、？羊飼いは心から感謝するよ」

羊飼いと名乗った少女の口からは感情の無い声が発せられ、彼女は両手を広げる。

まるで歓迎しているように。

「今宵も君達に、毛の無い可愛そうな？羊？達へプレゼントする、素敵な物を配るよ。——でも、その前に」

いつもとは違う言葉が発せられた事に、コーギーと呼ばれた少年少女達は疑問の表情を浮かべる。

それを見て、羊飼いは頷き、言葉を続ける。

「最近、僕の存在に気付き始めた奴が現れたんだ。狙い通りだよ。だから、僕は君達にお願いするよ？……もつと、派手に吠えてく

れ。散らばった毛の無い？羊？達を一点に誘い込むように。大丈夫、法が君達を守ってくれるさ」

その言葉は、彼らに決定的な安心を与えた。
実際、犯罪と知っていて薬物を売る事は重罪だが、彼らは結局の所、未成年なのだ。

数年前から、未成年の犯罪に対する罰が軽くなったのを、彼女は上手く活用して、コーギー達に売人をやらせている。

しかし、どれだけ軽くなるうとも、罪は罪。

彼女はそれを承知している上で、彼らを利用しているのだ。
便利な飼い犬として。

「さあ、明日からゴールデンウィークだ。黄金の五連休を、最高の五連休にしてね？」

刹那、押し殺した声で返事が返ってくる。

はい、という声が、いくつも重なって羊飼いに届く。

それを聞いた彼女は、心底嬉しそうな笑みを浮かべ、横に最初から置かれていたダンボールを開け、中の物を皆に配り始めた。

小さめのウエストポーチ。

その中には、多くの麻薬とお金が詰まっている。

麻薬は羊の餌に。お金はコーギーの餌に。

彼らはそれを貰った者から順に大事そうに抱え、その場を去って行く。

その途中、不意に羊飼いは呟く。

「……さて、榊 護はどう手を打ってくるかな？ 凄く、ワクワクするよ……！」

言い終えるのと同じ時、彼女は笑った。

腹の底から笑いが込み上がり続け、声が路地裏に響き渡る。

だが、誰も止めず、気に留める者もおらず、ただただ彼女は笑い続けていた。

Answer・16：いつも変な奴は、休日とか関係無く変な奴

まだ太陽が顔を出しておらず、静まり返っている深夜三時。

車通りも無く、光がほとんどない住宅街の一角に、春原家がある。周囲の家となんら変わらない形をした一軒家であるその二階。

窓から月光が差し込む部屋で、姫香は眠っていた。

窓際の壁に寄せられているベッドに眠る彼女は、月光が顔に当たっているのが気にならない程、深く眠っている。

だから、不意に影がかかろうとも、気付きはしなかった。

窓の向こう側、屋根の上には人影が一つ。

逆光によって顔がわからないその者は、周囲を見渡してポケットの中から大きい棒状の物を取り出し、窓の鍵がある部分に押し当てた。

次いで、箸が割れるかのように中心から開いたそれはコンパスに似ており、中心となる針とは逆の部分で半円を描くようにしてガラスに傷をつける。

すると、半円をなぞるかにようにその部分は自動で戻っていき、同時に赤い光がガラスを焼き切っていった。

そして、半月の形をしたガラスが外側に綺麗に落ちる。

最後に、ガラスの抜けた窓に手を入れ、鍵を開けて窓を開くだけだ。

こうして、侵入術は成功する。

刹那、晴れて不法侵入者となった者は、ベッドで眠る姫香に飛びついた。

「——っ!？」

きゃあ、という悲鳴が一瞬間こえ、しかし口を押さえつけられた彼女の声は止まる。

「しーっ。騒いではいけないぞ、姫。私だ私、眠り姫の下に颯爽と登場する、君の王子様だ」

言うその者の顔は、すでにはつきりと見えており、彼がスーツ姿の紳 護である事が分かった。

それに気付いた姫香は、暫く彼を見据え、拳を打ち込んだ。怒りの籠ったそれは護の鳩尾に直撃し、呻き声を上げる。

「んな……何をするのだ、姫……」

「何をするのだ、じゃないわよ！ 今何時よってかどうやって入って来たの!？」

「姫は寝起きでも元気なのだな。今は三時を少し過ぎた頃で、私は窓から入って来た」

そう言いながら、彼は窓を指す。

そこには一部に穴が空いた窓があり、開いた所からは深夜の肌寒い風が吹き込んでくる。

護はその開いた窓をゆっくりと閉めるが、穴から風が吹き込んできた。

窓際の状況は変わらず、寒いままだ。

「な・ん・で、窓に穴が空いているのよ」

「仕方なかったのだよ、ここに入るにはね。そんな事より、早速出掛けようじゃないか」

そんな事、と言ったところで言葉を止めた姫香は、眉に皺を寄せ、小首を傾げた。

「出掛けるって、どこに？」

問いに、護は当然だと言わんばかりの、笑みを浮かべた。

「明朝のドライブだよ。さ、私は屋根で待っているから、着替えたまえ。まあ、ご両親には後で連絡を入れておく故、急ぐ必要は無いがね」

言いながら、彼は窓を開けると宣言通り屋根で待機を始めた。

もちろん、背を向けており、その姿は姫香が着替えを終えるまで、いつまでも待ち続けるかのようだった。

彼女は、その後ろ姿を見て溜息をつく。

なんなのよ一体、と悪態をつき、クローゼットを開けて服を取り出した。

東京都首都高速、埼玉方面のパーキングエリアにて。

早朝だからか、休憩中の大型トラックが駐車場に数台止められているが、それ以外の車はほとんど無い。

だが、その中に目立っている車が一台ある。

黒のディアブロだ。

現在、車内に人は乗っておらず、無人である。

その持ち主である護は現在、姫香と共にパーキングエリア内の食堂に足を運んでいた。

このパーキングエリアに立ち寄ったのは、姫香の要望だからである。

朝食をまだ口にしていなかった彼女は護に頼み、彼は快く了承した。

そして、護が支払いをするという名目の下、店内の隅にあるボックス席に座り、食券を買いに行った彼を待っていた。

数分後、食べ物のかさめたお盆を両手で持つ護が、姫香の向かいに座った。

お待たせした、と言って姫香の前に置かれた物は、オムライス。

一瞬の間を空け、オムライスを凝視していた姫香の目が、護に向けられる。

「……何？　これ」

「何とは、姫こそ何を言ってるのだね。これはれっきとしたオムライスだよ？」

「それくらい分かるわよ！　私が言いたいのは、なんでオムライスなのか、ってところよ。私は和風定食を頼んだ筈だけど」

言うところ、護は顎に手を当てて、小首を傾げた。

しかし、無表情であるところを見ると、動作は関係無いようだ。

「しまった、間違えてしまったかもしれない」

「どこをどう間違えたら、和と洋が逆になるのよ……」

「いや待て。和風は別に和という訳ではないだろう。風味と同じように、飽くまで和？　風？　だ。つまりこれは和風オムライスなのだ」

「はいはい、変な屁理屈はそこまでね。とにかく、私はお腹が空いてるから、もうオムライスでも良いわ」

さすが切り換えの早い女性だ、と嬉しそうに呟く護は姫香をジッと見つめた。

対する姫香は、そんな事もお構い無しに、スプーンでオムライスの一部を掬い、口へとはこ「ちなみに、和風を極めるために山葵わさびが入っているぞ」吹いた。

突然の辛味と咽返る喉に、彼女は思い切り水を流し込む。

そして、涙目で護を睨み付け、布巾を顔目掛けて投げる。
するとそれは、彼の顔面に命中し、ピチャリという水分多めな音を立てる。

護はその布巾を冷静に取り、綺麗に畳んでテーブルに置き直した。

「駄目ではないか、布巾を投げ——」

「うつさい！ 次、ふざけた事をしたら、そこにある予備のスプーンを二本ともアンタの目に突き刺すわよ！？ ——って、スプーンを目に当てて、今度は何やってるのよ？」

「ウルトラマン」

眉間に、フォークが突き刺さった。

「うぐおおお！ 眉間に姫の、愛の一撃があああ！！」

「うるさい、黙れ！ 死ね、この馬鹿！！」

「で。何よ、さっきのウルトラマンって」

「ああ、あれは圭吾の持ちネタだ。一度、とある人物に殺されかけたのでもう禁止になったのだが、姫を笑わせて落ち着かせる事が出来ると思ったのだ」

「その圭吾って人が誰かは聞かないけど、完全に的外れなネタよ！
ってか、結果的にアンタも殺されかけてるじゃない」

「うむ、完全に選抜ミスだ」

言いながら、眉間に出来た傷に薬を塗る護は、ふうっと軽い溜息をつく。

そして、また姫香を見つめ、口を開いた。

「すまないが姫、あーんでオムライスを食べさせてくれないか？」

「死にたい？」

「またの機会にしよう」

一息。

そうして、姫香が食事を終えるまで、ジッと眺めている事にした。だが途中、彼女はふと疑問に思う。

……護の分の朝食が、無い？

「ねえ……アンタは何も食べないの？」

「ん？ 私は姫が美味しそうに食べている様を目に焼き付けるだけで、お腹一杯なのだが」

「またそうやって、変な事を言う。それとも、既に何か食べてきたの？」

指を差すように、スプーンで護を指す姫香に、彼は肩を竦める。

「いや、本当に何も要らないのだ。実のところ、私は過度な少食体質でね。一日に取るべき食事の量も、一般男子よりも遥かに少ないのだ」

彼の口から出た答えに、姫香は驚きの表情を見せる。

その表情のまま、スプーンでオムライスの一部を口に運ぶ。

咀嚼し、口内の物を喉に通したところで、質問の言葉を放つ。

「それって、何？ 生まれつきの体質って事？」

「いや、そういう物では無いが……まあ、いつかは話す時がくるだろう」

だが、簡単に言えば、

「人間は鍛え方、生活の仕方によって、その身体を多様な物へと変える事が出来るという事だ」

返って来た答えに、姫香は小首を傾げる。

しかしすぐに、いつか教えてくれると信用し、オムライスの最後の一口を咀嚼した。

次いで、コップ一杯分の水を一気に飲み干し、お盆を持って立ち上がる。

すると、それに合わせて護が立ち上がり、彼女の前を歩き出した。その時、不意に姫香が声を発した。

「最後にもう一つ！ アンタ、昼食は食べてるわよね？」

問いに、護は首だけで振り向き、微笑を漏らした。

「一日の半分の時間だ。パン一つくらいは、口にしているのだよ。別に、何も食べられない訳では無いからね」

答え、そして前へと向き直す護に、姫香はもう問い掛けようはしなかった。

Answer・17：異様な墓参り

朝の陽気が辺りを照らし始め、動物達が動き出す頃。

小鳥の鳴き声が、姫香の耳へと響いた。

それを聴く彼女は、ふとある話を思い出す。

鳥が朝に鳴くのは、何も見えない夜の間に外敵に遭遇せず、無事に朝を迎えられた事を喜んでいるからなのだと。

そんな幻想的なことを考えながら辺りを見渡せば、墓石だらけで現実的だった。

彼女達が居るのは、埼玉県所沢市にある、とある霊園。

そこに、姫香は連れて来られた理由を全く知らない状態で、前を行く護に連なって歩いていった。

同時に、まだ五月だというのに向日葵を持っていく彼に、疑問を感じていた。

そうして、暫く歩くと、周囲の墓石から隔離された三つの墓石に辿り着いた。

左から順に高柳、霧島、榊と名の彫られたそれを見て、彼女ははっとする。

右の墓石は、護の家のお墓なのだと。

だが、その三つの内、花が供えられているのは真ん中の霧島家だけだ。

つまり、霧島家の誰かが命日なのだろう。

その墓石には、数多くの種類の花が供えられており、その中でも向日葵が一番多かった。

「霧島家は、毎年花が多いね。他の両家もあるべき時は多いが、うむ、霧島家には敵わない」

笑いながら言う護は、手に持った向日葵の花束を他の花に混ぜて

供え、静かに両手を合わせた。

姫香も咄嗟に彼と同じ動作をし、ぎこちない動きで頭を下げる。数刻経ち、頭を上げ、向日葵を見る。

そこでようやく、護に問い掛けた。

「ねえ、どうして向日葵なの？」

「簡単だよ。最も人望があり、愛された霧島家の前頭首夫妻が好きだった花が、向日葵だったという事だ」

だから、この時期に日本ではなかなか手に入らない向日葵を手間かけて入手し、供える者が居るのだよ、とそう、彼は言う。

それを聞きながら、姫香は再度、向日葵を見た。

真っ直ぐ背を伸ばした向日葵は、まるで彼女を見ているかのようにだった。

と、その時だ。

不意に後ろから、護の名を呼ぶ男の声が聞こえた。

誰かと思い振り向けば、長身の男が二人の居る方へと歩いて来ていた。

「ここにおったんやな、護。朝早くからご苦労さん」

ヘラヘラと笑いながら、親しげに話し掛ける彼は、次の瞬間、護の肩を力強く掴んだ。

もう表情に、笑みは無い。

「昨夜から今朝にかけて、ジャンキーが一気に増えよった。原因は、高濃度の薬物使用。既に病院送りになつとる奴も、少のうない」

それだけやないぞ、と言って彼は話を続ける。

「数時間前、ジャンキーの集団が、遠坂組の事務所とおさかに奇襲かけて、潰していきよった。運の悪い事に、ゴールデンウィーク中に犯人を狩り出そうと計画立てて、組員が集合しとる時にや。その所為で、遠坂組はぼろぼろ。他にも――」

「そこまでだ。状況はもつと聞きたいが、今は姫の前だ。物騒な話は控えたい」

その言葉に、姫香は表情を変える。

どうしようもない怒りが、ふつふつと湧き上がり、護の言葉に食ってかかった。

「ちょっと待ちなさいよ！ 大事な話をしているんじゃないの？ それを、私が居るからなんて……それじゃあ私は、ただの足手纏いじゃない！」

「しかしだ、姫。この話は、聞かない方が良い話であつて――」

「つまりは邪魔者つて事？ だったら、私はここに居ても意味が無いわね。さようなら！」

怒りのこもった声を吐き捨てた姫香は、踵を返し、早足でその場を去ろうとした。

そんな彼女の後ろ姿を見据える護は眉を寄せ、考える。
だが、答えはすぐに出た。

「待て。分かった、姫がそこまで言うのなら、君が居る中でも話を続けよう」

しかし、と付け足し、彼は人差し指を立てた。

「一つ。この会話に、質問は一切不要だ。良いかな？」

たった一つだけの約束を提案する彼の目は、いつもと違って真剣で、鋭かった。

姫香はそれを見て、生唾を飲んで喉を鳴らしつつ、ゆっくりと頷く。

すると、彼女の返事を見た護は視線を長身の男に向け、微笑した。対し、長身の男は苦笑する。

「しゃーないな。わいとしては、話を進められる訳やから、なんも気にせんけど。ほな、話し戻そか」

「ああ、頼む。他の被害も聞いておきたい」

「ほいほい。さっき言い掛けた事からやけど、わいの下についてる若いもんも、車ごと襲撃食らったんや。——あ、若いもん言っても別にわいの年下って訳やあらへんからな？」

「え？ そ、そうなの、分かったわ」

突然、説明された姫香は、言葉を詰まらせつつも返事をする。

「そいつらは、重軽傷で病院送り。こんな感じのが、他に八件や。幸い、早朝やったから、わいらの事はマスコミに流れるのを阻止出来たんやけど……。病院送りになったジャンキーは、多すぎて情報は阻止できなんだ」

今頃、マスコミは大騒ぎやろうな、と苦笑混じりに言う。

一方で、話を聞いていた護は腕を組み、顎に手を当てたまま思考していた。

しばしの沈黙の後、ふと何か思いついたかのように手を顎から離した。

「襲撃を受けた者達の所属は？」

「確か……？ 田組、公義興業、藍本興業、辻興業や」

聞いたなり、護は舌打ちをし、苦虫を噛み潰したような顔をした。

「まさかとは思ったが、一つ残らず私の直下、もしくはその下の者だな。どちらにせよ、私と、榊家と関わりのある者達だ」

つまり、

「犯人は、もしかしたら私に朝鮮しているのかもしれない。自分を捕まえてみる、と。憶測だがな」

「なんでや？ そんな事して、相手はなんの利益があるんや。第一、——っと、どうやら、詳しい内容はどうであれ、憶測は当たりかもしれへんな」

言った風の視界には、多くの人影が映った。

彼より頭一つ分小さい体格の少年少女達は、中学生にも高校生にも見える。

皆、手には金属バッドやナイフなどの凶器を持っており、それを護達にチラつかせる。

そんな彼らを見据える護は、ネクタイを解いて姫香に渡した。

「すまないが、持っていてくれたまえ我が妻よ。——ん？ 何故、半目で私を見ているのだ？ そんなに私が眩しすぎるか？ ——までまで、ネクタイを引き千切ろうとするな、ネクタイを。……ともあれ、すぐに終わらせるさ」

片手でオールバックの髪を掻き上げ、スーツの張りを整える。そして、動いた。

Answer・18:それは主役のように、舞う

風が吹いた。

唐突に起こったそれは、しかし自然なものでは無く人為的なもの。護が、素早く前に出たからだ。

向かう先は、バッドを持った一人の少年。

素早く懷に潜り込んだ護は、少年のバッドを左手で奪い、腹部に左足を軸にした右足の蹴りをぶち込む。

すると、少年はくの字に曲がって吹き飛び、地面を転がった。

全員の視線が吹き飛んだ彼に集まり、一瞬の沈黙を生む。

この時、護は彼らを完全に敵と見なしていた。

理由は他でも無い、武器を持って彼の前に立ち塞がったからだ。

故に、彼は問答無用で蹴りをぶち込んだのだ。

ともあれ、その場に生まれていた沈黙が、少年少女達の掛け声で動きが再開される。

我先にと皆が武器を構え、一斉に護へと群がる。

だが、彼はそれを、迫り来るバールをバッドで防いで持ち主の顔を横から打撃し、振った勢いを利用して投擲。

またしても顔に直撃したバッドを気にする事無く、もう一回転して勢いをつけ、前へ。

次いで、右の膝を少女の腹部に打ち込み、すぐに足を振り上げてその隣に居た少女を蹴り飛ばす。

「わらわらと群がって……貴様らはまるで、ゾンビだな」

足を掛け、背負い投げで飛ばし、連続して蹴りつけ、頭に踵を落とし、地に捻じ伏せる。

まるで一人無双でもしているかのように、迫り来る少年少女達を蹴散らす。

彼に、傷一つ負わせる事も出来ずに。

「所詮は主役に潰されるだけのエキストラ。そんな奴らがどれだけ群がろうて——無駄だ」

言いながら、彼は蹴りの勢いを更に強める。

それはまるで台風のように。

中心で無傷のまま、舞い続けていた。

「なんで、あんなに動けるの？」

舞い続ける護を、遠方から見ていた姫香は、誰にでも無く疑問の言葉を呟いた。

それに答えるかのように、不意に風が腕を組み、口を開く。

「護は昔な、ライバルと見なしてる男と一緒に、とある武術の達人に弟子入りしとったんや」

「武術の達人？」

オウム返しに聞く姫香に、風は深く頷く。

「その時に習得したのが、如月流の対武装戦を想定した足技や。足を拳の代わりとし、あらゆる武器を回避しつつ重い一撃を与え、時には武器を奪って優位に使用する。……まあ、いわゆる主役戦法つてやつやな」

全部、護から聞いた事やけどな、と言葉を付け足し、微笑した。それを見た姫香は逆に苦笑し、そっかっと思ひて俯く。

……なんだかんだ言っても、私は護の事、何も知らないのね。思い、頭を思い切り振る。

まるで護の事を知りたいみたいじゃないの、と嘆き、深い溜息をついた。

と、丁度その時だ。

一人の悲鳴を最後に、正面からは音が消え、静寂が生まれる。戦いが終わったのだ。

いや、それは戦いと呼ぶには余りにも圧倒的で、主役に花を持たせる演劇のようなものだった。

まるでそれを表現するかのよう、汗一つ掻いていない護中心に、少年少女達は役目を果たした役者のように、周囲に倒れていた。

そんな彼らを、護は地面と同様の扱いで踏みながら、姫香の下へと向かい、手を差し出す。

対して、ネクタイ片手に啞然とする姫香は、思う。

……こういう時、どんな言葉をかければ良いのかしら。

強いわね？ いや違う。

貴方は化物？ 絶対違う。

何故、そこまで動ける？ これはもう知っている。

だったら、

「……お疲れ様、護」

笑みを作り、ネクタイを差し出す。

すると護は、ただ微笑するだけで、ネクタイを受け取った。

次いで、ネクタイを首に巻いて締めながら、尻に指示を出す。

「尻、こいつらの中から二人ほど連れて行け。犯人の特徴を吐かせ
る」

「それは名案やけど、中毒になった奴らに、記憶力を期待するんか

いな？」

「ふふ。人は、圧倒的な恐怖の前には、正直になるものだ。それはジャンキーとて、同じ事だろう？」

不適な笑みで答えた護に、相変わらず変な理屈や、と苦笑混じりで呟き、少年と少女を一人ずつ脇にもち抱える。

それを見て頷く護は、携帯を取り出して通話を始めた。

「私だ。先程指定した場所に、警察を向かわせて欲しい。——なに？ もう向かっているだと？ 気の早い事だ、迷惑な。だから貴様はいつまで経つても、長官止まりなのだ。——……冗談だ。では切るぞ」

さて、と言いながら携帯を仕舞う護は、姫香に手を差し出す。

暫し間が空き、そして言葉が生まれた。

「厄介事に巻き込んですまなかったな、姫。お詫びに、少し早いが自宅に送り届けよう」

「……何？ これから起きる何かに、付いていつちゃ駄目なの？」

問いに、護は返答に迷った。

しかし、口は自然と動く。

「すまないが、ここから先はまだ知るべきでは無いと、私はそう判断しているのですね。だが、いつかは知る時が来るのだから、今は我慢してほしい」

その言葉に、姫香は一瞬、顔を顰めた。

だが、その表情はすぐに崩れ、呆れ顔で溜息一つ。

次いで、差し出されたままの彼の手を、軽く数回叩いた。

「分かったわよ。その代わり、ちゃんと送り届けてよね?」

「当然だ。無事に送り届けなければ、ご両親に申し訳無いからな」
「よく言うわ。早朝に私を連れ出した時点で、アウトよ」

言って笑う姫香を見て、護も笑う。

そうして二人同時に笑いながら、駐車場へと向かった。

日は既に昇り、時刻は七時を回っていた。

Answer・19:ゴールデンウィーク・初日にて。

ゴールデンウィーク初日、午後十一時。

僕は、休日を満喫していた。

「先輩すごいです！ まさかハイスコアを出すだなんて！」

「昔から、レースゲームは得意だからね。でも君の、音ゲーだっけ？ その手捌きは結構凄かったよ」

「え、あれは他の人に比べたら、まだまだ下の方ですよ」

ハードモードでコンプリートしてるのが下の方ですか。

世の中、じゃなくて音ゲーって奥が深いんだなあ。

と、そんな事を思っただけで納得している僕は、若者の街の一角にあるゲームセンターに来ていた。

色々なゲームの音が入り混じってオリジナルの曲（というか雑音）が流れるここは、若者ばかりで混んでいる。

さすが休日と言ったところか。

ちなみに、僕の隣りに居るのは、何故か満面の笑みの後輩、那珂

川 美咲だ。

僕と一緒に居て楽しいという事なのだろうか？

まあ、そんな事はさておいて、美咲が両手をクレーンゲームのガラスにべったり押し付けている姿を苦笑で見据える。

彼女が見つけているのは、山積みになった猫の小さいぬいぐるみのキーホルダーだ。

他の景品に比べると、比較的簡単に取りやすいタイプ。

もしかして、欲しいのだろうか？

「なんなら、取ってあげようか？」

「うえ！？ ほ、本当ですか！ で、でしたら百円、百円渡します

百円、ほら百円！」

「落ち着いて落ち着いて。それにこれは一プレイ二百円だよ」

「あ、あれあれ？ すみません、ではもうひゃ——」

「はい、僕の奢りね」

言いながらポケットから百円を取り出し、美咲から貰った百円と一緒にクレイゲームへと投入する。

申し訳ないです、などの言葉を言っている彼女を尻目に、音楽を鳴らして起動したその操作を行う。

そして、クレイが景品を掬い上げ、転がり落とした結果、取れた景品は三つだった。

まあ、こんなところだろうか。

落ちた景品を手に取り、歓声を上げている美咲に手渡す。

「ありがとうございます、先輩！」

「あ、うん。どういたしまして」

そんな、ストレートに感謝されると、頬がこそばゆくなる。

けれど、頬を搔いている間に、美咲は次のゲームへと向かった。

本当、元気なもんだ。

そう内心で感想を述べつつ、彼女の後を追って駆け足になる。

……そういえば、こうやって誰かと一緒に遊んだのはいつ以来だっけ？

確か、去年の夏休みに鹿嶋先輩が「社会見学だ、ついてこい」と言って都会に出て遊んで以来、か。

思えば、それ以来まともに誰かと遊んだ事が無かったなあ。部室にこもってたし。

別に友達が居ないって訳じゃないけど、誰かと遊ぶという事が新鮮に思えていた。

だからだろうか、今はすごく、楽しい。

あれからあつという間に二時間が経ち、今は午後一時。

腹の調子は良い感じに昼時となっており、美咲と話し合って昼食はファーストフードを取る事になった。

地域によって通り名が変わるという性質を持つ、世界規模のファーストフード店に足を踏み入れると、中は幅広い年齢層の客でいっぱいいっぱいだった。

特に子供連れの家族が多い、というか五月蠅い。

これが五日間も続くのだと思うと、素直に店員を哀れんでしまう。そんな事を考えながら列に並び、待つ事数十分。

やっと注文した商品を受け取り、階段を使って二階へと上がった。どこか空いていないかなと思いつ「お？ 誰かと思えば伊藤じゃねえか」

変なのが居た。

認めたくは無いけど、僕を呼んだ人物を目で捉え、そいつがバカップルである事を改めて知る。

嫌な所で出会っちゃったものである。

「瑞稀^{みずき}、あいつらを向かいに座らせても良いか？ —— ありがとう。な。おーい、伊藤！ こっち来て座れよー」

大声出さなくっても聞こえるって。

と、その前に美咲の方を見ると、丁度目が合って微笑を見せた。別に良いですよ、と言っているのだろうか。

だったら、その好意に甘えるしかないよね。

なんて考えを纏めて、バカップルの向かいに座った。

近くで顔を合わせた時の第一声は、よっ！ と大声。五月蠅い。

「まっさか、こんなところで会う事になるとはな！　もしかして、調査の手伝いでもしに来たのか？」

なんでこいつは、いつもポジティブな事しか言わな——あれ？

「え？　調査って、何の？」

「おいおい惚けんなよ。あれだよ女子生徒行方不明事件だよ」

ああ、あれか。

……まだやってたのか、バカカップルは。

「君も懲りない男だね……で、その調査とやらで何か掴めたの？」

「……実はな、耳寄り情報を手に入れたんだよ」

そう言っつて、バカカップルは人差し指を立ててニヤリと微笑する。
気持ち悪い。

同時に、何かとんでもない情報を手に入れてしまったんじゃないかと、不安に思う。

別にバカカップルを心配しているんじゃない。

これを聞いた僕と美咲にも、悪影響があるのでは無いかと心配しているのだ。決してツンデレじゃない。

そんな心配を他所に、バカカップルは話を始める。

「今日の朝、多数のニュースで麻薬中毒者がどうのこうのって言うてたろ？」

思い出せば、そんな事を言っていた気がする。

今朝、何の前触れも無く救急車が都内を走り回り出し、多くの患者を病院に運んだのだという。

そしてそのほとんどが、未成年の麻薬中毒者だったそうさ。

「その事件にな、榊組っていうヤクザが関わってるらしいんだ」

思わず、え？ という言葉が口から漏れた。

榊組が関わっているから、という訳じゃない。

なんで、裏のトップとされる組の情報を、ただの一般人でしかないバカッブルが知っているのだ、という事に驚いた。

「何が、どう関わってるって情報なの？ それは」

「ん、いやなんだ。……ここだけの話だから小声になるかな？ なんでも、前々から榊組の部下達がその麻薬事件に巻き込まれて、誤逮捕やらされてたらしいんだがな。ここ最近で、暴行などの被害も出てるらしい」

それがな、

「それが、榊組に対する挑戦者による行為じゃないか、と言われてるらしいんだ。そして、その挑戦者ってのが、羊飼って名乗ってるそうさ」

どこで、そんな情報を手に入れたのだろうか。

いや、今はもうそんな事を言っている場合じゃない。

どう考えても、それはトップシークレット。

そんな情報を、いくら小声であろうとも公共のファーストフード店で話している時点で、かなり危険だというのに。

僕は興味津々に、その話を聞いていた。

「んで、今朝。とうとう大掛かりな襲撃があったそうさ。だけど、相手が相手なだけに、戦争にもなりやしない。まるでゲリラだよ、相手は」

「……そんな機密そうな話を、こんな所でも大丈夫なの？」

問いに、バカップルは鼻で笑う。

「大丈夫さ。まさか、ファーストフード店の、しかも俺達の近くに、ヤクザ関係者が都合良く居るわけないだろう？」

自信満々に、親指を突き立てて言うバカップルを見たら、信じざるを得なかった。

もつとも、僕だって聞かれているなんて思っていない。思いたくない。

ただ、少しだけ、不安だった。

そんな不安を胸に抱きつつ、食事を続ける事にした。

この後はバカップルの馬鹿話で盛り上がり、いつしか不安は吹き飛んでいた。

結局、店を出たのは一時間後となってしまった。

とりあえず、僕はバカップルと別れて、美咲と次の目的地へと歩き出した。

次は、親戚の喫茶店にでも行こうかな。

Answer・20：榊家傘下、緊急集会

四十畳程ある和室には、緊迫した空気が流れていた。

その場には、着物を纏った初老やスーツを着た中年など、様々な外見をした男達が、しかめっ面で座っていた。

彼らはそれぞれが組長クラスであり、今は緊急集会が行われるという事で、一同に集まっていた。

皆、壁を背にして向かい合い、互いに均等な間隔を空けている。

上から見下ろせば、コの字型となる座り方だ。

そして、彼らをもっとも見渡せる位置。

端の中央に座るスーツ姿の少年は、瞑っていた目をそっと開けた。

「……では、先程話した内容を理解して頂いた事を前提に、一つの言葉を放とう」

先程。それは、今から数分前に遡る。

この和室に各組長が集った頃。

少年――護は、自身に襲撃があった事を告げた。

またその後、榊家宛てに小包が届いた事も。

縦横三十センチ程の小包は綺麗な用紙で包装されており、その中身は一枚の手紙と数十人分の小指だった。

断面は荒々しく、しかし瞬間的に冷凍されたのか完全に固まっているそれらは、少しの揺れでもコロコロと音を立てる。

手紙には、君が倒した者達と、同じ人数分の指を詰めたよ、と書かれていた。

もちろん、人数分というのが嘘である事に、呼んだ護は気付いていたが。

しかし、それを知った男達は肝を冷やした。

何せ、数がどうであれ、その小指は本物だったのだから。

それによりざわめきが起こり、静まり返った頃、今に至る。そして、護はこう言い放った。

この中に裏切者が居る、と。

ギャング映画やドラマなどでは、古くから定番であろうその言葉を、彼らの頂点に立つ頭首は言った。

刹那、その場に居る全員の表情が、無となる。ただ一人を除いて。

「はっはっはっ！ 若、何を言い出すかと思えば、面白いジョークを言ってくれるなあ！」

大声を上げて笑うのは、無精髭を生やした巨漢の禿男だ。

着物の間から脚を出し、胡坐を掻いた膝を片手で思い切り叩き、腹の底から笑う。

静かな室内に、彼の笑い声を膝を叩く音だけが響き渡る。

だが、次の瞬間。

唐突に彼の笑い声が止み、護を睨み付けた。

まるで、最初から笑ってなどいなかったかのように。

実際、笑い声を上げていた時の彼の目は、全く笑っていないかった訳だが。

「もし、その言葉が口から出任せだったら、どうするんだあ？ ここに居る彼らは、若を信頼しているからこそ、ここに集った。その信頼を、下手したらぶち壊す事になるぞお？」

「そろそろ黙りませんか、藤堂。部下が麻薬取引先で捕まったような貴方が、偉そうな口を利いて良いと思っているのですか？」

言うのは、ビジネススーツ姿の男。

黒縁の眼鏡越しに藤堂を睨む彼は、正座の体勢を前に倒し、喧嘩腰である事を見せ付ける。

そんな彼に、藤堂は反論する。

「ありやあ、わしの管轄外だったからなあ。入ったばかりの新人が仕出かすとは思ってなかったわい」

「新人だから。それが言い訳になるとお思いですか？ 結局は、貴方の管理が行き届いていなかったただけでしょう」

「こりやあ、参ったなあ。だったら、八幡は全員の管理が出来てい
ると？ はっはっはっ、八幡様は凄いなあ！」

「貴方という人は……！」

現状は、今にも取っ組み合いでも始まりそうな勢いだった。
そんな状況を護は一言で沈静化される。

「……無駄な足掻きなど、する必要は無い。裏切者は誰か、既に分かっているのだから。もちろん、ここに居る皆もな」

言うのと同時、その場に居る全員の無表情で鋭い目が、一斉に一人の人物に向けられる。

視線が集中する先には、八幡が居た。

え？ は？ などと、間抜けな声を上げる彼は、呆けた顔で護を見る。

そんな彼に、護は小首を傾げる。

「おや？ 分からないかと思っていたのかね？ 犯人に対する麻薬の横流し。管理区周辺の組員を減少、及び組の活動情報提供。これらは、探ればドンドン出てきた情報だ」

そして、

「そして、それらの行為を行ったのは八幡組員であり、指示を出したのは組長、八幡やはたなりよし成義。貴様だと、臆病な部下から聞いたよ？」

同時、八幡の顔が青ざめる。

藤堂は、そんな彼を馬鹿にするかのように、大声を上げて笑った。

「そういうこつたあ、八幡。悪いが、この事件が解決したら、ムシヨから帰ってくる奴らと一緒に、ケジメを見せてくれや。はっはっはっ！」

笑いながら立ち上がり、八幡に近付いて行く。

そして、ゴツイ手で彼の腕をガツチリと掴み、首だけ動かして護を見る。

「若。こいつ、地下に入れとくかい？」

「是非とも、そうしてもらいたい」

言葉と共に、無気力な八幡は引き摺られ、部屋の外へと持っていかれた。

それと入れ替わりに、着物姿の桜が入ってくる。

彼女は真っ直ぐな足取りで護に近付き、耳打ちをした。

その場に居る全員が、その光景を食い入るように見ている。

それ程までに、内容が気になるのだ。

暫くして、護は一度頷き、立ち上がった。

「貴様ら、よく聞け！」

声を張り上げる。

「今し方、市内で中毒者を狩り出している者達の一人から連絡が入った。内容はこうだ。犯人についての情報を知る一般人が居たと！」

力強い声を全員にぶつける。

「しかもそいつは、私達が知らない情報さえも知っていたと！
…もしそれが、間違った情報であつたとしても、私達は必要としなければならぬ。そうだな！？」

問いに、全員が声を揃えて返事をする。
おう！ と。

「情報を知っているのは一般人だ。だが、それがどうした！？ 私達は、犯人に多くの犠牲を出された。それらは皆、大事な部下だ。組員という名の家族だ！ だから、その者には悪いが、少しくらい怖い目に遭つて貰つてでも、情報を絞り取れ！」

おう！

豪快な返事が、幾重にもなつて室内に響く。

「特徴を伝える！ 性別は男、見た目は高校生、ハリネズミのような髪は黒、女連れだ。渋谷区周辺をくまなく探して、捕まえてくるのだ！ どうした！？ 早く行け！！」

おう！ という返事を最後に、全員が一斉に部屋を出て行く。
たった一人を捕まえる為に。

そして、一連の犯人を捕まえる為に。

Answer・21：午後の喫茶レモネードティー

「同日、午後一時過ぎ。

渋谷区周辺を行く人々の数が急激に増加した。

その要因となっている者達は皆、目を鋭くぎらつかせ、血眼になつて何かを探していた。

ある者は人混みを掻き分け、ある者は人混みに紛れ、またある者は裏路地へと列を作つて入つて行く。

全は、一を求めて。

しかし、一は何も気付かない。

果たして、一部の者は、標的である二人組みの男女を発見した。そして、片方の肩へと、今にも捕獲せんとする手が伸びる。

バカップルと別れて数分歩いた頃。

疲れてないか、と美咲に問い掛けようとした時、それは突然来た。不意に右肩を掴まれ、同時に後方へと力強く引かれたのだ。

次いで、大声と共に肩越しに突き出た顔は、

「やつほー、あつきはちゃん！」

二口先生だった。

学校に居る時とは違い、耳ピアスや口紅を塗って派手になっている彼女は、僕と美咲の肩に腕を回して、絡み付いてくる。

なんともまあ、暑苦しい。

「奇遇だね、二口先生。まさか、さつきから尾行でもしてた？」

「まっさかー。私は可愛い生徒を尾行する程、暇してないわよおん。ただ、親友の喫茶店に行こうかなと浮かれていたなら、」

ぷにつ、という効果音を口で発し、僕の頬を突く。

「ちっちゃなあきはちゃんの後ろ姿が見えたって訳よ」

「ちっちゃくないよ!」

そこまで。

うん、そこまで小さくない!

そう思いながら、抗議の目を向けていると、二口先生は美咲の方へと対象を移した。

「ほんつとあきはちゃんは反抗的なところが可愛いのよ。ね? わかるでしょ?」

問われた美咲は、小首を傾げて苦笑い。

何と反応すれば良いのか、困っている感じだ。

ここは、先輩として助けるべきだろうか。

いや、助けるべきだ。

「ところで先生。喫茶店つてもしかして、レモネードが美味しい場所だったりしますか?」

「レモネード? ううん、レモネードが特別美味しいって場所じゃないわね。レモネードはこの喫茶店でも普通だと思っし……。ええ、多分違うわね」

「そっか。それじゃあ、すぐにお別れだね」

言って小さく手を振り、目的地へと向けて歩き続ける。けれども、いつまで経っても二口先生はついて来た。

どこまでも、どこまでも……。

そして、目的地である喫茶店に到着すると、二口先生が真っ先の中へと入って行った。

「結局同じかよっ!!」

今日一番のツツコミを叫んだ気がする。

中に入ると、ふわっとコーヒーの香りがし、落ち着くような気分になる。

店内に居るお客も、飲み物を飲みながら本を読んだりパソコン作業をしていたりと、落ち着いた静かな空間でそれぞれの作業をしている。

しかし、カウンターには迷惑なお客と店長が居た。

きやつきやつと笑い合っている二人は、まるで女子学生である。

良い歳して、二口先生は何をやっているのやら。

まあ、店長もなんだが。

ここの店長であり、僕の親戚である佐々木さんは、相変わらずのハイテンションで騒いでいた。

とりあえず、店長の下へと近寄って行く。

すると佐々木さんは、僕に気付いたのか笑顔で片手を大きく振った。

「よく来た親戚とその友達！ あ、この人は私の親友ねっ」
「親友でっす」

横に傾けたピースサインを目に当てて、何かのポーズをしている二口先生を無視し、佐々木さんに問い掛ける。

「先生が親友って事は、前に留守にしていた時は先生の所に行ってたの？」

「留守に？ んああ、そういえばバイトちゃんから君が来たって聞いてたね。その通り。ごめんね、せっかく来たのに」

「いやいや、別に謝らなくても良いよ。今日はただ、お客として来た訳だから」

前の用事はまた後日にでも、と付け加えておき、カウンター席へと腰掛けた。

美咲も、僕と同じように席に座る。

「はっは、ごめんね。ところで、そっちの子は？ 初めてお目にかりますよ？」

言いながら、佐々木さんは美咲を指差す。

「ああ、この子は僕の後輩で那珂川 美咲って言っただ。今日はちよつと、一緒に遊んでてここに立ち寄ったって訳」

「えと、よろしくです」

「ん、可愛い子だねえ。でも、ちつとだけ人見知りがあるのかな？ んまあとにかく、よろしくね親戚の後輩！」

ビシッと親指を突き立てる佐々木さんは、満面の笑みを美咲に向けた。

対し、美咲は苦笑を返す。

その時、佐々木さんはふと何かを思い出したのか拍手を打ち、カウンターのしたへとしゃがみ込んだ。

何かと思い覗き込もうと、顔を突き出して乗り出そうとした瞬間、彼女が飛び出して来て何かが鼻をかすめた。メニューだ。

あ、危なかった……。

「君ら、何か注文する？ いや、注文しなさい」

「それじゃ、僕はレモネードで。君は？」

「えっと、私は……カフェモ力で！」

「アイス？ ホット？」

追加で問われた美咲がアイスです、と答えると、佐々木さんは笑みで頷いて、後ろを向いた。

そこにはポットやコーヒーメーカー、コーヒー豆などが置かれており、彼女はそれを使って作業を始めた。

やがて、コーヒー豆の良い香りが周囲に漂い、心が落ち着くような感覚が起きる。

同時に、ついさっきまでの騒がしさが嘘のように、場を静けさが支配していた。

その支配の中心である佐々木さんが、動いても良いよと言うかのよう、僕らの前にレモネードやカフェオレの入ったカップを置き、一息ついた。

「お待ちせー。ご注文の品が完成しました。代金は親友持ちだから、出さなくても良いよっ」

「え、ちょ、何勝手な事言っちゃってんの!？」

抗議の声を上げる二口先生を無視し、佐々木さんはさてと、と前置きする。

「飲みながら良いんだけどね。今日一日、君らは何か変わった事を見たり聞いたりしなかった？」

予想だにしなかった言葉に疑問を持ちつつ、首を左右に振る。

だが、そうした後でバカップルが僕に伝えた情報を思い出したが、タイミングは外してしまったようだ。

続けざまに、彼女は僕に、いや僕らに問い掛ける。

「それじゃ、最近変な事が起きているってのは？」

「……女子生徒行方不明事件なら」

敢えて、これだけは言ってみた。

麻薬とかの件に関しては、伏せておく。

どうせ、この人は知っている事だろうし。

「そっか、それだけかぁ。それはもう終わってるよ。……いやなに、今日は物騒な人達がつい数十分前から、街中を動き回ってるって聞いてね？ 君らが来る少し前にも、三人組が来てね。私を情報屋だと勘違いして、色々聞いて来たんだよぉ」

人違いにも程があるってー、っと言っているけどあなた、その通りだろうに。

そう思う僕の心を知ってか知らずか、彼女の視線は少し鋭くなった。

「だから、折角のゴールデンウィークだけど、余り外を出歩かない方が良いよ？ 巻き込まれて大怪我しちゃ、連休がパーになっちゃう」

「外出しないで室内にこもっていても、連休の無駄使いだと思うけど？」

苦笑を含めて言うと、それもそっだねーっと言いながら、彼女は

無邪気に笑った。

その笑い声を火種に、二口先生を中心に他愛の無い話が始まり、暫くの間楽しんだ。

佐々木さんの言いたい事が少なからず分かって、故に少し気にしながら。

Answer・22：異常な異常事態（脳内混乱中）

「今日は本当に、ありがとうございましたあ！」

元気な声で礼を言う美咲は、勢い良く頭を下げた。

しかし、さすがに場所が駅前である為、なんとなく気恥ずかしい。時刻は午後四時を過ぎた頃。

美咲が、家族との予定があるからそろそろ帰らないといけない、という事らしいので、少し早めに解散する事になったのだ。

「また、暇があったら会う？ どうせ僕は暇だし」

「え、良いんですか！？ じゃあ、また連絡しますねっ」

そう言い残して、美咲は大きく手を振りながら、改札口へと走って行った。

不意に一人になると、名残惜しさが残ってしまう。

……さて、どうしようかな。

そう思った、その時だ。

ポケットに入っていた携帯がバイブによって震え、着信を僕に知らせた。

誰だろうか。

ディスプレイを見ると、そこにはバカカップル、と表示されていた。また、惚気話かなあ。

バカカップルが調査すると言っていた女子生徒行方不明事件についての報告であるという線は考えない。

とりあえず、通話ボタンを押して耳に当てる。

その時、聞こえたのは、

『あ、やっと出た！ 伊藤君、で合ってるよね……？』

女の子の声だった。

バカッブルの、女の子の方だ。

どこか、焦っているように感じる。

「そう、伊藤だよ。でも、どうして急に？ しかも慎平の携帯から」

『そ、そう！ 慎平君がね、慎平くんが……、しんぺいくんが！』

慎平の名が出た瞬間、焦りが増した。

何かあったのだろうか。

「落ち着いて、慎平に何が——」

『しんぺいくんが、死んじゃったあああああ！！』

わあああああああああああ……。

彼女の悲鳴が、携帯を通して僕の耳に響く。

泣き崩れた子供のようになり、同じ言葉を木霊させて。

……今、彼女は何を言ったのだろうか？

慎平が死んだ？

「い、今、どこに居るの！？ すぐにそっち向かうから、場所を教えてください！」

『うつ……ひぐつ……そう、こ……港の倉庫だよ……。表には、奥井興業第二十一倉庫って……書いてある……』

それを聞いた瞬間、僕は走った。

彼女にはすぐ向かうから、と告げて、携帯を仕舞う。

同時に片方の手でタクシーを停め、転がり込むようにして乗った。

目的地の地名を言い、すぐに発進してもらう。

到着するまでの間、馬鹿野郎と何度も呟き続けた。

それはもう、無意識に。

無我夢中に走り、第二十一倉庫を探す。

タクシーは港の手前で降りた。

さすがに、倉庫まで走ってもらうのは、気が引けたからだ。

もしかしたら慎平の冗談かもしれない、もしかしたら殺人者が隠れているかもしれない、もしかしたら運転手に通報されるかもしれない、もしかしたら……。

そんなもしかしたらを、ずっと呟いていた。

今の僕は、自分でもおかしいと思う程、取り乱していた。

暫く走ると、やっと第二十一倉庫を見つけた。

入口に立っている、少女——瑞稀も一緒に。

瑞稀は、僕が来た事に気付くと、暗い表情に僅かながら光が射した……気がした。

でも、その目は真っ赤に充血しており、目元も赤く腫れていた。それを見た瞬間、急に言葉が出なくなった。

なんて声を掛ければ良いんだろう。

「……君は、大丈夫だった？」

大丈夫な訳無いと言うのに。

僕は、冷静になれないと心底馬鹿だった。

当然、彼女は首を左右に振る。

「急に、ね。二人で歩いてたら。男の人に呼び止められたの。そして、話があるから来て欲しいって言われた瞬間。近くに黒いワゴンが停まってね。たくさんの人に無理矢理担ぎ込まれたの」

彼女は、一言一言をゆつくりと語る。

真っ赤になった双方の目に、涙を浮かべながら。

「倉庫に連れて来られた時。周りには怖い人しか居なかった。その人達のボスみたいな人が慎平君に色んな事を聞いていた」

「色んな、事？」

オウム返しに問うと、うんつと言って彼女は頷く。

「麻薬とか。犯人とか。そんなような事を言ってた。慎平君はそれに全部答えて。その後。口封じって事なのかナイフで切り刻み始めて……」

そこで、言葉は終わった。

彼女は涙を流し、顔を覆ってその場にしゃがみ込む。

叫びにも似た痼癢混じりの泣き声が、響き渡った。

僕は、そんな彼女に掛ける言葉が見つからず、無言で彼女の後ろにある倉庫の扉へと向かった。

大きな鉄扉の横にある、人一人が丁度通れる扉を開き、中へと入る。

その中は照明に光が灯っており、倉庫内の全てを照らしていた。

そして、入口から左手の壁際には、倒れている人の姿があつて。

それは、友達だった少年の肉体であつて。

血だらけで、とても生きていると言えない姿であつて。

馬鹿野郎と、らしくも無い言葉を無意識の内に呟いていた。

「だから、首を突っ込むなって言ったのに……。やっぱり馬鹿だよ、君は」

眩きながら、慎平だったそれに近寄る。

表情は、驚いているようだった。間抜け顔だった。

それを見た途端、吐き気が込み上げて来る。

死体には、見慣れているつもりだった。

父さんの仕事に興味本心でついて行った時は、死体に出会う事もあつたからだ。

でも、それは結局のところ、他人だ。

身近な者の死体とは、訳が違う。

故に、思わず吐いてしまった。

同時に、噎せて咳き込んでしまう。

さてどうしようかな。

「そういえば、こんな物を渡されました」

突然、背後から声がした。

その事に心臓が口から飛び出しそうになる程驚いたが、振り向けば瑞稀が居た。

こちらに差し出される手には、一枚のメモ用紙がある。

それを受け取り見ると、電話番号が書いてあつた。

080から始まる、十一桁の携帯番号だ。

「これを、誰に？」

「怖い人達のボスに。何か新しい情報が分かったら、ここに電話をしろって」

それを聞いた瞬間、一つの案が思いついた。

しかし、それは危険すぎる内容である。

……けど、知りたい事があるから。

思い、瑞稀を見れば、縋るような上目遣いを僕に向けていた。

「仇を、取ってくれる？ 慎平君の、仇を……」

仇。言葉を変えれば復讐。

それは、恋人を殺された者の心からの願い。
これに僕は、どう答えれば良いのだろうか。

……どうもこうもないよね。

僕は聞いてみたい。慎平を殺した理由を。

聞いたところでは何か変わる訳じゃないけど、それでも。

どこか、ここで起きた事におかしな点がある気がして、胸にシコリを残しながらも、僕はこの事に首を突っ込む事にした。

あの後、僕は佐々木さんの喫茶店に出向き、全ての事情を話して瑞稀を匿ってもらうようお願いした。

すると佐々木さんは快く了解してくれた。

本当、優しい人である。

そして今、僕は自宅に戻って来ている。

左手には携帯電話、右手にはメモ用紙を持って。

正直なところ、策はあってもどう切り出そうか迷う。

とりあえず、番号だけでも打ち込もうと思ったその時だ。

不意に携帯が着信音を鳴らし出した。

相手の名前は、鹿嶋先輩と映し出されている。

……どうしたんだろうか。

「もしもし」

『暢気だな、のんびりとしもしだなんて。私との約束はどうした、約束はっ』

「約束？」

その言葉を口の中で咀嚼していると、すぐに思い出した。

「ごめん、喫茶店の事だね。えと……多分、明日も居るだろうから、一人で行ってきてもらっても良いかな？」

「なっ……！ 私一人で行けと！？ 約束ではなかったのか？」

「ほんつとくにごめん！ ちょっと用事が出来ちゃって」

そう、大事な用事が。

まだアポは取って無いけど。

「明日にでも行って僕の紹介だって言えば、すぐに了承してくれるから、ね？」

「……………」

暫くの沈黙。

その後、数回溜息が聞こえた後、呆れた声が返って来た。

「分かった。だが、その用事とやらが終わったら、すぐに来るのだぞ！？」

どんだけ待つ気だよ。

その突っ込みが聞こえたのかいないのか分からないが、僕の返事を待たずに通話は切れた。

ツー、ツー、という音だけが聞こえる。

……さて。

今度こそ、掛けよう。

幸い、今の通話で少しは気が楽になった。

だから、僕はメモ用紙を見ながら番号を押し、通話ボタンを押す。

コール音が数回鳴り、相手が電話に出る音が聞こえ――。

Answer・23：誘いの通話

沈みつつある夕日が斜めに射す和室に、護は居た。

彼は目を瞑って正座の体勢をとっており、精神を落ち着かせている。

脳内で整理しているのは、先刻、慎平という名の少年から得た情報。

羊飼。コーギー。子羊。被害を受けた組の名。麻薬の名。ばら撒き方。

護達だけが知り得る情報だけで無く、彼らが知らない情報さえも持っていた事に、少年が犯人ではないかと一瞬思ってしまう程、伝えられた情報は完璧だった。

情報源は吐かなかったが。

しかし、犯人は女性だ、という中毒者達からの証言から、彼は慎平が犯人ではないと確信していた。

……中毒者に自白剤を使ってでも入手した証言だからな。

そう内心で呟きつつ、ふとある事を思い出す。

女子生徒行方不明事件。

その単語が、慎平の口から出た事。

彼は情報を教える代わりに、その事件の真相を教えてくださいって来たのだ。

当然、等価交換として真相を教える事にした。

行方不明になった原因を。本当は誘拐だという事を。

……思えば、桜の独断で起きた事だったな。一応、大まかな許可は与えたが。

報酬として、粗品を与えたのを覚えている。

当日、約束通りに粗品としてバスタオルを与えたら、三日間口を利いてくれなかった。女心は解せぬ。

「……………さて」

呟いたその時だ。

不意に、携帯の着信音がけたたましく鳴り響いた。

彼はそれを聞いて、姫香かと思いディスプレイを見るが、表示されているのは登録されていない数字だけだ。

少年か、と彼は思う。

話を終えた後、慎平には自分の携帯番号が書かれたメモ用紙を渡していたからだ。

基本的に、番号を教えた相手全員の名は登録してある為、現状で登録していないのは彼だけとなっている。

だから、護は通話ボタンを押し、耳に添えた。

『やつと出てくれたね。こんにちは、初めましてでいいかな？
羊飼いいだよ』

声は、女の声だった。

幼さが少しある、若い声。

だが、護が注目したのはそこでは無い。

彼女は言ったのだ。

「……………？羊飼いい？だと？」

『そう、僕は？羊飼いい？。君が知っている通りの存在だよ』

「ほう、自ら私に声を掛けて来るとは、思っても見ない事だ。称賛に値するよ、方法は問わずな」

突然の事態でも、彼は冷静だった。

それどころか、相手を褒めさえしている。

それが、彼らしさというものだ。

対し電話の向こうの？羊飼いい？は、笑っていた。

『ふふっ、余裕そうだね。どうやら、僕からの贈り物は君になんの影響も与えていないようだ』

「指の事か。あれくらいで、私が憤怒するとも思っていたか？心外だな」

『指……そう、指だ。典型的な手段だったからね、やっぱり無理だったかなあ』

「貴様の要件はなんだ」

相手の話など興味無い。

そう言わんばかりに話をぶった切り、単刀直入に問う。
すると相手は更に笑う。

何故、今更それを問うのかと言っているかのように、呆れ混じりに。

『要件はって言われても、一つしかないよ。復讐だ。そう、復讐なんだよ、僕のね』

復讐。

護はその言葉を口の中で咀嚼しながら、心当たりを探す。
とは言っても、彼の立場上、恨まれるのは日常茶飯事だ。

そんな中で、まだ解決していないのは、彼の中で候補が上がる。

また、その中で、最近耳にしたのは、慎平が言った女子高生行方不明事件。

事件の詳細が探られているという事は、慎平が誰かに頼まれたという事なのだろうか。

彼の中で、失敗したという言葉が生まれる。誰かに頼まれたのかと、聞いておくべきだったと。

その時、だからと相手が話を続ける言葉を聞く。

『だから、僕は全てを知りたいんだよ。君が仕出かした事の理由を全部。直接会って、ね』

最後の言葉に、護は驚いた。

相手が、直接会いたいと言っている。

それは逃げられる自信があるのか、それとも捕まらない余裕があるのか。

どちらにせよ、彼には思っても見ない好機だった。

だから、問う。

「場所と時間はどこだ？」

『話が早いね。じゃあ、言うよ？ 場所は奥井興業第二十一倉庫。時間は……正午って事で良いかな？』

「やけに中途半端な場所だな。理由は？」

『僕にとっては意味のある場所だから、かな？ それと、奥の方だから、騒ぎがあっても気付かれないと思うし』

第二十一倉庫が意味のある場所、と聞いて彼は一瞬、相手が慎平と共に居た少女ではないかと思う。

女であり、その場所を知っている者であり、尚且つ。

……犯人と特徴が似ていたからな。

もしかしたら、の線が強まった。

「良いだろう。では、明日だ」

『あつと、もちろん条件として、少人数で来る事。そうだなあ……乗用車二台分までって事で。後、倉庫に入れるのは君一人までだよ』
「分かった。では、会える事を楽しみにしているよ」

その言葉を最後とし、通話は切れた。

ふと、彼が壁掛けの時計を見ると、約束の時間まで後十八時間程

だった。

群れが動く。

奥井興業第二十一倉庫での出来事に立ち会った者達を中心に、一斉搜索を開始した。

彼らが選ばれた理由は、慎平と共に居た少女を見た者達だからである。

そして、彼らは少女を？羊飼い？と名付けた。

翌日、護は？羊飼い？との対面時に同行する者を招集した。

結果、彼の前には桜と凧、藤堂とその部下四人、合計七人が集まっていた。

彼らは黒塗りのベンツ二台に乗り込み、行動を開始する。

先頭車両に乗るのは、凧と部下三人。

後部車両は運転手である桜と助手席に部下一人、後部座席に護と藤堂だ。

時刻は九時。

約束の時刻より三時間も早く向かっているのは、犯人の予定通りに動くつもりは無いからだ。

少しでも相手の予定を狂わす。

その目的の下で、彼らに乗せた車は都内を走って行く。

Answer・24：予想内だけど予想外

とある路地裏に、少年少女達が集っていた。

彼らはそれぞれが武器となる物を持っており、その姿はまるでこれから争いを起こそうとしているかのようだ。

かなり、殺気立っている。

そんな彼らの前に、一人の少女が姿を現す。

瞬間、疎らだった皆の視線が彼女に向けられた。

フードを深くまで被った彼女は、その反応を喜ぶかのように、両手を広げて笑みを見せる。

「よく来てくれた、？コーギー？達。僕は嬉しいよ！これから君達に協力してもらう事は、今後の活動にとっても重要な事なんだ」

言う。手を大げさに広げ、演説を気取って。

まるで、独裁者のように。

「紳 護を潰す事。彼についてきた奴らを潰す事。これこそが、君達のやるべき事。出来るよね？ 特別な薬で、特別な存在となった君達に、もう怖いものなんて何も無いんだから！」

彼女が言う特別な薬とは、もちろん麻薬である。

しかもそれは、大麻などを調査して作った、痛覚を狂わす物だ。

それを彼女は、嘘で皆を騙し、飲ませた。

副作用や中毒作用は、全く告げずに。

そんな事なぞ知らぬ彼らは、それぞれが無言で頷き、士気を高める。

また、彼女がポケットから取り出してばら撒かれた袋によって、もっと士気は高まった。

中身はもちろん、麻薬である。

次いで、彼女の合図と共に、彼らは野に解き放たれた。家畜を管理する筈の？コーギー？は、血肉を求めて。

「なんでわしも行かなならんのかなあ。そりゃ、執事飼いには借りがあるけどなあ」

「藤堂様、執事飼いでは無く？羊飼いです」

運転中である為に、振り向く事無く桜はツツコミを入れる。

対し、藤堂は一本取られたわい、と訳の分からない事を言って笑いながら、自分の前となる助手席の背を数回蹴った。

部下は無表情で揺れる。

「貴様は武術をやっていたのだろう？　ならばもしもの事があつても、問題無いと思つてな」

「馬鹿言つなよあ、わしは柔道しかやつとらんわい。リンチ食らつたらおしまいじゃ。がっはっはっ！」

何が可笑しいのか、藤堂は大口を開けて笑う。

暫くして笑いが治まった頃、前を向いたまま護に問い掛ける。

「その、もしもの事つてのは、待ち伏せも有り得るって訳だろあ？　なのに何故、こつちは約束通りの数で向かうんだ？」

彼の意見は、最もなものだった。

だが、組長と頭首では、考え方が全く違う。

そう言っているかのような現状を、護は説明し出した。

「簡単だ。私は交わした約束を破るつもりは無いのだよ。それに、相手は待ち伏せしないなどという約束はしてきていない」

だからこそ、

「貴様や風達を同行させたのだ。できるだけ武術を使える者が必要だったのだからな」

腕を組み、一息。

言葉は続く。

「それにだ。私も、約束していない事もあるからな。偵察は出さない、とは約束していない。だから、事前に調べは入った。結果は、誰も待ち伏せて居ない、だそうだ」

今度こそ言葉を終え、満足気な表情をした。

その言葉に、返す気を無くした藤堂は、苦笑を漏らす。

それから暫く、彼らは無言のまま目的地へと向かう車に揺られ続けた。

数十分後、二台の車は奥井興業第二十一倉庫前にて停止した。

周囲に人影は無く、しかし警戒は解かない。

全員がほぼ同時に車を降り、藤堂は部下に指示を出し、倉庫の周りを囲むようにして散開した。

「貴様に選ばせておいてなんだが奴らを単独で行かせて大丈夫なのか？」

問いに微笑を浮かべる藤堂は、柄にも無く親指を突き立てた。

「あいつらには、柔道と空手を覚えさせてあるからなあ。大丈夫、チンピラには負けんわい」

自信満々に大笑いをした藤堂は、護の背を思い切り叩いた。さあ行け、と言いつ残し、彼も別の場所へと去って行く。その入れ替わりに、桜が護の傍らに立った。

「時刻は九時三十分。約束の時間まで二時間半ありますが、よろしかったのですか？」

「待つのは慣れている。それより、中には私からの合図があるまで入るな。そして、お前は凧と共に居るのだ」

そう告げ、護はまっすぐに倉庫の入口へと向かって行く。

大きな鉄扉の横、錆の無い真新しい扉を開けて中へ。

暗いと思っていた中は、水銀灯が作動しており、明るくなっていた。

見る限り、誰も居ない。

護はその事を確認した後、倉庫内の中央へと歩み寄った。

彼の立つ位置。そこは、尋問を行った場所。

いや、

「尋問、とまではいかなかったな。あの少年は、良い情報をすぐに喋ってくれた」

敢えて口に出して記憶を再確認し、言葉が続けようとしたその時だ。

不意に、奥の柱の陰から、黒いコートを羽織った者が現れたのだ。フードを深く被っている上に、上部を光で照らされている為に、顔が見えず性別が分からないその者は、ゆっくりと護の下へと歩み寄る。

「やあ、良く来てくれた。少し早いようだけど、気にしないから安心してね」

聞こえる声は、女の声。

それも、幼さが少しある若い声。

電話の声と、一致していた。

少なくとも、護はそう感じた。

「……まさか、私よりも先に居たとはな。何時からだ？」

「五月と言つても、やっぱり深夜は底冷えするね。それで毛布に包まっていたら、誰が来てたようだけど、もしかして君の手下？」

……見落としか。

隅々まで探せ、さもなくば減給だとも言っておけば良かったと、護は内心で後悔する。

まさか、毛布に包まれているとは、誰も思わないだろう。

だから、軽く見回っておけと言ったのだが、失敗だった。

だが、まあいい、と彼は呟き、向かって来る彼女と対峙する。

「約束通り、この榊 護が会いに来た。出来れば、要件は手身近に頼む」

刹那、彼女の歩みが止まった。

それは、彼が名乗った瞬間の出来事である。

彼女は、ふんやんやらへーなどと呟き、そしてフードを取った。そうして露になった顔を見て、護は我が目を疑う。

少女では無く、少年だったからだ。

目の前に居る榊が驚きの表情を隠せずにいた。

それもその筈だ、女の声だったのに、フードを取れば男だったのだから。

……慎平に便利だつて言われた、この声が役立ったなあ。

しみじみと思いながら、しかし僕も驚いていた。

理由は簡単、喧嘩を吹っ掛けた相手が、まさかの榊 護だったからだ。

相手はヤクザ関係だということまでは予想してたが、予想の斜め上をいって組織のトップである。

ともあれ。

「電話で言ったように、聞きたい事があったから呼んだんだ。だから、慎平に聞いた話を餌に来てもらった。まさか相手が、榊 護だとは思わなかったけど」

「私だと思わなかった、だと？ ……つまり、情報を餌にしたというのは本当なんだな。だが何故、指の事を知っていた？」

「え、あれは鎌かけしただけだよ？ 状況が状況だったから、引っ掛かっちゃったのかな？」

舌打ちが聞こえた。

「ともあれ、私の推理は外れだったか」

「どんな推理をしていたか興味は無いし、それより聞かなきゃいけない事がある。良い？」

問いに、榊は無言で平手を差し出して来た。

どうぞ、とでも言うかのような動作に、僕は頷いて言葉を続ける。

「どうして、慎平を殺したのかな？」

「……慎平？」

「そつだよ、慎平だ。君達が尋問した、バカップルの片割れだよ」

間が空く。

だが、それからすぐに、榊が肩を竦めて微笑した。
その表情は、完全に上から目線だ。

「あの少年か。残念ながら、私は殺してなどいないよ。もちろん、誰にも指示も出していない」

返って来た答えに、僕は耳を疑う。

榊どころか、誰も殺していない？

ふと、瑞稀の言葉を思い出す。

——口封じって事なのかナイフで切り刻み始めて——

そう、確かに彼女は言った。

言ったのだが……誰がやったんだ？

話の流れで言えば、やったのは榊だろう。

けれど、本人は違うと言っている。もちろん、誰にもやらせていないと。

目の前に居る人間は、組織のトップだ。

そんな人が、自分の地位を恐れて嘘をついているとは……悔しい
けど思えない。

表情が勝ち誇っているから。

けど、だとしたら、瑞稀の証言には穴が生まれる。

故に聞く。

「もし、君が言った言葉が本当なのなら、慎平を尋問した後、彼を
どうしたの？」

「尋問を終えた後、皆は撤収したよ。もう、少年には用が無いからな。しかし、有益な情報源が誰なのかは絶対に言わなかったから、メモを少年のポケットに入れた。考えが変わったり、何か情報が入ったらそこに電話しろ、と言ってな」

ああ、そうだ、と付け足して、言葉を続ける。

「私達の車を見られては困るからな。少年のロープはそのままに、隅で震えていた少女にナイフを渡したよ。私達が行ったら、彼の口を切ってここから去れと告げてな。そして、私達は鉄扉を閉じた」

ナイフを、瑞稀に渡した？

その証言は思いもしなかった。

でも、それじゃあ、

「それじゃあ、慎平を斬り殺したのは、いったい誰な――」

言葉が途切れる。

自分の中で、最悪の事実には袂が合ってしまったからだ。

瑞稀の証言には穴がある。

それは昨日、胸に残ったシコリが教えてくれた。

榊は慎平にメモを渡したと言っていたが、瑞稀は自分が受け取ったと言っていた。

でも、そうなる何で渡されたのが彼女なんだ？

もし彼女の証言が本当なら、情報源と繋がっているであろう慎平を殺した後、情報源と繋がりがあのか不明な人物に連絡先を教えた事になる。

その上、繋がっていたとしても、彼氏を殺されたというのに手を貸すだろうか？

殺された原因となった情報源を恨むよりも、殺した者達を恨むの

が普通だろう。いた、実際敵討ちを頼まれたのだけでも。

だが、榊は慎平を殺しておらず、メモは慎平に、ナイフは瑞稀に渡したと言っている。

ナイフは凶器。

慎平は惨殺。

そうになると、自然に出て来る犯人は……瑞稀？

「そうか、斬殺か。なら犯人は連れの少女だな。全く、死因をもつと早く言ってくれば良かったものを」

「ま、待つて待つて、動機が無いでしょ？ 恋人なんだしさ！」

「人の愛というものは、深まりすぎると憎しみや殺意に変わりやすくなってしまふものだよ。……決まりだな」

言つて、榊はスーツの胸ポケットに手を滑り込ませた。

その動作に一瞬、身構える。どうも出来ないけど。

けれど、取り出したのは携帯だった。

「身構える必要は無い。貴様を殺したところで、私に得は無いからな。……私だ。——ああ、会った。だが、どうやら別人だったようだ。だが、探す相手は間違っていなかったようだ。——そうだ、女だ」

頼んだぞ、と最後に告げて、携帯を仕舞った。

そして、僕を見据える。

さて、と前置きし、口を開いた。

「貴様はどうする？ 事実を聞いた訳だから、もう用は無いだろう。このまま帰るか？」

正直、なんて返せば良いか迷う。

確かに僕の用件は終わった。

でも、それによって知りたい事がまた生まれてしまった。

本当に瑞稀が殺したのか。もしそうなら、何故殺したのか。

と、そう思った時だ。

不意に、ガラスの破砕音が聞こえた。

それは一つだけでは無く、多数。

同時に聞こえるのは、雪崩のような足音と、響き渡る怒声だ。

振り向けば、何十人もの少年少女達が武器を持ち、走ってこちらに向かつて来ていた。

凄い、迫力だった。

半分開いた口が塞がらない。

瞬間、襟元を思い切り引っ張られ、鉄扉へと突き飛ばされる。

突然の事だった為に、尻餅をついてしまった。痛い。

誰かと思っただけで見れば、上着を脱いでワイシャツ姿になるとしている榊だった。

次いで、気付いた時には手元にネクタイと上着を投げ渡されていた。

「持っている。代わりに、こいつらを片付けてやろう。貸し借りは無しだ」

言いながら、榊は前へと出る。

武器を持たず、丸腰で。

そして、榊と集団は激突した。

まるで映画を見ている気分だった。

それも、スタント無しのハリウッドアクション物。

武器を持った集団相手を、主人公は傷一つ無く薙ぎ倒して行く。そんな光景が、目前で繰り広げられていた。

来る者を振り返りにし、狙った者を吹き飛ばし、武器を弾き飛ばし、迫る凶器を紙一重で避ける。

天井の水銀灯がスポットライトとなり、榊を照らし、光景の美しさを引き立てる。

そんな姿が、あの人と被る。鹿嶋先輩が惚れた人に。

その人もこんな感じだったのだろうか。

見る人を見惚れさせる程の。

などと思っている内に、事はあつという間に終わっていた。

呆気無いものである。

それだけ、榊が強いという訳だろうか。

一仕事終えた榊は、僕の下へと歩み寄って上着を取り、それを羽織った。

そして、再度携帯を取り出し、耳に当てた。

「私だ。今し方、襲撃が——そうか、そちらにもあったか。どうだった？——ふむ、良くやった。それで、何か情報はあったか？

——……ほづ。心当たりは無いが、考えておく。では、また」

言って、通話を切った。

何か情報があったんだろうか。

「……何か手に入れたの？」

問い掛けに、榊は一瞬驚いた表情を見せ、微笑した。

「なんだ、まだ居たのか。もう帰ったのかと思っていたよ」

「馬鹿にするな」

今のはムカツとしたぞ。

「ふむ、外に待たせている部下にも襲撃があったらしくてな。一人をひっ捕まえて尋問したところ、犯人は情報屋の下へと向かったそうだ。だが、どこの情報屋なのか分からなくてね。残念な事に、把握している情報屋に片っ端から連絡したらしいが、どれもハズレだったのだよ」

「情報屋、かあ……」

どこの、という事は、ほとんどの情報屋の場所は把握しているみたいだ。って、情報屋って、総計は多いのかな、少ないのかな。ともあれ、そんな榊でも割り出せない情報屋は……。

あ、

「佐々木さんかな」

「佐々木？」

僕の言葉を聞いて疑問の声を発した榊を無視し、携帯を取り出す。掛ける相手は、もちろん佐々木さん。以前、彼女は確かに言っていた。

三人組が佐々木さんを情報屋だと勘違いした、と。

勘違いで済んだのなら、まだ特定されていないという事だ。

そう推理した僕は、コール音が耳に響く間、願った。

出るな、出るな、と。

そんな願いも虚しく、誰かが出た。

もしもし、と軽い口調で言うのは、佐々木さん本人。

「もしもし、佐々木さん？ この電話に出たって事は、何かあったんだね？」

問うと、その通りだよつという答えが返って来た。

溜息が漏れる。

とりあえず、事情を色々聞き、任せておいてと告げて、通話を終える。

そして、櫛に向き直す。

「多分、犯人の居場所が分かったよ。とある喫茶店が襲撃されて、立て籠もりが起きているらしい」

「……そうか。今の電話は情報屋か。良いだろう、その情報を信じてやる。で、貴様はどうするのだ？」

「もちろん、ついて行くよ。途中までね。それでもし……もし犯人が僕の知り合いなら、僕の指示通りにしてもらって良いかな？」

言った瞬間、鋭い目つきで睨まれた。

背中に悪寒が走り、身体が縮み上がる。

そりゃ、一裏社会の頭に、見ず知らずの一般人が命令に従えって言ってるんだから、睨まれて当然だ。

けれど、それは最善の選択なんじゃないかと思う。

僕にとっての、だけどね。

「その状況に似合った事を最優先にする、それが最善ってやつでしょ？ だから君は、警察の指揮権を借りた。それと同じなんだよ、僕が指示を出すってのは」

「ほう、私を貴様と同じ下級に例えるか。良いご身分だな貴様」

笑う。

高笑いというやつだろうか、盛大に笑い声を上げた。

ただ、目が笑っていない。

心底笑ってもらった方が、どれ程気楽だろうか。

「もし貴様の知り合いだったとして、情が生まれて逃がすという可能性を考えない程、私は甘くないぞ」

「それは無いよ。一応、ここぞという時に冷酷になれる刑事の血は引いてるからね」

榊の表情が変わった。

目が、笑ったのだ。

「貴様の名前は？」

「伊藤 秋葉」

その一言で、十分だったようだ。

突然、歩き出して僕とすれ違い、鉄扉へと向かった榊は、振り向かずにはなげく。

来い、と。

その言葉に安堵の吐息を漏らし、後について行った。

A n s w e r ・ 2 6 : 到着したら事後だったが、大丈夫だ。問題ない

人通りが少しずつ増え始めた午前十時半頃。

平日とは違って、年齢性別関係無く人々が歩き回っている歩道を掻き分けて進む集団が居た。

風を先頭に、護や桜、そして数人の部下の列が、迷惑なぞお構い無しに進行していた。

彼らが向かうのは、秋葉に教えられたとある喫茶店だ。

狙うは立て籠もりをしている犯人。

そして、その喫茶店前に全員が到着した。

入口の扉には、？閉店中？と書かれたプレート。

だが、風はそれを無視して中へと突入する。

そうして全員の視界に映った光景は、異様なものだった。

五人程度の少年少女は床に倒れ伏せ、客は全員隅の席に固まっており、椅子や武器などが散乱している。

それらが周囲に四散している中央に長身の少女とカウンターの向こうに少女がナイフを持って店員を人質に取っており、事態が硬直状態だった。

また、二人の少女と店員の女性は、啞然とした表情で入口を見つめていた。

「……えと、なんだ？ 助けか？」

疑問の声を掛ける聴診の少女は、しかし護が居る事に気付いた瞬間、声を上げる。

「榊！ また、奇遇という形で会ったな！」

「それはこちらのセリフだ生徒会長。奇遇すぎるぞ、何故ここに居る」

「いや、私は所用があつてだな」

「貴様の所用なんぞ知らん。だが、何故このような状況になつてゐるのかは知りたいな」

相変わらず酷いやつちやなあ、と突っ込みを入れる風を無視し、護は同じ言葉で問う。

「何故、このような状況になつてゐる？」

「ああ、私が所用でここに来ていた時だ。突然、そこから倒れてゐる者達が入つて来てな。客に暴行を加えようとしたから、返り討ちにしたので」

そうしたら、

「そう、たまたま瑞稀、ナイフを持っている子な。彼女とここで会つたんだが、襲撃の後、気付いたら店員を人質に取つていたので」

不覚だつた、と鞘華は嘆く。

「まさか、彼女が主犯だつたとは思わなかつた」

「それが貴様の甘さという訳だ。……まあいい。では――」

言いながら、護がカウンターへと歩み寄る。

刹那、怒声が響いた。

「それ以上近付くな！ こっちには人質がいるんだからね！」

声を上げたのは、ナイフを持った少女、瑞稀。

彼女は今にも首を掻つ切りそうな程に、ナイフを近付けてゐる。だが、対する護は、小首を傾げて肩を竦めた。

見下した表情で、口を開く。

「人質？ 別に、そいつは私の知り合いでもなんでもないのだ。殺してもらっても構わんよ？」

「榊！ おま——」

「静かにしたまえ生徒会長。私はこいつに用があるのだ。一連の犯人である？ 羊飼いが誰なのか、慎平の殺害動機は何なのか。その全てを聞かせてもらおう」

腕を組み、早くも聞く体勢に入る護。

対し、驚いた表情を見せた瑞稀は、唐突に口の端を吊り上げ、笑みを作った。

「？ 羊飼いが誰かって？ もう、見つけてるじゃん。ここに居るよ。この、僕が、？ 羊飼いがなんだ」

「ふざけている場合ではないのだぞ？ ……だが、もしそれが本当だと言うのなら、証言をしてもらおう」

さあ、どうぞ？ と言って、片手を差し出す。

それに答えるように、瑞稀は口を開いた。

「証言なんて程の言葉は必要無いよ。ここで倒れている者や、病院に行った者、捕まった者に僕の事を聞けば分かるしね。でも一応、分かりやすい事といえば、僕が襲撃させた場所は？ 田組、遠坂組、公義興業、藍本興業、辻興業だったかな？」

「把握した。では、目的はなんだ」

予想外の即答に、瑞稀は一瞬呆気を取られた表情になったが、すぐに話を始める。

「数ヶ月前、女子生徒行方不明事件があった頃の事だよ。ある時、

僕の下に電話があつたんだ。相手は？フリースヴェルグ？って名乗った後、僕にこう持ち掛けて来た。指示通りに動いてくれれば、君の願いを叶えてあげようって」

「そんな言葉に惑わされて、お前は罪を犯したのか！？」

「そうだよ鹿嶋先輩？ そんな言葉に、僕は乗ったんだ。……それで、出された指示が――」

「麻薬をばら撒け、か」

護に先に言われた瑞稀は、ご名答だよ、と言って話を続ける。

「すると事態は思った以上に簡単に進んで、狙い通り榊家を巻き込む事が出来た。同時に、慎平君も」

「慎平を巻き込んだ？ …… ああ、そういう事か」

「榊家を巻き込んだ事によって、君達は微かな事にも敏感になった。だから、事件の情報を知って、尚且つ君の部下がしょっちゅう寄るファーストフード店で喋らせる事が出来る人物として、慎平君は適任だったんだ。コレ全部、提案者はフリースヴェルグだよ」

「それにより、私達の中で慎平の存在が露になり、拉致される結果を生める。で、拷問が終わって二人つきりになった時に、慎平を殺す。それで、私達に罪を被せたか」

過程はどうあれ、結果は完璧だった。

しかし、と言って護は目を細める。

視線の先の瑞稀は、小首を傾げた。

「そこにはイレギュラーが居ただろう？ 裏でこそこそ嗅ぎ回っていた奴が」

「イレギュラー？ もしかして、伊藤君？ 確かに、イレギュラーだったかもしれないね。でも、フリースヴェルグは簡単に彼を駒に変えたよ。そして、貴方と相對するところまで持ち込んだの。それ

は、貴方の注意を逸らす為。今はバレちゃったけど、結果的には成功だよ」

言つて、人質に取っている店員をカウンターに押し倒す。
ナイフを動脈に押し付け、笑みを護に向けて。

「フリースヴェルグの目的は、情報屋の居場所を、この人の存在を露にする事！ 私の目的は、慎平君を殺す事！ これで、私達の目的は達成された。思い残しは無いんだよ！」

「……残念ながら、貴様に思い残しは無くても、私にはあるのだよ」

無表情でそう告げる護は、前へと出た。

瑞稀や鞘華の制止も聞かず、瑞稀を捕まえんとし、ただただ前へ。

「馬鹿にしないでよ、榊 護！ 僕は、殺れるんだから！」

叫び、瑞稀がナイフを振り上げたその時だ。

彼女の背後、壁に設置された棚が、壁ごと横にスライドした。

そして、中から飛び出して来たのは、秋葉だった。

飛び出すタイミングは、多分完璧だ。

後は、僕次第。

目の前にはナイフを振り上げている瑞稀が居て、まだこちらを振り向いていない。

だって、それは突然の出来事だから。

だから、僕はそれを無駄にしない。

振り上げられた右の手首を掴み、後ろへと回そうとする。

だが、扉が開いた事には気付いてたのか、腕を振り回して抵抗される。

その際、頬に熱を感じた。痛い。

けれど、それで怯んではいけない。

こんな事なら、父さんに護身術でも習っておけば良かったなあ、と後悔しつつ、瑞稀の右手を後ろの棚へと叩きつける。

その衝撃でかナイフが落ちた音が聞こえる、が抵抗はまだ続く。もう、もみくちゃだ。

なんて思った瞬間、瑞稀の身体が浮いた。

僕は咄嗟に瑞稀を放すと、彼女はカウンターを越えて、床に叩きつけられた。

どうやら、榊がやったようだ。

とりあえず、一段落といったところかな。

安堵の吐息をつきつつ、頬に手を添えていたいっ！

不覚はないようだ、それでも痛い。

手を見れば、血がついていた。

……でも、これくらいで済んでよかったと、思っべきなのかなあ。しみじみとそう思いながら、カウンターを回って瑞稀の前へ。

床にうつ伏せにされ、腕を後ろに回して押さえつけられている瑞稀は、苦しそうな表情を僕に向けた。

その目は、僕を睨み付けられている。

「どうして……そこから!？」

「うーん、なんて言えば良いのかなあ」

あのね、と前置きして、カウンターの後ろの隠し扉を指差す。

「あれは、隠し通路に繋がっているんだよ。ここに住まう情報屋が隠れる為のね。僕はそこから侵入し、出る機会をうかがってたって

訳

もう一つ、この隠し通路の途中には部屋がある。

その場所に佐々木さんは避難していて、僕はその部屋の電話番号を知ってた。

だからこそ、電話に出て欲しくなかった訳だけど、どうやら非難した為に出る事が出来たようだ。

その先は、外から入れる場所を使って佐々木さんと合流し、今に至る。

さすがにこれは、瑞稀に説明出来ないけど。

「貴様如きが私にどのような指示を出すのかと思えば、時間稼ぎと隙作りだと言われて驚いた。簡単過ぎるな」

「そんな文句を言いながらも、協力してくれて助かったよ。——ああ、そうそう。その店員さんは情報屋じゃないよ。本物はあの通路の先に居るんだ。人違いだったね」

言った瞬間、瑞稀は鳩が豆鉄砲を食らったような表情になった。でも、知ったこっちゃないよ。

僕が聞きたい事は、ちゃんとあるんだから。しっかりと、答えてもらわないとね。

「さて。もう君の負けも同然だから、聞くよ？ 何故、慎平を殺したと思って思ったの？」

問い掛けた瞬間、瑞稀の目の色が変わった。憎しみの、もしくは怒りの色へと。

「慎平君…… 慎平君はね、女子生徒行方不明事件が起きてから、変わっちゃったんだ。僕よりも事件の調査ばかり構って、被害者の女

の子にばかり接触して。僕は、僕はもう止めてって言ったのに、もう少しなんだって言って、女の子や周囲の人に聞き込みを続けたの」

このままじゃね、このままじゃね、と言って必死に訴える。

「慎平君、他の女の子のところに行っちゃうかもしれない！ 出会いはなんて、どこであるかわかんないんだから！ だから、だから今の内に殺しちゃえば、慎平君は慎平君のままで僕の中に残るんだよ！ 素敵でしょ！？」

それは、歪んだ愛情だった。

榊が、行き過ぎた愛は憎しみや殺意に変わる、と言ってたのがなんとなく分かる気がする。

それは、相手を好きであればある程、他の人に取られる可能性が出た瞬間、殺そうとするのだ。

他に行く彼を見たくないから、今の彼を目に焼き付けて永遠のものにする。

「そしたら、フレーズヴェルグが声を掛けて来た。そして、指示通りにやったら殺せたの！ これで、慎平君は僕だけのモノなの。生きていた慎平君は、僕なんてどうでもいいって思ってるからもう嫌い。私の中に居る慎平君は、他の女の子に目移りしない、大好きな慎平君！」

フレーズヴェルグって人は、弱った人間の心に漬け込むのが上手いようだ。

僕は、そんな人を許せないなあ、さすがに。

「君の言いたい事は分かったよ。でもね、一つだけ言っておくよ。確かに慎平は構う相手を間違っていただろうけど、君をどうでもいい

いなんて思っていないと、僕は思うよ」

だって、

「拷問された時、情報源が君だって事、言わなかったんだろ？」

「だって、それは――」

「不器用な男が、精一杯な状態であつても守ったんだ。それだけで十分じゃない？」

僕も十分、不器用だけど。

と、その時だ。

瑞稀が、ぐえつという声を上げた。

護が、彼女の腕を更に締め上げたのだ。

「何を驚いた顔をしている。話は終わったのだろうか？　なら、次は私の番だ」

言っている間にも、瑞稀の腕は少しずつ背から首へと曲がって行き、上にあがっていく。

間近に居る僕が止めに入ればいいのだけでも、身体が動かなかった。

武術とか、そういう類を習った部類に入らない僕でも全身で感じ取れる程、殺意が柵から出ていた。

無表情ながらも、怒りのこもった目が瑞稀に向けられ、腕に力がかかる。

今にも肩が外しそうな程、力強く。

そして、限界に達しそうになったその瞬間。

カランツという、スプレー缶が床を跳ねるような音が三回程鳴って、

「――っ!？」

眩い閃光が、店内を襲った。

Answer・27：二騒動目を終えた喫茶店で、三騒動目は起こるのか。

目映い閃光が全員の視界を奪う。

瑞稀を睨んでいた護を含め、その場に居た全員が音のする方を見てしまい、目に直撃してしまったのだ。

それとほぼ同時、入口が勢いよく開く音が聞こえ、多数の足音が響く。

「全員！ その場にふせ……ろ？ ……どうなってるんだ、一体」

呆けた顔で店内を見渡す男、剛田 孝則は、視界に護を見つけて表情を変える。

早歩きで彼に近寄り、瑞稀を押さえつけている腕を鷲掴みにした。対し、視力が少しずつ回復した護は、舌打ちを漏らす。

「貴様か。邪魔しないでもらえるか？ 今は私が――」

「条件を忘れたとは言わせないぞ。犯人はこちらで確保する、そういう約束だったよな？ 思い出したなら、これ以上こいつに手を出すな」

数刻の睨み合い。

それが終わった時、護は無言でその手を放す。

開放されて膝を折った瑞稀は、すぐに孝則の手によって起き上がらされ、彼の部下に連れて行かれた。

その際、彼女の手首に手錠が掛けられた時、秋葉の眉が潜められる。

だが、それも一瞬の事だ。

「無能の警察が、珍しく早い到着だったな」

「ああ、その事についてだがな。実はつい数十分前、署に通報がメールで着たんだ。一連の犯人を見つけたってな。証拠として添付されていたデータには、松下 瑞稀の犯行画像や動画、そしてこの店員を人質にとっている画像まであったからな。大急ぎで向かって来たんだ」

「証拠、だと？　つまり、その送り主は裏切り者か。……或いは、黒幕か」

ふと、そう言った瞬間に、護は何かに気付いた。
その瞬間、あたりを忙しく見回し、何かを探す。

「どうした、榊」
「この店に、裏切り者か黒幕が居た事になる。例えば、そうだ。その一般人共」

彼が指差す先は、事件に巻き込まれた一般人達。
皆は護に指差された事に怯え、一瞬身を震わせた。
その反応に護は、微笑を作って指を下ろす。
そんな筈は無いか、と呟きながら。

「……で、犯人は捕まったのだ。約束通り、部下を釈放してくれるのだろうな？」

「約束通り、犯人を受け渡そうとしなかった奴が何を言う。——ああ、わかったわかった、そう睨むなって。署に戻ったら、釈放の手続きをしておく」

「それでこそ孝則だ。感謝するよ」

さてと、と呟き、護は振り返る。

視線を向けようとした先は秋葉だが、視界に映ったのは男の中背だった。

その男は方で息をしており、その向こう側に居る秋葉は、尻餅をついて頬に手を添えていた。

どうやら秋葉は、男に殴られてもしたようだ。

警察の男、伊藤 健一に。

現状は、両者が目を合わせるという、硬直を見せていた。

それから数刻経ち、不意に健一は踵を返す。

その時、一瞬だけ護と目を合わせると、軽く会釈して去って行った。

後に残る秋葉は、父親の背中を見続けている。

護は、そんな彼に歩み寄り、手を差し出した。

「立て。私が誰かに手を差し出す事は滅多にないのだから、早くしろ」

「うえ？ …… ああ、うん」

曖昧な返事をして手を取った瞬間、秋葉の身体は跳ねるようにして持ち上がった。

あまりの勢いに、彼はキョトンとした目で護を見据える。

だが、そんな事などお構い無しに、護は話を始めた。

「今回の件は、貴様の助けがあつたからこそ、早期に解決出来たも同然だ。故に、礼を言っておこう。ありがとうと」

「さ、榊が礼を言っただと……」

「失礼な。私は組織の頭首だぞ？ 礼を言えなくてどうする」

驚愕した孝則に対し、苦笑混じりに文句を言う護は、秋葉に片手を上げ、踵を返した。

また会おう先輩、という言葉を残して。

「今日の榊、なんか変だな。熱あるのか？」

心から心配そうな表情を見せる孝則を無視し、出入口で部下に何かを聞いている風に近い。

「どうした？ 何を探している」

「いや、なんや。閃光手榴弾が爆発する前くらいまで、一般人の中にパソコン持った少年がおったんやけど、急に居なくなっただんや。わいの見間違いかどうか、聞いて回ってたんや」

「パソコンを、持った？」

彼は一つの情報を口内で咀嚼し、考える。

果たして、そこから導き出されたのは、一つの可能性。

……裏切り者、もしくは黒幕か！

彼は思う、確かに一般人の中に居たと。

しかし、彼が気付いた時には、既に居なかったのだ。パソコンを持った少年は。

不意に、ふふつと笑い声を漏らす。

「総員、撤収だ！ 今回は、私達の勝ちとし、幕を下ろすでしょう」

言葉と共に、おう！ と声が響く。

そうして彼らは、喫茶店を後にした。

A n s w e r ・ 2 8 : 一応、一件落着けど。驚きの嵐は止まらない

嵐のように去って行った榊や、その後を追うようにして出て行った警察達を目で見送り、溜息をつく。

右の頬の傷は未だに痛み、同時に殴られた左の頬もヒリヒリと痛む。

例えるなら、両手に花だ。嬉しくないけど。

見ると、残されたお客さん達はそろそろと帰って行き、残ったのは僕と鹿嶋先輩、それと店員さんだけだった。

普段、事件に遭った現場には警察が残る筈だけど、残らないって事は、榊の指示なのかな。

撤収というあの言葉は、全員に言ったのかもしれない。

閑話休題。

ともあれ、一件落着つてとこかな。

と、その時、僕の携帯がバイブレーションにて着信を知らせた。確認してみると、メールだった。

差出人は佐々木さんだ。

文面には、現状を立て直すから店を出て行って欲しい、とだけ書かれていた。

…… 大変だなあ。

もしかしたら移転、悪く行けば無期限の閉店となるだろう。

そう思いながら、椅子に座って円テーブルに片腕を載せて寛いでいる鹿嶋先輩の下へと向かう。

なんだろう、鹿嶋先輩ニヤニヤしてる。

あまり見た事の無い光景に、思わず一歩前に出るのを躊躇った。

「…… 良い事あった？」

第一声が、正解だったようだ。

ニヤニヤが更にニヤニヤになった。その内ニヤニヤになるのかな、要らないけど。

「ん、良い事か？ よく聞いてくれた！ 実はな——」

「とりあえず、店を出ようか。もうすぐ閉店になるらしいし」

出鼻を挫かれた鹿嶋先輩は、若干不機嫌そうな顔になるが、僕の言葉に従って席を立つ。

そして、店を出た瞬間に彼女は話を再開した。

「実はな、佐々木に頼んで連絡先を教えてもらったのだ！」

「連絡先？ 佐々木さんの？」

「違う、違うぞ秋葉！ えと、なんて言えば良いのか……あれだ、この間話した……その……」

「鹿嶋先輩の好きな人？」

それだ！ と大声で言っで、すぐ赤面。

恥ずかしさが頂点に達したのか、耳の周辺から顔全体が真っ赤である。可愛いのである。

……にしても、やっと連絡先を手に入れたのか。

「本人の携帯番号？ それともメールアドレス？」

「いや、その者の親友のメールアドレスだ。確か、圭吾とか言うらしい」

……え？

はい？

「ええええええええええ！？」

思わず、道のど真ん中で大声を上げてしまった。

それ程までに、僕は驚いていたのだ。

だって、好きな人の親友の連絡先を聞いてどうすんのよ？

もしかしたら、佐々木さんが意地悪して親友のなら教えてあげるとでも言ったのかもしれないけどさ！

それでも。

それでも、鹿嶋先輩の行動には、毎度の事ながら理解出来なかった。

いつも通りって事で、良いのかな。

何だかんだで、自宅前。

父さんに殴られた事もあってか、入り辛かった。

だが、時刻は既に七時を回っており、そろそろ帰らないと要らぬ心配をさせてしまう。

故に深呼吸し、ドアノブを引いて中へ。

玄関には電気がついておらず、リビングの光がドアから漏れていた。

靴を見れば、父さんは帰って来ている。

……なんだかなあ。

いつもなら仏にリビングに入るのだけど、なんだろう。

気付くと、僕はリビングに聞き耳を立てていた。

聞こえてくるのは、母さんの声。

「——にしても、本当に健一さんは不器用だな。ガツンと一発入れたのなら、伝えたい事も吐き出してくれば良かったのに。帰ってくるなり落ち込んだじゃって」

どうやら、父さんも居るらしい。
それで……説教？

「ってか許可したのなら、最後まで見届けてやれば良いのに。まあ、心配になるのも分かるけど」

「……頬に。頬に傷を負っているのを見て、ついな」

「傷を増やさせてどうする。無茶をしたからか？ 健一さんまで無茶したら、どうしようも無いだろうに」

「……………すまん」

私に謝ってどうする、という言葉と共に溜息が聞こえ、沈黙が始まる。

……心配させてしまったんだなあ。

平手で殴られた時、息を荒くして肩で呼吸していた父さんは、何か言いたそうだったのに、結局は何も言わずに行ってしまった。

もしその時、周りに誰も居なかったとしても。

父さんは、何も言わずに去っていただろうなあ、と想像する。

母さんが言うように、不器用だからかな。

男って、不器用だ。少なくとも、僕の周りの男は。

もちろん僕もだけど。

ふと、思う。

僕がもつと起用で、慎平を上手く説得出来ていたら、もしかした

ら――

「わっ」

「うわあああああああああああああ！！」

ビックリした、心臓が飛び出ると思っくらしいにビックリした！

誰かと思い、睨むようにして振り向くと、そこには浅黒い色をした肌の少年が居た。

僕の従兄弟であるリックだった。
制服姿という事は、部活帰りかな。

帰って来た事に気付かなかった……。

彼の小さく前倣えした両手は、僕を驚かした体勢のままであることを示している。

だが、とうの本人は目を丸くして驚いていた。

「いや、驚いたのは僕だって」

「そこまで驚くとは思わなかった。面白かったから良いけどっ！」

言って、親指を突き立てる。

「そんな事より、入らないのか？　なら退けよ。俺は茶が飲みたいんだ」

切り替えの早いリックは、そう言い終わる前にドアノブに手を掛け、ドアを開ける。

僕の制止の手は、全然間に合わない。

そうして開け放たれたリビングには、カーペットの上で正座している父さんと、椅子に座って説教体勢の母さんの姿があった。

二人とも、こちらを見ている。

片方は戸惑った顔で、もう片方は笑いを堪えた顔で。

誰がどの表情なのかは、言うまでも無いだろう。

ちなみに、リックはその光景を見て一瞬含み笑いを見せたが、すぐに表情を変えて冷蔵庫へと向かっていた。
もっと気にしろよ。

暫くして、父さんが何かを言おうと口を開く。

「あ、秋葉、さっきは——」

「だ、大丈夫！　別に傷ついてなんていないから、気にする事無い

よ！ 大丈夫、うん大丈夫だからね！」

吐けるだけ吐き捨てて、逃げるようにその場を去った。

大急ぎで階段を駆け上がる。途中、転びそうになりながら、
今、すっごく恥ずかしい。

頬が、耳が熱い。

鏡を見れば、鹿嶋先輩みたく真っ赤っかだろう。

それ程までに、あの状況での突然の鉢合わせは、恥ずかしかったのだ。

けれど、そんな恥ずかしさから逃げ出せたのは、母さんのおかげなのかもしれない。

だって、あの人は説教という状況でも、全裸だったから。

緊張から吹っ切れた理由は、それだけで十分だ。

Answer・29：全部終わって、一段落。そして、次の日常へバトンタッチ

あつという間にゴールデンウィーク最終日。

あれから、色んな事があった。

美咲とまた遊んだり、佐々木さんの喫茶店が移転したり、榊に呼び出されたり、葬式に出たり。

喫茶店での事件の翌日、朝早くに美咲から連絡が入り、その日まるまる会う事になった。

行ったのは、生まれて初めてのカラオケ。

緊張しつつ自分の選択した歌が始まり……初っ端から音を外した。帰りたいと思う程、恥ずかしかった。

けどまあ、美咲の歌声は綺麗だったからプラマイゼロかな。むしろプラスだ。

そのまた翌日。佐々木さんから喫茶店を移転して早速オープンした、という連絡があった為、メールで美咲に教えた後で向かってみると、鹿嶋先輩と美咲が楽しそうに談笑した。

行動の早いお二方である。

暫くの間、蚊帳の外状態になって寂しく飲み物を飲んでいたのは、言うまでも無い。

ってか佐々木さん、開店早過ぎです。

そして最終日。

朝からベッドの上でゴロゴロしていると、突然携帯に非通知から電話が入った。

出てみれば、相手は榊の側近である桜と名乗った。

何故、僕の番号を知ってるのかと一瞬思ったが、多分着信履歴から掛けたのだろう。

話を戻して、桜さんによると、先日の協力に対するお礼がしたいから、家の前まで来て欲しいとの事。

その為、指示に従って家を出た瞬間、顔に何かを被せられて拉致

されてしまった。

また、被せられるのと同時に睡眠薬が何かを飲まされた為に眠ってしまい、気付けば和室に居て、柵と他数名が居た。

柵を通王に置いて、向かって左に着物を纏った少女（多分桜さんだろうか）、右に大男、そして後ろに部下と思われる男が数名。

そして、柵が堅苦しい礼の言葉を述べて、箱を差し出して来たのだが、聞けば粗品だという。

どうせろくな物じゃないだろうと思う反面、相手が組織のトップである故に、少し期待していた為、言われるがままに開けて見る。

洗剤一式だった。花王の。

だから思わず、「洗剤じゃん！」と叫んでしまったが、失礼じゃなかっただろうか。

渡した本人は、不満なのか？　と言いたげな表情で小首を傾げ、桜さんは青ざめ、大男は大爆笑していたから、良しとしよう……？

その後、桜さんの運転で自宅へと送迎してもらい、今に至る。

葬式の事は……敢えて言わないでおこう。良い話なわけ、無いからね。

そんなこんなで現在、朝と同じくベッドにてゴロゴロ中である。ベッドから見える窓の外はオレンジ色をしており、夕刻である事を教えてくれている。

……今年のゴールデンウィークはのんびりできなかったなあ。良い意味で。

しみじみと、そんな事を思いながら夕焼け空を眺めていると、ポケットには入ったままだった携帯が震えた。

誰だろうかっと思いつながら携帯を聞くと、それは美咲からのメールだった。

件名は無く、本文が長々とあるようだ。

読んでみると――ゴールデンウィークの間は、毎日のように遊んでいたありがたいありがとうございました！　すごく楽しかったです（笑顔の絵文字）

けれど、腑に落ちない事があります。喫茶店で鹿嶋さんから聞いたんですが、先輩はメールでの告白は問題無い、と思っているらしいですね？

でも、それって間違っていると思うんですよ。

そりゃ、告白の手段としてはありかもしれませんが、本当の気持ちは伝わらないですよ？

やっぱり、文字では無く、言葉で伝えるべきだと思っんですよ。ラブレターだって、好きだって伝えるよりも、特定の場所に呼び出してそれから告白するってパターンの方が多いんですから。

……えと、上手く伝わりましたかね？ つまりは、こういう事です。

——そこで文は途切れて、下へと少しスクロール。
するとそこには、

——先輩、あなたの事が好きです。もし、先輩に彼女が居なくて好きな人も居なければ、私と付き合って下さい！

……実は、中学生の時から好きでした。中学三年生の頃、今の高校に見学に来た時に先輩の、美術室に飾ってあった絵を初めて見て、一目惚れました。あ、絵に、ですよ？

それからというもの、しょっちゅう見学に来て、新しい絵が飾られる度に感動して、いつしか描いた人に会ってみたいと思うようになって。

それで、ある日偶然会って、短いながらに話をして、その言葉に心引かれて。

それからは頑張ってこの高校に入る為に勉強して、入学する事が出来て、心から驚き、喜びました。そして、同じ部活に入ろうと思いい、意を決して放送部に行ってみれば、先輩がそこに居て、ペガサスの絵を描いていて。

覚えていますか？先輩が美術室に飾った絵で、私が初めて見た絵は、ペガサスだったんですよ？

その後、先輩といっぱい話して、先輩と一緒に遊んで、気付いた

んです。

私は、この人が好きなんだなって。先輩の隣に居ると、心が落ちていて、すっごく楽しくって……言葉に出来ない気持ちがたくさん生まれるんです。だから……先輩、好きです。

どうですか？ 文章での告白だと、上手く伝わった感じがしないでしょ？ というか、私が伝えきれていない感じがします。

っと、長文失礼しました！

では、また明日、会いましょう。でも、お返事はいつでも良いです！ では。――

そこまでで、文は終わっていた。

後に残るのは、なんとも言えないもどかしい気持ち。

……ああ、確かに文じゃ良くないなあ。

なんだろう、心がモヤモヤする。

面と向かって言われたわけでは無いから、相手がどんな気持ちで伝えたのかが分からない。

そして、当日の返答手段はメールか電話に限られる。

でも、何かを介して返事を伝えるのは申し訳無くて。

だからといって、今から会おうっていうのも申し訳無くて。

故に、合えるのは明日。

それまでに心を落ち着かせなきゃいけない。

僕は今、かなり取り乱していた。

どうやら僕も、結構不器用なのだと再認識させられてしまった。

「数日振りの姫！ 好きどうはっ！」

「何遍も同じ手が通用すると思ったら、大間違いよ！」

朝。

いつもより少し遅めに登校してみると、校門前にて榊が気の強そうな少女に腹部を殴られ、うずくまっている光景があった。

どうやら、じゃれ合っているようだ。

……じゃれ合っている、で合ってるよね？

少なくとも、その光景を見ている皆はそう思っていると信じよう、うん。

それにしても、朝から元気なお二人である。

もちろん、登校している他の学生は、元気そうでも眠そうでも憂鬱そうでも、彼らを避けて校舎へと向かっていた。

僕はといえば、最初から距離を置いて、校門を潜ったところだ。その時、不意に倒れている榊と目が合い、笑みと共に目伏せでありさつされた。とりあえず、僕は会釈。

「本当、元気ですね。あの二人」

笑い声と一緒に聞こえた言葉は、僕の左側を歩く美咲のものだ。

彼女とは数分前、到着した駅前で偶然会ったのだ。多分。

最初、驚いて思わず足を止め、次いで胸の鼓動が速まった。

けれど、機会は今しか無い、と僕は思った。

この時、部活の時に伝えれば良いという考えは、皆無だ。

そして、僕は昨日のメールに対する返事を伝えた。

なんて伝えたかは、言うまでも無いだろうか。

一緒に登校している時点で、ねえ。

ともあれ、急に日常が変わった高校生活を楽しんでみるのも、悪くないよね？

誰に問い掛けた訳でも無く、疑問系の言葉を内心で呟き、僕は校舎へと向かって行く。

新しい隣人と一緒に。

Answer・29：全部終わって、一段落。そして、次の日常へバトンタッチ

ここまで読んでくれた皆様、お疲れ様です。
どもー、Izumomです。

気分転換に、という考えから連載を始めたこの作品ですが、気付けば予想以上に話数が進んでいました。

それはもう、「フラグメント・オブ・タイム」の更新を休んでまで。

なのに読み返してみれば……なんか自己満足の自慰作品になった気が（殴

「そんな事ねーよ」とか言ってくれる方、是非コメント下さい。

そして良かった部分を箇条書きで（殴&蹴

自重します。

——閑話休題。

さて、今作品が何故GWの時期を選んだのかと誰も聞いてないけど一応言いますと、「いつもの空」とクロスオーバーさせています。

Izumomはクロスオーバーが大好きな為、懲りずに年代、時系列を合わせていますw

まあ、両方読んだ事のある人にとっては、「あ、もしかしてこいつは」とかありますが、偶然見つけて暇潰しに読んだ人にとっては「え？結局、あいつは誰だったの？」的な感じになってると思います。

例を挙げれば、喧嘩とかで有名になった人の件でしょうかw

さて、そんなこんなでようやく完結を迎えた訳ですが、この作品のキャラの一部はIzumomの作品である「いつもの空+時々雨」にて使う事があると思いますので、この作品を気に入ったという方

は、是非「いつもの空」の方も読んでみて下さい。

もちろん、来週から連載を再開する「フラグメント・オブ・タイム」もよろしければどうぞ。

おっと、思った以上に長文になってしまいました。

それでは、本編・後書きまで飽きずに読んで下さった読者の方に感謝しつつ、また別の作品でお会いしましょう。

では、また

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5666j/>

普通人×異常人＝

2010年12月20日11時41分発行